

# 大手町遺跡

第1～4・6次調査発掘調査報告書

神戸市都市計画道路山麓線街路築造事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

神戸市教育委員会



巻頭写真図版 1  
第4-6次調査  
SD01出土遺物



巻頭写真図版 2  
第4次調査SB01出土  
絵画土器

# 大手町遺跡

第1～4・6次調査発掘調査報告書

神戸市都市計画道路山麓線街路築造事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

神戸市教育委員会

## 序

あの阪神大震災からもう8年の月日が過ぎました。神戸市では、災害に強い都市づくりを目指し、多くの地域で都市区画整理事業などの震災復興事業を行なっています。今回報告する発掘調査の契機となった都市計画道路山麓線築造事業もその一つで、神戸市の幹線道路として今後重要な役割を果たすものと思います。

調査の結果、弥生時代の祭りに使われた土器や、江戸時代の庄屋屋敷跡など多彩な時期の埋蔵文化財が発見され、地域の歴史を考える上で重要な成果を得ることができました。この報告が市民の皆さんにわずかながらでも役立てれば幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた方々、諸協力機関に厚く御礼申し上げます。

2003年3月  
神戸市教育委員会  
教育長 西川 和機



## 例　　言

1. 本書は、神戸市都市計画道路山麓線街路整造事業、およびその代替地宅地造成事業に伴い、神戸市都市計画局より委託され、神戸市教育委員会・(財)神戸市体育協会が実施した、大手町遺跡の第1～4・6次の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本報告書の発掘調査地点は神戸市須磨区大手町4丁目・5丁目に所在する。
3. 発掘調査は、第1次調査は山本雅和、第2・3次調査は須藤 宏、第4次調査は中谷 正、第6次調査は内藤俊哉が担当した。なお、調査期間・調査面積・現地調査時の旧次数と新次数の対応関係については、第1章第3節に記載してある通りである。
4. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の1の地形図「神戸市首部」・「神戸市南部」・「前開」・「須磨」、神戸市発行の2500分の1地形図「桜昌寺」・「長田」・「東須磨」・「大橋」を使用した。
5. 本書に用いた方位・座標は、平面直角座標系第5系に属する。また、標高はT, P, で表示した。
6. 本書の執筆は、第1・3章は中谷が、第2章は各調査担当者が執筆、及び遺物実測、トレース作業を行なった。但し、第2章第3節は、すべて中谷が行なった。編集・校正は、中谷・山本が行なった。
7. 遺構写真は、各調査担当者が撮影した。遺物写真については独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所 牛嶋 茂氏の指導を得て、杉本和樹氏が撮影した。また金属製品のX線写真については千種浩・中村大介が撮影した。
8. 本書に係わる遺物は、神戸市埋蔵文化財センターに保存してある。
9. 第2・3次調査の陶磁器類については、有田町歴史民俗資料館 村上伸行氏・同資料館 野上雄紀氏・波佐見町教育委員会 中野雄二氏に御教示いただいた。
10. 第6次調査で検出された地震痕跡については、独立行政法人 産業技術総合研究所 関西地質調査連携 研究体長 寒川 旭氏に御教示いただいた。
11. 第4次調査の一部の石材は、(株)京都フィッショントラック 橋原 徹氏に鑑定を依頼した。
12. 現地発掘調査においては、下記の方々のご協力を得ました。記して感謝いたします。  
江戸一貴・川田勝則・笠山美津子・鈴木弥生・日野祥子・三木雅子



# 本文目次

序	
例言	
第1章 はじめに	1
第1節 遺跡の立地	1
第2節 歴史的環境	2
第3節 調査の経緯	6
第4節 調査体制	8
第2章 調査の成果	10
第1節 第1次調査	10
1. はじめに	10
2. 調査の概要	11
3. 小結	15
第2節 第2・3次調査	16
1. はじめに	16
2. 調査の概要	16
3. 江戸時代の遺構・遺物	23
4. 室町時代の遺構・遺物	40
5. 古墳時代～室町時代の遺構・遺物	41
6. 弥生時代の遺構・遺物	43
7. 繩文時代の遺構・遺物	59
8. 小結	59
第3節 第4・6次調査	61
1. はじめに	61
2. 調査の概要	62
3. 古墳時代以降の遺構・遺物	64
4. 弥生時代の遺構・遺物	66
5. 小結	84
第3章 まとめ	85



## 挿図目次

- Fig. 1 大手町遺跡の位置  
Fig. 2 大手町道路周辺の遺跡 (S = 1/25000)  
Fig. 3 大手古墳群現況  
Fig. 4 第4次調査 地元説明会風景  
Fig. 5 調査区位置図 (S = 1/2500)  
Fig. 6 第1次調査地位置図 (S = 1/2500)  
Fig. 7 調査区平面図  
Fig. 8 各トレンチの土層図  
Fig. 9 S D01出土土器  
Fig. 10 S K01出土石器  
Fig. 11 S K06出土土器  
Fig. 12 6トレンチ出土土器  
Fig. 13 6トレンチ出土石器  
Fig. 14 S K04出土土器  
Fig. 15 S K05出土土器  
Fig. 16 第2次調査地東部崖下に堆積する洪积砂  
Fig. 17 大手町遺跡第1～3次調査地平面図  
Fig. 18 第2次調査地東部遺構平面図  
Fig. 19 第2次調査地東部北壁土層断面図  
Fig. 20 第2次調査地西部遺構平面図  
Fig. 21 第2次調査地西部南壁土層断面図  
Fig. 22 第3次調査地遺構平面図  
Fig. 23 第3次調査地土層断面図  
Fig. 24 第2次調査地 表土出土の遺物  
Fig. 25 東崖下出土の遺物(1)  
Fig. 26 東崖下出土の遺物(2)  
Fig. 27 S E01平・断面図  
Fig. 28 第2次調査地水琴窟への踏み石  
Fig. 29 S D02出土弥生土器  
Fig. 30 水琴窟 S K09平・断面図  
Fig. 31 水琴窟 S K09の壺と瓦  
Fig. 32 S K16出土遺物  
Fig. 33 S D16付近 (南西から)  
Fig. 34 S D16出土花崗岩製石臼  
Fig. 35 S K06・07 (北から)  
Fig. 36 S X15 (北西から)  
Fig. 37 S X15・S W01平・断面図  
Fig. 38 S X15・S E12平・断面図  
Fig. 39 S X15・S W01出土花崗岩製石臼  
Fig. 40 S X16出土遺物(1)  
Fig. 41 S X16出土遺物(2)  
Fig. 42 S X16出土遺物(3)  
Fig. 43 S X16出土遺物(4)  
Fig. 44 S X16出土遺物(5)  
Fig. 45 2c-2層出土遺物  
Fig. 46 S X03遺物出土状況 (北西から)  
Fig. 47 S D11-165出土状況 (南西から)  
Fig. 48 S D11出土遺物  
Fig. 49 S X03平面図  
Fig. 50 S X03土層断面図  
Fig. 51 S X03出土遺物  
Fig. 52 S R01平面図  
Fig. 53 S R01出土遺物(1)  
Fig. 54 S R01出土遺物(2)  
Fig. 55 S R01出土遺物(3)  
Fig. 56 S R01出土遺物(4)  
Fig. 57 第2次調査地北壁 S R01・S D01土層断面図  
Fig. 58 S D01出土遺物(1)  
Fig. 59 S D01出土遺物(2)  
Fig. 60 S D01出土遺物(3)  
Fig. 61 S D04・S D11平面図  
Fig. 62 S D04遺物出土状況図(1)  
Fig. 63 S D04遺物出土状況図(2)  
Fig. 64 S D04出土遺物(1)  
Fig. 65 S D04出土遺物(2)  
Fig. 66 S D04出土遺物(3)  
Fig. 67 S D04出土遺物(4)  
Fig. 68 S B01平・断面図

- Fig.69 S B01出土遺物  
 Fig.70 第2・3次調査 検出遺構・出土遺物  
 Fig.71 S X04遺物出土状況および出土遺物  
 Fig.72 調査地位図 (S = 1/2500)  
 Fig.73 調査地区割り図  
 Fig.74 基本層序  
 Fig.75 調査地平面図  
 Fig.76 地震痕跡土層断面図  
 Fig.77 S B03平・断面図および出土遺物  
 Fig.78 S D02~05平・断面図  
 Fig.79 S D06・07平・断面図  
 Fig.80 S D01平・断面図  
 Fig.81 S D01出土遺物(1)  
 Fig.82 S D01出土遺物(2)  
 Fig.83 S D01出土遺物(3)  
 Fig.84 S D01出土遺物(4)  
 Fig.85 S D01出土石礫・石錐  
 Fig.86 S D01出土石斧  
 Fig.87 S D01出土石器法量表  
 Fig.88 S X01平・断面図
- Fig.89 S X01出土遺物  
 Fig.90 S X02平・断面図  
 Fig.91 S X02出土遺物  
 Fig.92 S K02出土遺物  
 Fig.93 S B01平・断面図  
 Fig.94 S B01遺物出土状況図  
 Fig.95 S B01出土遺物(1)  
 Fig.96 S B01出土遺物(2)  
 Fig.97 S B01出土石器  
 Fig.98 S B02平・断面図  
 Fig.99 S B02出土遺物  
 Fig.100 S B02出土鉄製品  
 Fig.101 S B02出土石器  
 Fig.102 P 13出土石礫  
 Fig.103 表土採集石斧  
 Fig.104 石材鑑定表  
 Fig.105 大手町遺跡全体平面図  
 Fig.106 第4次調査 S B01出土絵画土器の図像  
 Fig.107 大手町および戎町遺跡周辺微地形図  
 (S = 1/10000)

## 写真図版

### 巻頭写真図版 1

第4・6次調査 S D01出土遺物

### 巻頭写真図版 2

第4次調査 S B01出土絵画土器

### 写真図版 1

大手町遺跡近景（南から）

### 写真図版 2 第1次調査

1. 調査地現況（南から）

2. 3トレンチ S D01全景（西から）

3. 5トレンチ S D01土器検出状況

(南西から)

### 写真図版 3 第1次調査

1. 5トレンチ S K01・SK02（北西から）

2. 6トレンチ全景（西から）

3. 6トレンチ SK06（南東から）

写真図版4 第1次調査

1. SD01出土遺物
2. SK01出土石鎚・6トレンチ出土石鎚
3. SK04出土遺物
4. SK06出土遺物

写真図版5 第2次調査

調査地全景

写真図版6 第2次調査

1. 調査地東部東半（北東から）
2. SX02 粘土塊（北から）
3. SX02 十層断面（南東から）

写真図版7 第2次調査

1. SX03 遺物出土状況（東から）
2. SX03（西から）

写真図版8 第2次調査

1. 調査地東部西半（北東から）
2. SE01（西から）

写真図版9 第2次調査

1. SK09水甕付近遺構検出状況（南西から）
2. SK09（その1、北西から）
3. SK09（その2、北西から）
4. SK09（その3、北西から）
5. SK09（その4、北西から）

写真図版10 第2次調査

1. 調査地西部全景（北東から）
2. SK48（南西から）

写真図版11 第2次調査

1. 調査地西部東半（南東から）
2. SX16・SX15（北西から）

写真図版12 第2次調査

1. SX15（南から）
2. SX15南西の石垣SW01（北東から）

写真図版13 第2次調査

1. SX15下部の井戸SE12（北西から）
2. SE12 断面（北西から）

写真図版14 第2・3次調査

1. 第2次調査 SX12（南西から）

2. 第3次調査 西トレンチ（南西から）
3. 第3次調査 東トレンチ（南西から）

写真図版15 第2次調査

1. SR01（北東から）
2. SR01 221出土状況（北から）

写真図版16 第2次調査

1. 調査地東部西半（西から）
2. SD01（北西から）

写真図版17 第2次調査

1. SD04（南西から）
2. SD04西部遺物出土状況（北西から）
3. SD04東部遺物出土状況（南西から）

写真図版18 第2次調査

1. SD04 土層断面（北東から）
2. SD04 319・311出土状況（南西から）
3. SD04 319等出土状況（南西から）
4. SD04 312・322等出土状況（南西から）
5. SD04 328・334・335・332出土状況  
(南西から)

写真図版19 第2次調査

1. SB01（北東から）
2. SB01 354等出土状況（南東から）
3. SB01 353出土状況（南東から）

写真図版20 第2次調査

1. SX04遺物出土状況・土層断面（南東から）
2. SX04等出土遺物

写真図版21 第2次調査

1. 東崖下出土の遺物(1) 波佐見焼碗
2. 東崖下出土の遺物(2) 有田焼碗
3. 東崖下出土の遺物(3)  
内ノ山窯系呂器手鏡等
4. 東崖下出土の遺物(4) 麹水入

写真図版22 第2次調査

1. 東崖下出土の遺物(5) 波佐見焼・唐津焼皿
2. 東崖下出土の遺物(6) 捕り鉢・皿

写真図版23 第2次調査

1. 東崖下出土の遺物(7)  
肥前系磁器・瀬戸焼磁器等
2. 東崖下出土の遺物(8) 砥・砥石等
3. S X16出土の遺物(1) 肥前系磁器

写真図版24 第2次調査

1. S X16出土の遺物(2) 描り鉢・皿
2. S X16出土の遺物(3) 陶磁器

写真図版25 第2次調査

1. S X16出土の遺物(4) 陶磁器
2. S X16出土の遺物(5) 土師器・瓦器

写真図版26 第2次調査

1. S X16出土の遺物(6) 土師器
2. S X16出土の遺物(7) 土師器

写真図版27 第2次調査

- S X16出土の遺物(8) 土師器・陶器・瓦

写真図版28 第2次調査

- S X16出土の遺物(9) 木製品

写真図版29 第2次調査

- S X16出土の遺物(10) 漆塗り椀

写真図版30 第2次調査

1. S X16出土の遺物(11) 曲物底
2. S X16出土の遺物(12) 下駄

写真図版31 第2次調査

1. S K09水琴窟の壺
2. S K48出土の遺物 描り鉢

写真図版32 第2次調査

- 輸入陶磁器

写真図版33 第2次調査

1. S K16出土上土師器
2. S X15・S D16出土の遺物 石臼
3. S D11出土の遺物 須恵器
4. S D01・S R01出土の遺物 繩文土器

写真図版34 第2次調査

1. 中国製青磁・因縫滑石製石鍋
2. 須恵器・土師器

写真図版35 第2次調査

1. S X03出土の遺物(1) 土師器皿
2. S X03出土の遺物(2) 土師器皿

写真図版36 第2次調査

1. S X03出土の遺物(3) 土師器皿
2. S X03出土の遺物(4) 土師器・瓦・砥石

写真図版37 第2次調査

- S R01出土の遺物(1) 弥生土器

写真図版38 第2次調査

- S R01出土の遺物(2) 弥生土器

写真図版39 第2次調査

1. S R01出土の遺物(3) 弥生土器
2. S D01出土の遺物(1) 弥生土器

写真図版40 第2次調査

- S D01出土の遺物(2) 弥生土器

写真図版41 第2次調査

- S D04出土の遺物(1) 弥生土器

写真図版42 第2次調査

- S D04出土の遺物(2) 弥生土器

写真図版43 第2次調査

- S D04出土の遺物(3) 弥生土器・須恵器

写真図版44 第2次調査

- S B01出土の遺物 弥生土器

写真図版45 第2次調査

- 1層・S R01・S D01出土の石器

写真図版46 第4次調査

- 調査地全景

写真図版47 第4次調査

1. 1区全景(北東から)

2. 1区西・3区全景(北西から)

写真図版48 第4次調査

1. S B03(南西から)

2. P2土層断面

3. P6土層断面

写真図版49 第4次調査

1. S D01遺物出土状況アップ（東から）
2. S D01遺物出土状況（東から）
3. S D01完掘状況（東から）

写真図版50 第4次調査

1. S X01遺物出土状況（北西から）
2. S X02遺物出土状況（北から）

写真図版51 第4次調査

1. S B01遺物出土状況（北西から）
2. S B01遺物出土状況アップ（西から）
3. S B01完掘状況（北西から）

写真図版52 第4次調査

1. S B02（東から）
2. 手培形土器440出土状況（東から）
3. P1弥生土器壺435出土状況（北西から）

写真図版53 第6次調査

1. 調査地全景（北東から）
2. S D01遺物出土状況（東から）

写真図版54 第6次調査

1. 調査地全景（北東から）
2. S D01地震痕跡土層断面（北東から）

写真図版55 第4・6次調査

S D01出土遺物(1)

写真図版56 第4・6次調査

S D01出土遺物(2)

写真図版57 第4・6次調査

S D01出土遺物(3)

写真図版58 第4・6次調査

S D01出土遺物(4)

写真図版59 第4・6次調査

S D01出土遺物(5)

写真図版60 第4・6次調査

S D01出土遺物(6)

写真図版61 第4・6次調査

S D01出土遺物(7)

写真図版62 第4次調査

1. S X01出土遺物
2. S X02出土遺物
3. S K02出土遺物

写真図版63 第4次調査

S B01出土遺物(1)

写真図版64 第4次調査

S B01出土遺物(2)

写真図版65 第4次調査

S B01出土遺物(3)

写真図版66 第4次調査

S B01出土遺物(4)

写真図版67 第4次調査

S B02出土遺物(1)

写真図版68 第4次調査

1. S B02出土遺物(2)
2. S B03出土遺物

# 第1章 はじめに

## 第1節 遺跡の立地

大手町遺跡は、六甲山系西部に流れる妙法寺川右岸の丘陵上に位置する。丘陵は山地部から舌状に張り出し、遺跡の存在する地点は、標高30m前後のなだらかな斜面地で、周辺の集落遺跡と比べ高位に立地している。第1次調査地の東側には比高差2mほどの段丘崖が存在し、第6次調査地西側の大手公園周辺で南西方向に、南側でも大手町4・5丁目と大手町2・3丁目との境界付近で大きく地形が落ち込んでいる。

一方、妙法寺川が形成した扇状地・沖積地は左岸および下流域に発達している。左岸には弥生時代中期の拠点集落である戎町遺跡が存在する。

### 参考文献

高橋 学 「戎町遺跡の地形環境—濱川・妙法寺川流域の地形環境Ⅰ—」『戎町遺跡 第1次発掘調査概報』  
神戸市教育委員会 1989

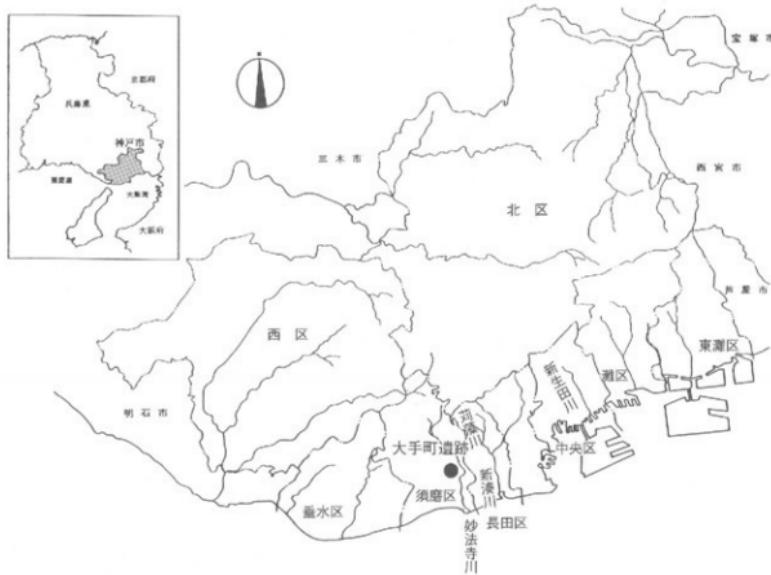


Fig.1 大手町遺跡位置図

## 第2節 歴史的環境

大手町遺跡は、縄文時代晚期から近世にかけて集落が営まれてきた遺跡である。この節では、遺跡周辺の状況を時代毎に追って見ていくことにする。

縄文時代

大手町遺跡では、早期および晚期の土器片は確認されているが、顕著な縄文時代の遺構は確認されていない。しかし若干、東に目を向けると長田区の五番町遺跡<sup>(1)</sup>や長田神社境内遺跡<sup>(2)</sup>で後期・晚期の上器とともに土坑などの遺構も検出されている。

弥生時代

弥生時代前期になると、戎町遺跡<sup>(3)</sup>に水田が築かれ、大岡遺跡<sup>(4)</sup>に初期の環濠集落が築かれるようになる。さらに中期には、戎町遺跡・楠・荒田町遺跡<sup>(5)</sup>などが周辺の集落の中で拠点的な集落へと発展していった。この時期には、このような拠点集落を中心に地域間の交流が活発になった。他にも大手町遺跡・大山町遺跡<sup>(6)</sup>・千歳遺跡<sup>(7)</sup>などでも中期の土器や遺構が検出されている。後期以降になると遺跡の数がわずかに増え、大手町遺跡・長田神社境内遺跡・御蔵遺跡<sup>(8)</sup>・上沢遺跡<sup>(9)</sup>・兵庫松木遺跡<sup>(10)</sup>などで集落が営まれるようになる。特に長田神社境内遺跡では、後期の土器が数多く出土し、その他に小型青銅鏡や土偶など当時の精神生活の一端に触ることのできる資料が出土している。

古墳時代

前期では丘陵上に得能山古墳・会下山二本松古墳・夢野丸山古墳が築かれた<sup>(11)</sup>。これらの古墳は、いずれも平野部を望む位置にあり、地域の首長が葬られた古墳であると考えられている。また、中期には刈藻川河口に念仏山古墳<sup>(12)</sup>、後期にも幾つかの古墳が築かれた。大手町遺跡の北側に位置する大手古墳群<sup>(13)</sup>もその一つである。一方、集落遺跡としては前期から中期には松野遺跡<sup>(14)</sup>・神楽遺跡<sup>(15)</sup>・上沢遺跡・五番町遺跡、後期には大手町遺跡・松野遺跡・神楽遺跡などに集落が営まれた。中でも松野遺跡は特異で、二重の構列のなかに計画的に総柱建物を配置している。その構造から一般の集落とは異なる豪族居館や神社のような建物であったと考えられている。また、神楽遺跡や上沢遺跡では、韓式系土器が確認されており、渡米系氏族との関わりが注目される。

奈良時代以降

奈良時代以後、周辺では須磨駒家関連遺跡とされる大田町遺跡・飛鳥時代の木簡が出土した御幸町遺跡<sup>(16)</sup>、中世の多數の井戸を検出した二葉町遺跡<sup>(17)</sup>、中世集落である権現町遺跡<sup>(18)</sup>、近世に大いに栄えた兵庫津遺跡<sup>(19)</sup>などの遺跡が確認されている。しかし、大手町遺跡ではまとまった遺構は確認されておらず、その時期の実態は判明していない。遺跡の北東側には、遺跡名となっている「大手」の山來とされている松岡城が中世に存在したと伝えられている<sup>(20)</sup>。城は、現在の勝福寺付近に存在したと考えられており、今後の調査によって関連遺構が確認されることが期待される。また、近世には数軒の庄屋屋敷が建てられ、屋敷内には水琴窟や圓池など庭園施設が存在したことが判明している。



Fig.2 大手町遺跡周辺の遺跡 (S = 1 / 25000)

- (1) 松林宏典 「五番町遺跡 第5次調査」『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1997  
阿部敬生 「五番町遺跡 第7次調査」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2002
- (2) 黒田恭正編 「長田神社境内遺跡発掘調査概報」神戸市教育委員会 1990  
藤井太郎 「長田神社境内遺跡 第10次調査」『平成9年度埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2000
- (3) 山本雅和編 「戎町遺跡第1次調査概報」神戸市教育委員会 1989  
同上 「戎町遺跡 第19次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1998  
山口英正 「戎町遺跡 第15次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999
- (4) 前田佳久編 「大閣遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1993  
鎌田 魁・友岡信彦 「大閣遺跡 第7次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999
- (5) 丸山 潔・丹治康明編 「袖・荒田町遺跡Ⅲ」神戸市教育委員会 1980  
丸山 潔編 「袖・荒田町遺跡Ⅳ」神戸市教育委員会 1990
- (6) 藤内秀造・山上雅弘編 「神戸市須磨区大田町遺跡発掘調査報告書 一神戸市大田町郵便局新築工事に伴う発掘調査一」兵庫県文化財調査報告第128集 兵庫県教育委員会 1993  
口野博史・川上厚志 「大山町遺跡」『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994  
山口英正・東喜代秀 「大田町遺跡 第5次調査」『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1997
- (7) 山口英正 「千歳遺跡 第1次調査」・「千歳遺跡 第2次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』  
神戸市教育委員会 2000
- (8) 安田 滋・宮山直人・石島三和編 「御蔵遺跡 第4・6・14・32次調査発掘調査報告書」御昔西地区震災復興整  
理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 神戸市教育委員会 2001  
安田 滋編 「御蔵遺跡 第17次調査発掘調査報告書」御昔東地区震災土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書  
神戸市教育委員会 2001
- (9) 口野博史・阿部敬生編 「上沢遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1995  
斎木 巍・三輪亮三 「上沢遺跡 第8次調査」・池田 究・井尻 格 「上沢遺跡 第9次調査」、斎木 巍・  
余良康正 「上沢遺跡 第16次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2000  
石島三和編 「上沢遺跡発掘調査報告書 一第35次調査一」神戸市教育委員会 2000  
橋詰清孝・石島三和・中谷 正 「上沢遺跡 第32次-1」、橋詰清孝・石島三和 「上沢遺跡 第32次-2」、  
口野博史・関野 育 「上沢遺跡 第33次」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2002
- (10) 松林宏典 「兵庫松本遺跡 第1次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2001
- (11) 喜谷美宣 「古墳時代 前方後円墳の成立と発展」『新修神戸市史 歴史編Ⅰ』神戸市 1989
- (12) 喜谷美宣 「市街地に消えた古墳—念仏山古墳」『神戸市立博物館研究紀要』第6号 神戸市立博物館 1989
- (13) 喜谷美宣 「古墳時代 群集墳の時代」『新修神戸市史 歴史編Ⅰ』神戸市 1989  
平成8年度大手町遺跡第2次調査時に1基の横穴式石室の存在を調査担当の須藤 宏氏が、現地にて確認した。
- (14) 千種 浩編 「松野遺跡発掘調査概報」神戸市教育委員会 1983  
口野博史編 「松野遺跡発掘調査報告書 第3～7次調査」—新長田駅南第2地区震災復興第二種市街地再開発事  
業に伴う一 神戸市教育委員会 2001
- 関野 豊編 「松野遺跡第11～23・25・26・29～31次 水笠遺跡第2・3・5～15・17～21次発掘調査報告書」  
新長田駅北地区震災土地区画整理事業地内の個人住宅などの新築に伴う発掘調査 神戸市教育委員会 2002

- 05 菅本宏明 「神楽遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1981
- 中川 歩・深江英憲 「神楽遺跡 第11次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2001
- 06 西岡巧次・石島三和・阿部 功 「御幸町遺跡 第1次-1・2調査」『平成12年度神戸市埋蔵文化財年報』  
神戸市教育委員会 2002
- 07 川上厚志編 「二葉町遺跡発掘調査報告書 第3・5・7・8・9・12次調査」新長田駅南第2地区震災復興第  
二種市街地再開発事業に伴う一 神戸市教育委員会 2001
- 08 斎木 嶽・家塙英訓 「梅原町遺跡 第2次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2000
- 09 内藤俊哉 「兵庫津遺跡第15次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2001
- 黒田恭正 「兵庫津遺跡第20次調査」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2002
- 10 田辺寅人 「須磨の史話 松園城と足利尊氏」『須磨の歴史散歩』神戸市須磨区役所 1997



Fig.3 大手古墳群 現況

### 第3節 調査の経緯

#### 遺跡の発見

大手町遺跡は、平成7年6月に神戸市が建設する都市計画道路山麓線の代替地宅地造成の際に行われた試掘調査で初めてその存在が確認された遺跡である。同時に山麓線予定地内においても試掘調査が行われ、同町4丁目にも遺跡が確認された。そのため「大手町遺跡」と命名された。その後、平成13年度まで山麓線予定地内で遺跡が確認された範囲を対象に5度にわたる調査を行ってきた。

#### 第1次調査

先の試掘調査を受けて平成7年8月7日～平成7年8月22日まで宅地造成に伴い発掘調査を行った。調査対象面積は、切り上部分・擁壁部分を合わせて約320m<sup>2</sup>である。調査の結果、縄文時代末から近世までの遺物・弥生時代中期から後期の遺構を検出した。なお、8月22日には、文化庁 坂井秀弥調査官が震災復興調査現場として現地視察を行った。

#### 第2次調査

平成8年5月14日～平成8年12月25日まで山麓線築造部分について調査を行った。調査対象面積は約1,350m<sup>2</sup>である。削平・搅乱が著しかったが、弥生時代後期の竪穴住居や、近世屋敷に伴う水琴窟を検出するなど縄文時代～近世の遺構・遺物が確認された。

#### 第3次調査

平成8年7月31日～平成8年8月10日まで山麓線築造部分で調査を行なった。しかし遺構・遺物が希薄なため、歩道部分を調査し終了している。調査面積は約60m<sup>2</sup>である。

#### 第4次調査

平成12年1月6日～平成12年3月1日まで山麓線築造部分について調査を行った。調査対象面積は約490m<sup>2</sup>である。弥生時代中期の溝・土坑や弥生時代末の竪穴住居など良好な状態の遺構が検出された。2月17日には地元説明会を開催し、約550名の参加を得た。

#### 第6次調査

山麓線内調査地西端部分において平成14年1月9日～平成14年2月15日まで調査を行った。調査対象面積は約180m<sup>2</sup>である。調査区中央に地震の影響を受けた弥生時代中期の溝が検出された。

#### 新次数について

神戸市では、調査主体の相違により調査次数に齟齬が生じていた。そのため平成12年度を区切りに調査次数の見直しを図っている。大手町遺跡もその結果、現地調査名第2・4次調査を第2次調査、現地調査名第5次調査を第4次調査と名称変更し、今回の報告も、これらの新次数に従い報告する。なお、新次数第5次調査については欠番とする。



Fig.4

第4次調査  
地元説明会風景

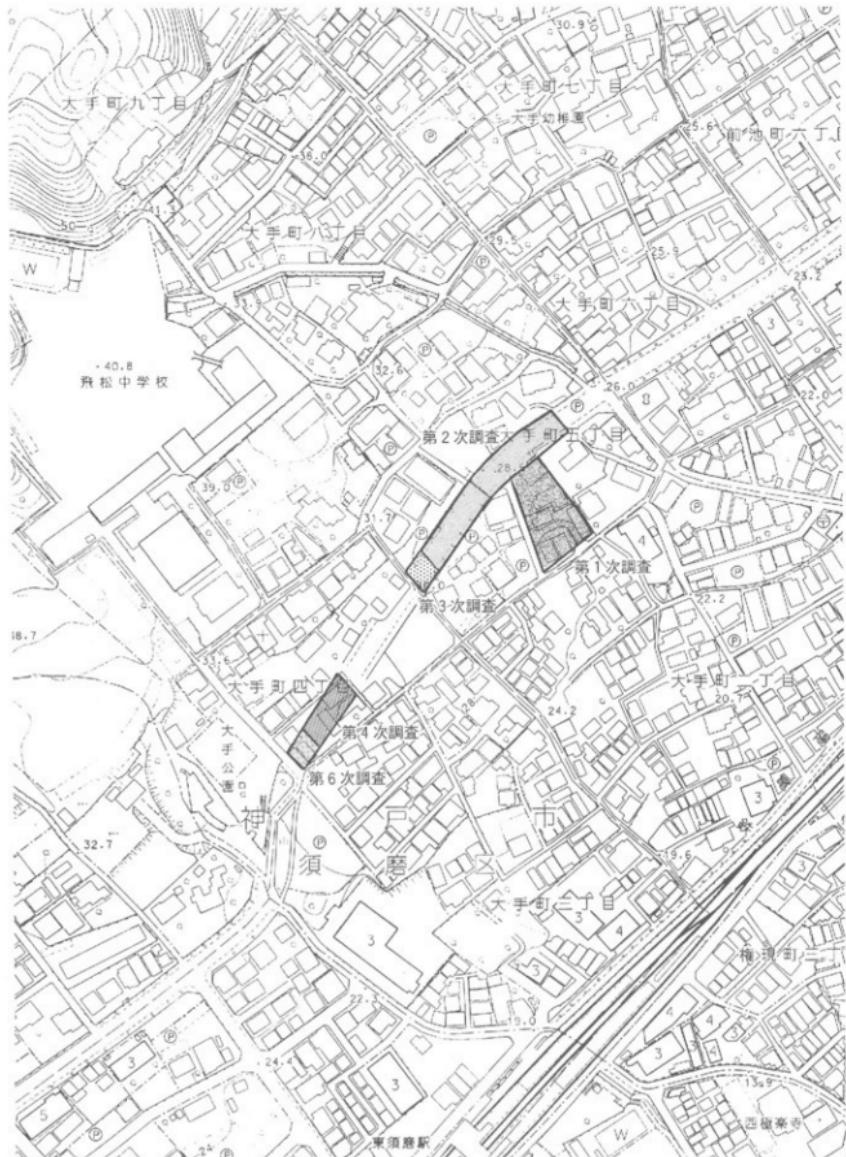


Fig.5 調査地位置図 (S = 1/2500)

## 第4節 調査組織

調査を実施した各年度の調査組織は以下のとおりである。

〔平成7年度〕	神戸市文化財保護審議会 史跡・考古資料担当
	樋上 重光 元神戸女子短期大学教授
	和田 晴吾 立命館大学文学部教授
	山岸 常人 奈良国立文化財研究所遺構調査室長
	神戸市教育委員会事務局
	教育長 小野 雄示 社会教育部長 西川 和機 文化財課長 杉田 年章
	埋蔵文化財係長 奥田 普通 文化財課主査 中村 善則 渡辺 伸行
	事務担当学芸員 菅本 宏明・松林 宏典・川上 厚志 保存科学担当学芸員 千種 浩
	遺物整埋担当学芸員 丸山 潔・橋詰 清孝
	(財) 神戸市スポーツ教育公社
〔平成8年度〕	理事長 福尾 重信 専務理事 田村 篤雄 常務理事 谷敷 勝美
	事業課長 村田 徹 文化財調査係長 中村 善則
	調査担当学芸員 山本 雅和
	神戸市文化財保護審議会 史跡・考古資料担当
	樋上 重光 元神戸女子短期大学教授
	和田 晴吾 立命館大学文学部教授
	山岸 常人 神戸芸術工科大学助教授
	神戸市教育委員会事務局
	教育長 菊本 昌男 社会教育部長 矢野 栄一郎 文化財課長 杉田 年章
	社会教育部幹事 奥田 普通 埋蔵文化財係長 渡辺 伸行
〔平成11年度〕	文化財課主査 丹治 康明・丸山 潔 事務担当学芸員 橋詰 清孝
	保存科学担当学芸員 千種 浩 遺物整埋担当学芸員 藤井 太郎
	(財) 神戸市スポーツ教育公社
	理事長 福尾 重信 専務理事 田村 篤雄 常務理事 中野 洋二
	事業課長 家根 康行 文化財調査係長 丹治 康明
	調査担当学芸員 須藤 宏
	神戸市文化財保護審議会 史跡・考古資料担当
	樋上 重光 元神戸女子短期大学教授
	工楽 普通 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長
	和田 晴吾 立命館大学文学部教授
神戸市教育委員会事務局	
	教育長 菊本 昌男 社会教育部長 水山 衍次 文化財課長 大勝 俊一

埋蔵文化財調査係長 渡辺 伸行 文化財課主査 丹治 康明・丸山 潔・菅本 宏明  
事務担当学芸員 東 喜代秀・井尻 格  
保存科学担当学芸員 千種 浩・中村 大介 遺物整理担当学芸員 平山 朋子  
(財) 神戸市体育協会  
会長 笹山 幸俊 副会長 田村 篤雄 常務理事 田村 篤雄(兼務)  
常務理事 中野 洋二・静観 末一 総務課長 前田 豊晴  
総務課主幹 奥田 普通 事業課主査 丹治 康明  
事務担当学芸員 斎木 巍 調査担当学芸員 中谷 正

〔平成13年度〕 神戸市文化財保護審議会 史跡・考古資料担当  
榎上 重光 元神戸女子短期大学教授  
工楽 普通 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長  
和田 啓吾 立命館大学文学部教授  
神戸市教育委員会事務局  
教育長 木村 良一 社会教育部長 岩畔 法夫 文化財課長 桑原 泰豊  
社会教育部主幹 渡辺 伸行 埋蔵文化財調査係長 丹治 康明  
文化財課主査 宮本 郁雄・丸山 潔・菅本 宏明・千種 浩 事務担当学芸員 斎木 巍  
保存科学担当学芸員 中村 大介 遺物整理担当学芸員 黒田 勝正  
(財) 神戸市体育協会  
会長 笹山 幸俊 副会長 鞍本 昌男 常務理事 梶井 昭武  
総務課長 前田 豊晴 総務課主査 丸山 潔・菅本 宏明  
事務担当学芸員 川上 厚志 調査担当学芸員 内藤 俊哉

〔平成14年度〕 神戸市文化財保護審議会 史跡・考古資料担当  
榎上 重光 元神戸女子短期大学教授  
工楽 普通 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長  
和田 啓吾 立命館大学文学部教授  
神戸市教育委員会事務局  
教育長 西川 和機 社会教育部長 岩畔 法夫 文化財課長 桑原 泰豊  
社会教育部主幹 渡辺 伸行・宮本 郁雄 埋蔵文化財調査係長 丹治 康明  
文化財課主査 丸山 潔・菅本 宏明・千種 浩 事務担当学芸員 内藤 俊哉  
保存科学担当学芸員 中村 大介 遺物整理担当学芸員 関野 豊  
(財) 神戸市体育協会  
会長 矢田 立郎 会長 鞍本 昌男  
常務理事 梶井 昭武 総務課長 谷川 博志 総務課主査 丸山 潔・菅本 宏明  
事務担当学芸員 池山 敏 調査担当(整理作業) 中谷 正

## 第2章 調査の成果

### 第1節 第1次調査

#### 1. はじめに

大手町遺跡は、神戸市都市計画局より試掘調査依頼を平成7年6月7日に受け、都市計画道路山麓線の代替地宅地造成に先立って平成7年6月29日に実施した試掘調査によって、初めてその存在が明らかとなった遺跡である。試掘調査では、敷地内に設定した試掘坑2ヶ所のうち、1ヶ所から弥生土器を包含する遺構が確認されている。

調査地点は標高約28mの地点で、妙法寺川の支流東細沢谷川に沿って西北西から延びる丘陵末端部に立地するものと想定され、調査地点の南側では傾斜が大きく変換し、比較的緩やかな地形となっている。

今回の第1次調査は、神戸市都市計画局が阪神・淡路大震災以後「山麓線」の街路築造事業を復興事業のひとつとして位置づけた上で事業の推進を図っていたため、宅地造成に伴って埋蔵文化財に抵触する切り土部分と擁壁施工部分の約320m<sup>2</sup>について調査区を設定し、発掘調査を実施することとなった。都市計画道路山麓線の計画路線敷のすぐ南側に接する区画で、対象面積は約930m<sup>2</sup>である。

調査はFig. 7のとおり、8ヶ所の調査区を設定して実施した。

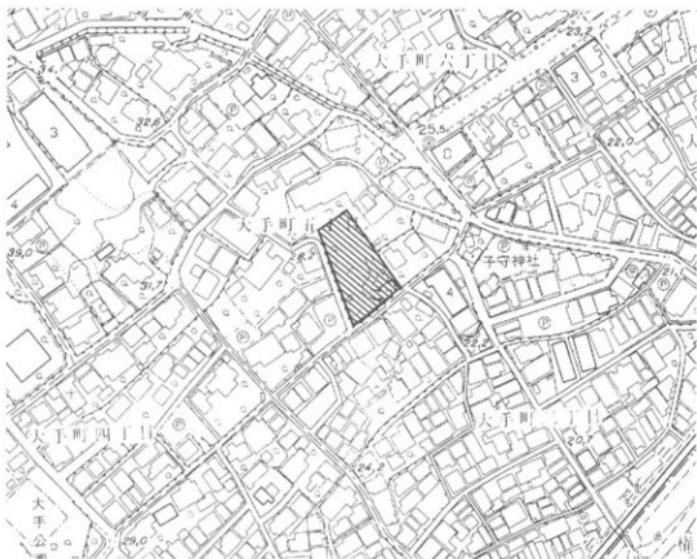


Fig.6  
調査地位置図  
(S = 1/2500)

## 2. 調査の概要

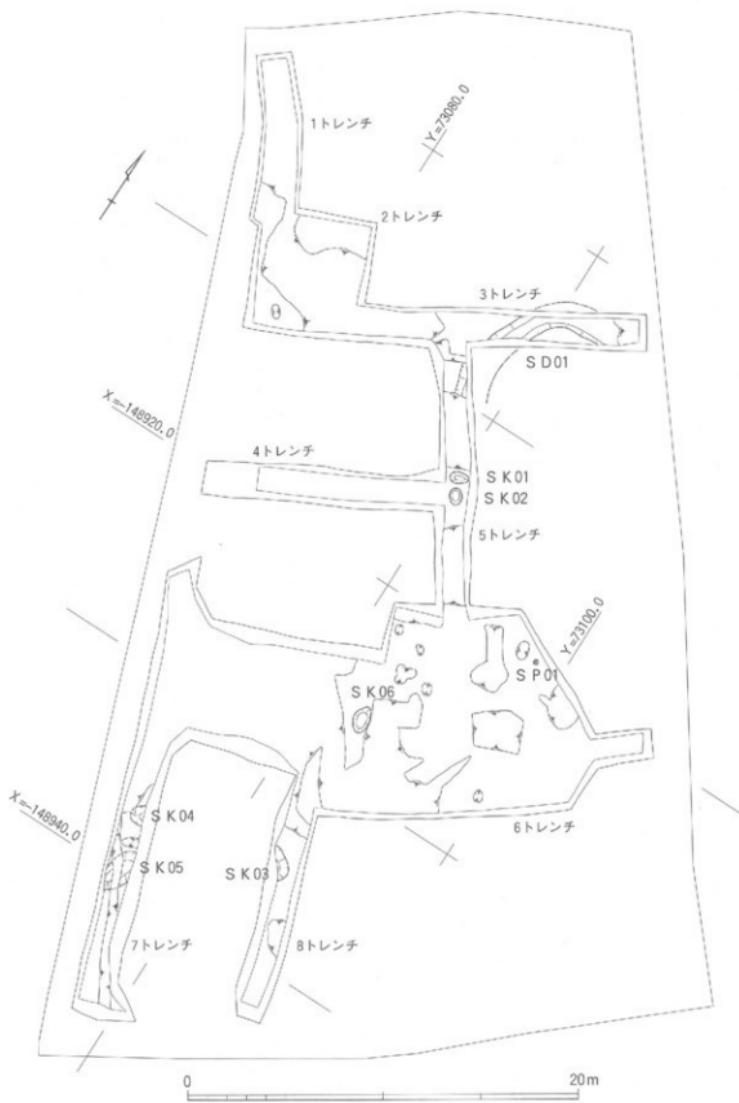
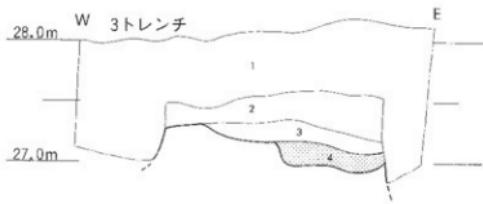
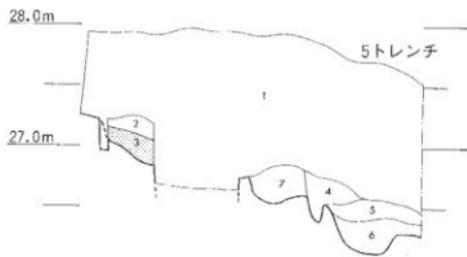


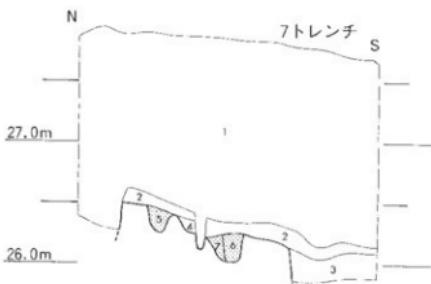
Fig.7 調査区平面図



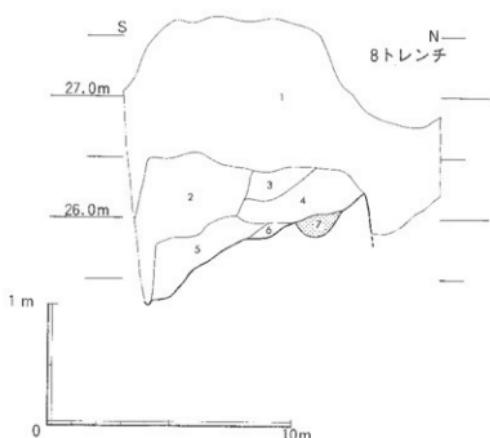
- 1 盛土・擾乱
- 2 暗褐色シルト混細砂～細礫
- 3 暗褐色シルト混極細砂～細礫
- 4 淡黒褐色シルト混極細砂～細礫 (SD01埋土)



- 1 盛土・擾乱
- 2 暗褐色シルト混極細砂～細礫
- 3 暗黒褐色シルト混極細砂～細礫 (SD01埋土)
- 4 暗褐色シルト混細砂～粗砂
- 5 暗灰色シルト質細砂～細礫
- 6 灰褐色シルト質細砂～細礫
- 7 褐褐色細砂～細礫



- 1 盛土・擾乱
- 2 暗褐色シルト混極細砂～細礫
- 3 暗褐色シルト混極細砂～細砂 (暗紫)
- 4 暗褐色シルト混中砂～粗砂
- 5 暗黒褐色シルト質細砂～粗砂 (SK04埋土)
- 6 乳褐色シルト混細砂～細礫 (SK05埋土)
- 7 暗黒褐色シルト質細砂～中砂 (※)



- 1 盛土・擾乱
- 2 乳褐色シルト混細砂～細礫
- 3 褐色シルト混細砂～粗砂
- 4 褐色シルト混細砂～細礫
- 5 暗乳褐色シルト質極細砂～細砂
- 6 暗褐色シルト質細砂～粗砂
- 7 黑褐色シルト質細砂～中砂 (SK03埋土)

Fig.8 各トレンチの土層図

- 1 レンチ 幅1.5m、長さ約8.0mの調査区で、すべて近代以降の擾乱のため、文化財は確認できなかった。
- 2 レンチ 東西約6.0m、南北約6.0mの調査区である。中央に現代の擾乱（田宅の園池？）のため、ほとんど遺構面は残っておらず、遺構は確認できなかった。
- 3 レンチ 幅1.5m、長さ約15.0mの調査区である。西側の約5mは、2 レンチから続く擾乱のため、遺構面は全く存在しなかった。東側は擾乱が少なく、幅0.93m、深さ0.18mで、緩やかな円弧を描く溝状遺構（S D01）が確認された。埋土は暗褐色シルト混じり極細砂～細砾で、出土遺物には弥生時代中期頃～後期にかけての土器片がある。
- 4 レンチ 幅1.5m、長さ約13.0mの調査区である。西半の約8.0m間は、2 レンチと同様擾乱のため、遺構面は全く存在していない。東半では乳色細砂～粗砂の基盤層が確認されたが、遺構・遺物は確認できなかった。
- 5 レンチ 幅1.5m、長さ約14.0mの調査区である。遺構面の存在する範囲は北端の約1.5mと中央部の約3.0mのみで、3 レンチで確認された S D01 から続くと考えられる溝状遺構と土坑2基（S K01・02）が確認された。
- S D01 最大幅0.50m、最大深さ0.17mで、3 レンチに比べるとややまとまって遺物が出土している。埋土は暗黒褐色シルト混じり細砂である。
- 1は口径13.6cmの壺の口縁部である。2は完形に復元できる小型の壺で、口径10.0cm、器高9.0cm。体部外側は4条/cmの平行タタキ仕上げで、口縁部は指押さえで波状に仕上がる。底部内面にはハケ状工具が当たる。3は口径21.0cmの鉢の口縁部で、外側には4条の凹線文が巡り、5条/cmのタテハケ調整を施す。口縁端面はほぼ水平に仕上げられる。4は口径26.0cmで、口縁部が大きく外反する鉢である。いずれの土器も色調は暗乳褐色系で、胎土には直径1～2mm大のチャート・石英・クサリレキ粒を含む。

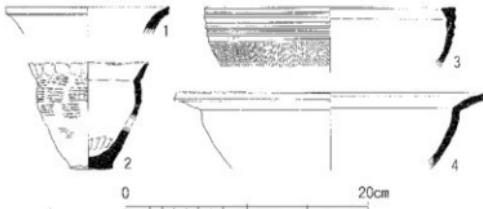


Fig.9 S D01出土土器

S K01 長軸0.88m、短軸0.51m、深さ0.16mの楕円形の土坑で、弥生土器の小片と石鎚1点（5）が出上した。弥生時代中期のものと考えられる。

5は長さ3.1cm、最大幅1.4cm、最大厚さ0.3cmの凸基有茎式のサスカイト製打製石鎚で、重さ1.3gである。

S K02 長軸0.70m、短軸0.65m、深さ0.15mの楕円形の土坑で、弥生土器の小片が出上した。

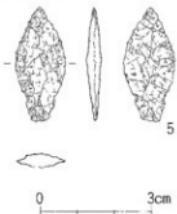


Fig.10 S K01出土石鎚

## 6 トレンチ

東西約26.0m、南北約12.0mのいびつな調査区で、今回の調査区では、最も面積が大きい。近代以降の擾乱のため、西半では乳色細砂～粗砂の基盤層が存在していなかった。東半でも擾乱が著しかったが、土坑とピットをそれぞれ1基ずつ確認できた。

## SK06

長径1.43m、短径1.04m、深さ0.07mの楕円形土坑で、埋土は暗乳褐色シルト混細砂である。出土遺物には在地産の胎土をもつ突帯文土器（6～8）の他に、外面に割り痕が明瞭で、生駒西麓産と考えられる胎土をもつ土器片がある。弥生土器は共伴していない。

6は丸みをもつ口縁部に上端を沿わせて、縦長の細い刻み目をもつ断面三角形の鈍い突帯を施す。7は小「O」字形の刻み目が施された断面三角形の突帯をもつ体部と考えられる。突帯貼り付けの割り付け線として沈線が1条巡る。8は刻み目をもたない断面三角形の突帯をもつ体部と考えられる。いずれも胎土には直徑2mm大のチャート・石英粒を多く含む。縄文時代晩期のものと考えられる。

## SP01

直径約0.38m、深さ0.07mの円形のピットで、埋土は淡褐灰色シルト混じり細砂である。平安時代末と考えられる須恵器小片が出土している。

なお、遺構面直上からは弥生時代中期～後期の土器片が出土し、擾乱内からは石鎧1点が採集されている。

9は口径24.4cmの壺の口縁部で、端面は外傾する大きな平坦面をもつ。頸部には指頭压痕文突帯が1条巡る。口縁部内面には4条/cmの横方向のハケ調整が施され、外面には不明瞭な縦方向の板ナデ調整が施される。10は口縁部が「く」字形に外反する壺で、端部はわずかに上方につまみあげる。内・外面とともにヨコナデ調整である。口径13.0cm。11も口縁部が「く」字形に外反する壺の口縁部で、端面には擬凹線文が4条巡る。口径29.4cm。体部外面は7条/cmのタテハケ調整で、口縁部内面はヨコナデ調整によって、ヨコハケ調整がスリ消されている。12は底径3.6cmの壺の底部で、残存高は11.1cmを測る。内外面ともに丁寧なナデで仕上げられる。

13は長さ3.6cm、最大幅2.1cm、最大厚さ0.4cmの凹基無基式のサスカイト製打製石鎧である。大割離面が明瞭に残る。重さ1.3gである。

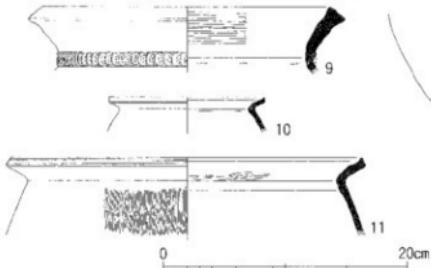


Fig.12 6トレンチ出土土器

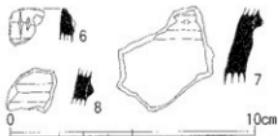


Fig.11 SK06出土土器

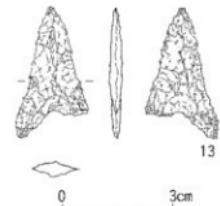


Fig.13 6トレンチ出土石鎧

- 7 トレンチ 幅1.5m、長さ約15.0mの調査区である。北側約5.0mは、6 トレンチから続く擾乱のため、遺構面は全く存在しなかった。調査区中央やや北側で土坑2基が確認された。
- S K04 長軸1.01m、短軸0.62m、深さ0.21m楕円形の土坑で、弥生土器が出土した。
- 14は口径9.3cm、器高7.2cmの小型の鉢で、外面を2条/cmの平行タタキで仕上げる他はナデ仕上げである。
- S K05 長軸2.3m、短軸1.2m、深さ0.25mの楕円形の土坑で、弥生土器が出土した。
- なお、両遺構の上面には一部遺物包含層が遺存しており、鎌倉時代後半の土器などが出土している。
- 15は瓦質土器の鍋で、口径22.4cm。水平に折り曲げた後、上方へ大きく肥厚する口縁端部をもつ。色調は灰白色で、胎土には1mm前後のチャート粒をわずかに含む。

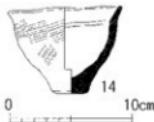


Fig.14 S K04出土土器



Fig.15 S K05出土土器

- 8 トレンチ 幅1.5m、長さ約10.0mの調査区である。北端で土坑1基を確認したほかは、自然地形と考えられる傾斜面が確認できたにすぎない。
- S K03 長軸1.6m、短軸0.62m、深さ0.15mの楕円形の土坑で、弥生土器・黒色土器・土師器の小片が出土している。平安時代前半期の遺構であろう。

### 3. 小結

今回の調査は近世～現代の擾乱の密度が高かったため、確認できた遺構の密度は決して高くない。出土遺物からみると、今回の調査地点が弥生時代中期～後期の集落址の範囲内であることが明確にできたものの、調査範囲も限られており、その性格については明らかにはできない。また、南半で確認できた遺構・遺物は遺跡の存続時期が断続的ではあるものの、縄文時代末から鎌倉時代後半期まで至ることを物語っている。擾乱が少なく、本来の土層が良好に残存しておれば、遺跡内容もさらに豊富になったものと考えられる。

## 第2節 第2・3次調査

### 1. はじめに

第2・3次調査地は、都市計画道路山麓線の街路築造予定範囲の北東部約1400m<sup>2</sup>にあたる。調査地の現状は宅地、調査地中程で未調査範囲となっている生活道路をはさんで、北は旧大手村庄屋、窪井家の屋敷地（第2次調査地東部）、南はこれも旧大手村庄屋、兼吉家の屋敷地（第2次調査地西部・第3次調査地）である。

### 2. 調査の概要

#### 第1遺構面

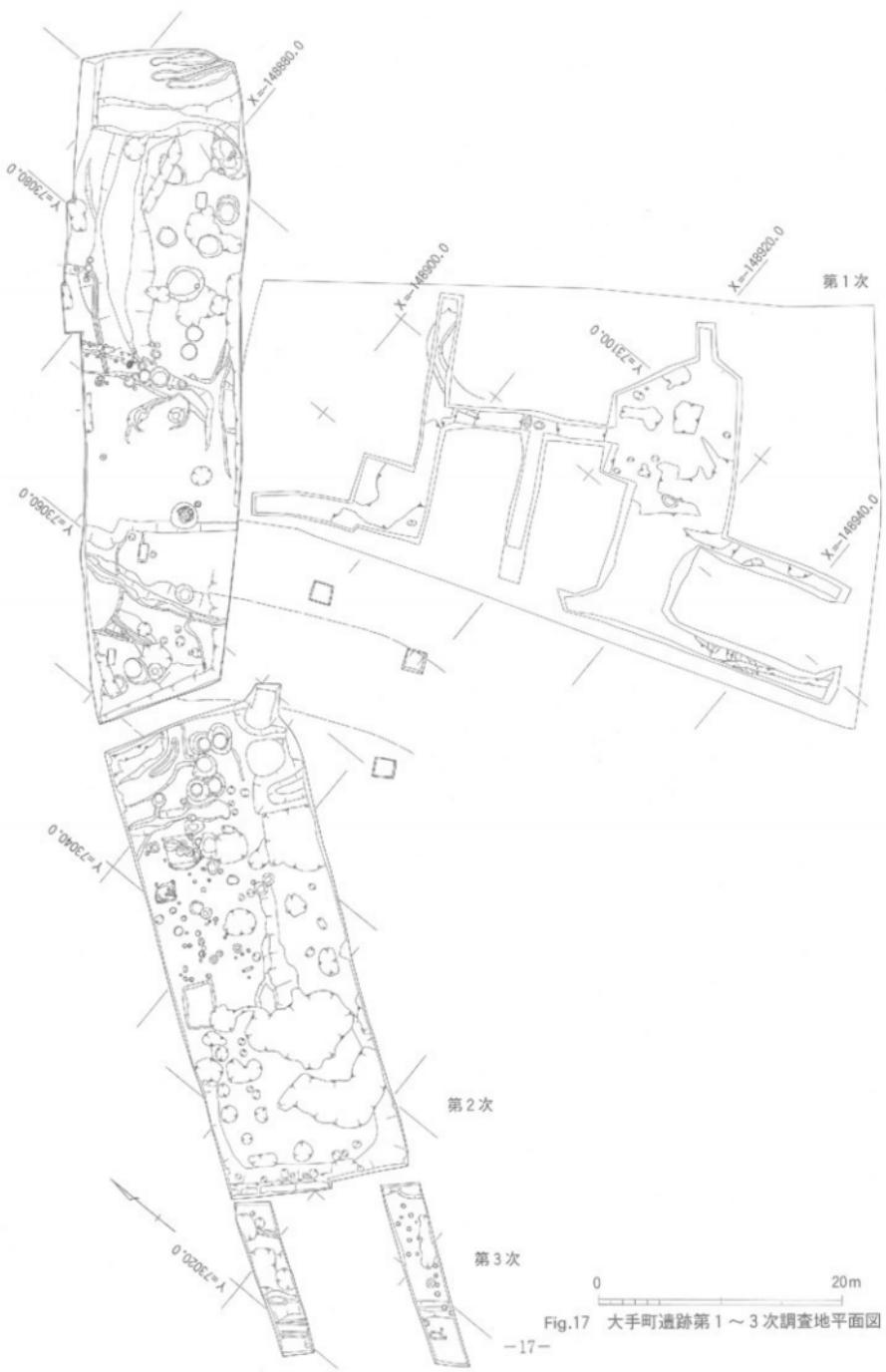
調査の結果、第2次調査地東部で近世の遺物包含層および遺構、中世の洪水砂層、中部で弥生時代から現代の遺物包含層および遺構、縄文時代の遺物包含層が確認された（Fig. 18・19）。第2次調査地西部では遺物包含層はほとんど残っていなかったが、弥生時代・近世の遺構が確認された（Fig. 20・21）。第3次調査地は後の造成あるいは耕作等により、遺物包含層・遺構面等の遺存状況が非常に悪い。調査の結果、検出された遺構は、近世の柱穴・溝等にすぎない（Fig. 22・23、写真図版14）。しかし、近世の陶磁器のほかにも、サスカイト片・弥生土器片・中世の土師器片などの遺物が出土している。以下、主な遺構について報告する。

丘陵上に位置するため、現地表面から遺物包含層・第1遺構面まではごく浅く、表土層



Fig.16 第2次調査地東部崖下に堆積する洪水砂

を除去すると、直下で遺構確認面となる部分が大半であった。ただし、第2次調査地東部の東端部は、遺跡の立地する固い基盤層が急激に下り、崖状を呈する。この東に洪水砂が厚く堆積している（現地表から4.5m以上の深さがあることを確認、Fig. 16）。この洪水砂中深さ3.7mの部分で15世紀の青磁（164）が出土しており、室町時代以前は、この地点で東西にかなりの段差のあったことが判明した。その後、江戸時代に至ってもこの崖は、1mほどの段となつて残る。この下の平坦面には段に沿う溝（SD07）が検出された。また、畝状に平行する溝（SD08）がある。さらに、江戸時代の遺構面も洪水砂で覆われており、数次の洪水による堆積作用により、本来の位置から現状にまで移動したことが確認された。



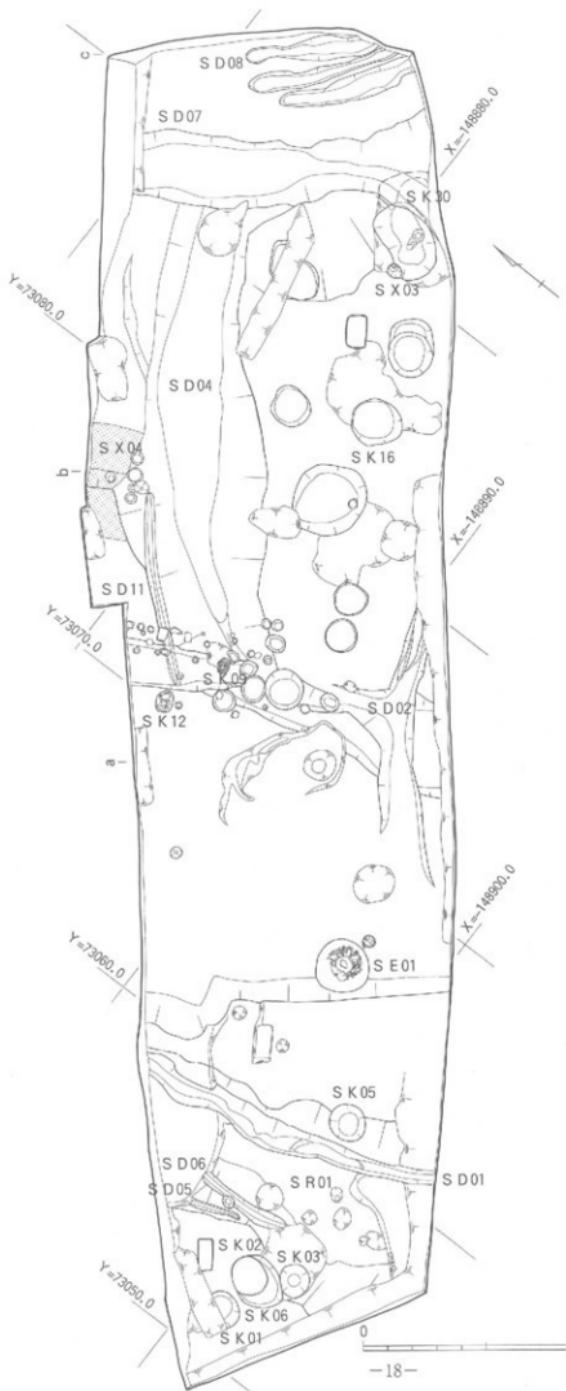


Fig.18 第2次調査地  
東部遺構平面図

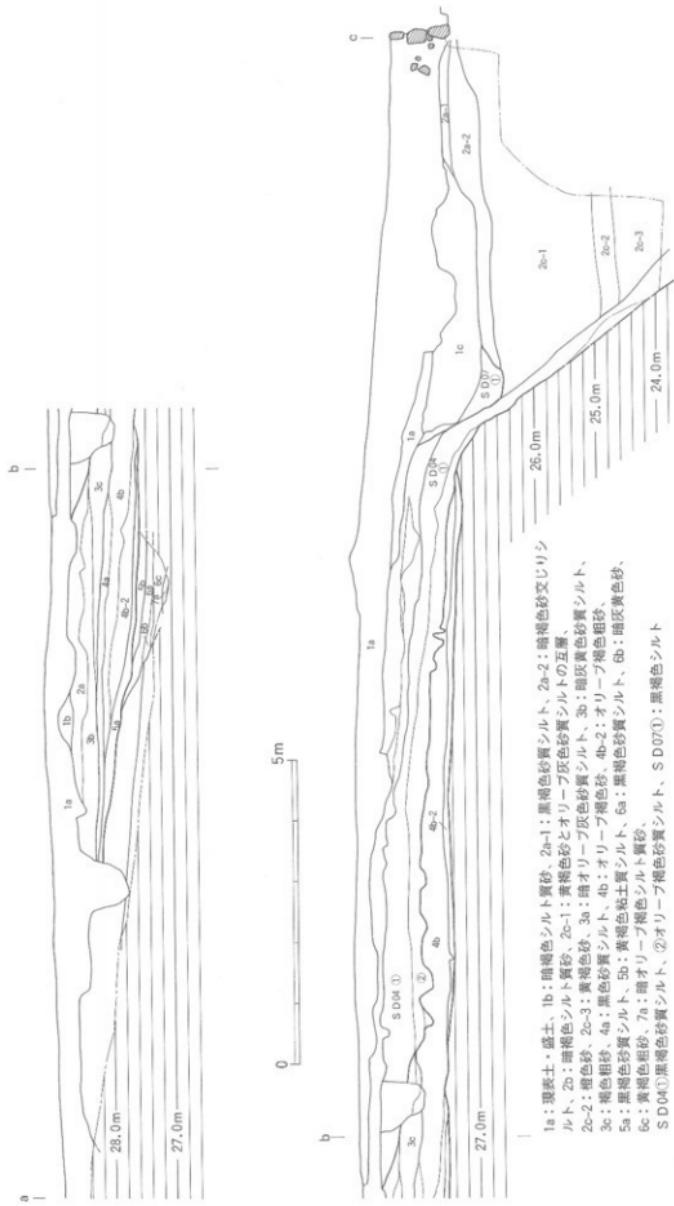


Fig.19 第2次調査地東部北盤土層断面図

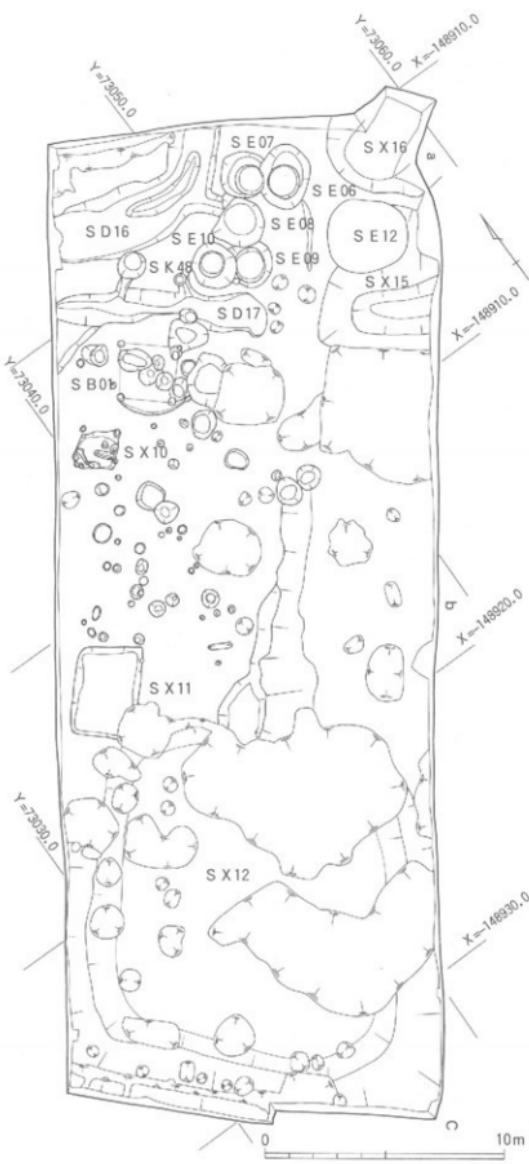


Fig.20 第2次調査地  
西部遺構平面図

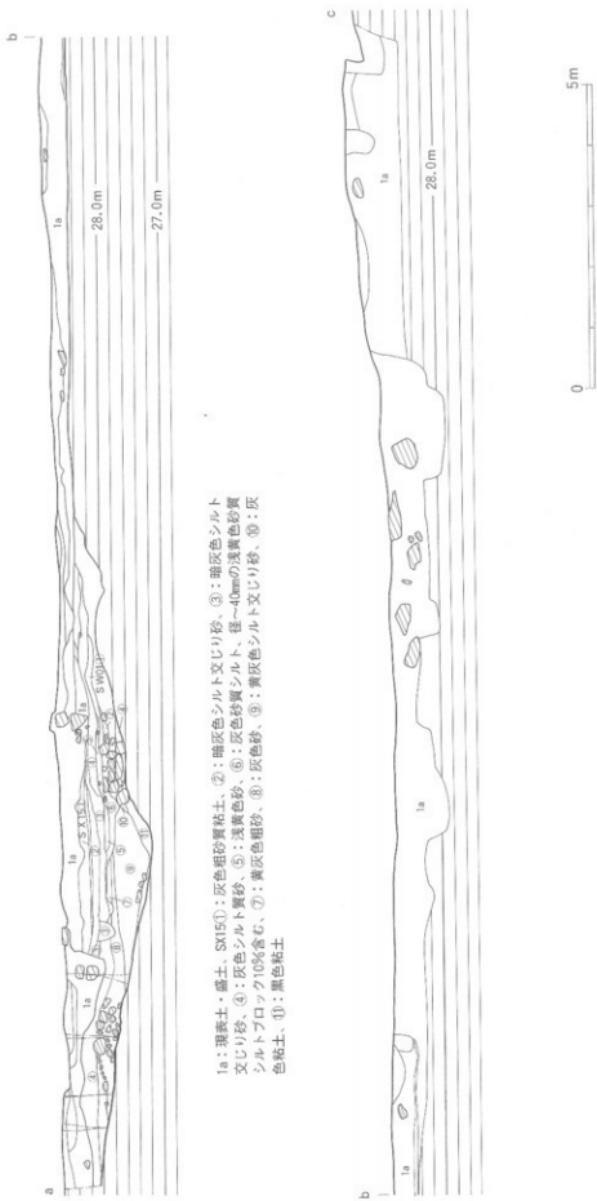


Fig.21 第2次調査地西部南壁土層断面図

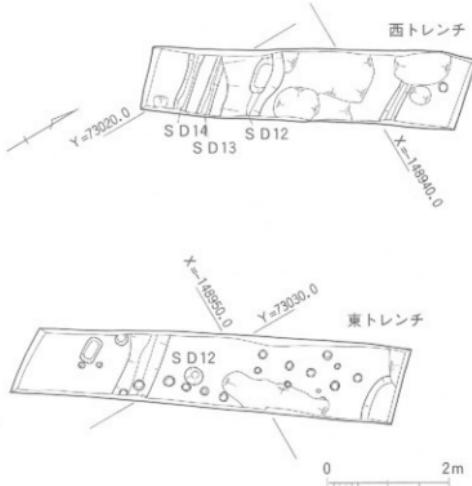


Fig.22 第3次調査地遺構平面図

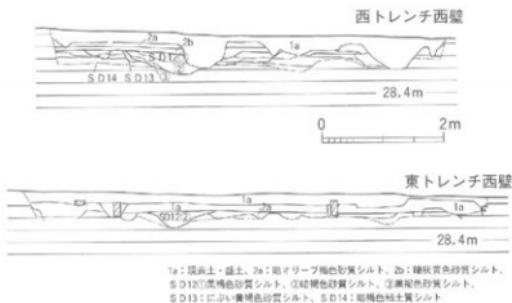


Fig.23 第3次調査地土層断面図

その他の部分は丘陵上ため土砂の堆積が少なく、表上の腐食土層を除去すると、弥生時代中期～近代の遺構が同一面で検出される。第2次調査地東部では、石組の井戸1基（SE01）、水琴窟（SK09）1基、素握りの井戸あるいは土坑1基、溝9条（SD01～11）、柱穴、自然流路（SR01）1条、第2調査地西部では、圍池1基（SX13）、圍池に伴う石組の井戸1基（SE12）、池状の滲水遺構1基（SX16）、井戸5基（SE07～11）、溝

2条(S D16・17)などが検出された。

## 第2遺構面

第2次調査地東部5a層で縄文時代の遺物が集中して出土する地点(S X04)を確認したが、明瞭な遺構は確認されなかった。

### 3. 江戸時代の遺構・遺物

東崖下

S D07・08

S X02

S E01

第2次調査地東部の崖下部分、15世紀以降の洪水砂上面にある江戸時代の遺構面で検出された溝である。S D07は崖部分に沿って北西-南東方向に延びるもので、S D08はその東にある畠状に見える3条の溝である(写真図版6-1)。これらの上には、江戸時代の肥前陶磁・焰硝・砥石などが大量に崖上から投棄されている。このほか黄色の粘土塊(S X02)・炭・焼土とともに鉄滓が出土している(写真図版6-2・3)。陶磁器類は18世紀のものがほとんどである。広東碗などがごくわずか含まれるが、明治以降のものはない(Fig. 25・写真図版21~23)。磁器は波佐見焼が多く、有田焼・瀬戸焼は少ない。これらの遺物は、崖上から投棄されたゴミの集積と推定される。

第2次調査地東部で検出された掘形が円形の石組みの井戸である。径約1.8m、遺構検出面からの深さ約1.5mを測る。石組み部分は、遺構検出面から約0.7mでその上面があらわれる。石組みの内径約0.7m、深さは約0.7mを測り、内面を合わせるように4段程度石が積まれる。S E01の東には径約0.8mの桶が据えられる(Fig. 27・写真図版8-2)。井戸内および裏込めから、江戸時代の瓦・陶磁器類が出土している。

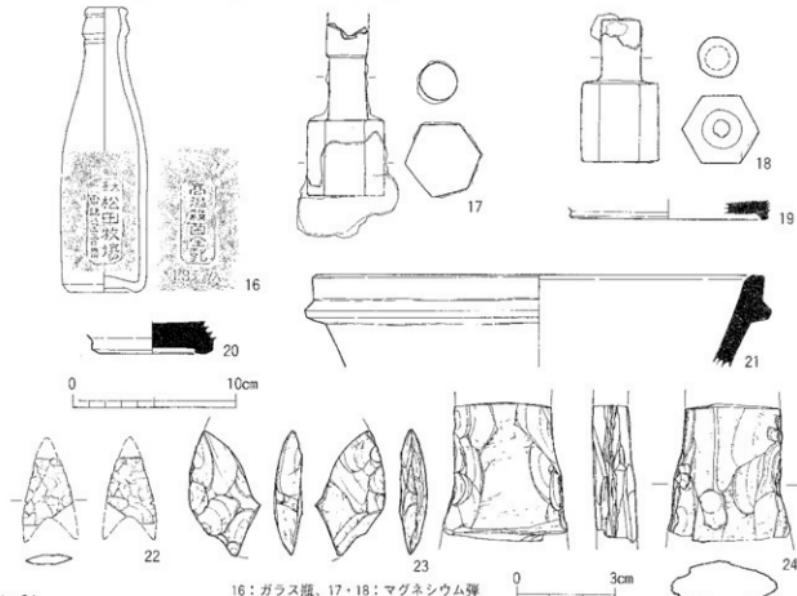


Fig.24

第2次調査地 表土出土の遺物

22~24: サムカイ (22は風化がすすむ)

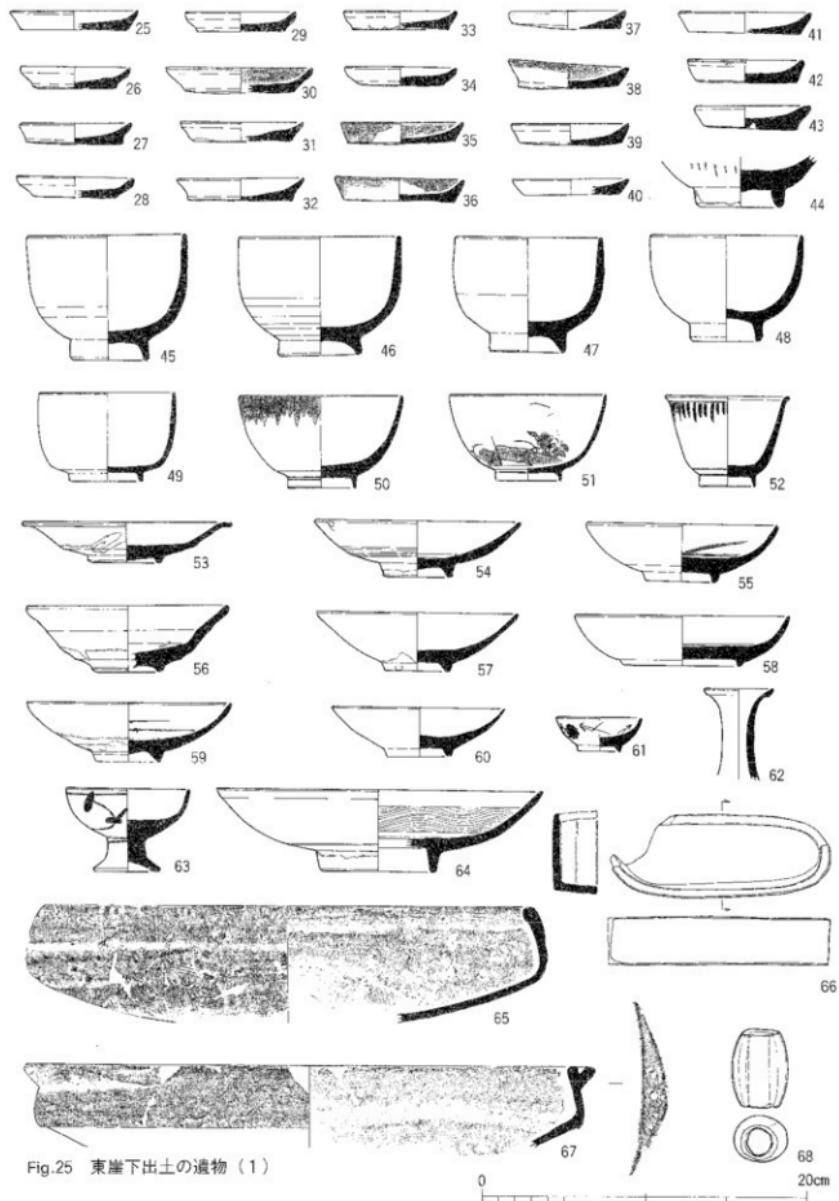
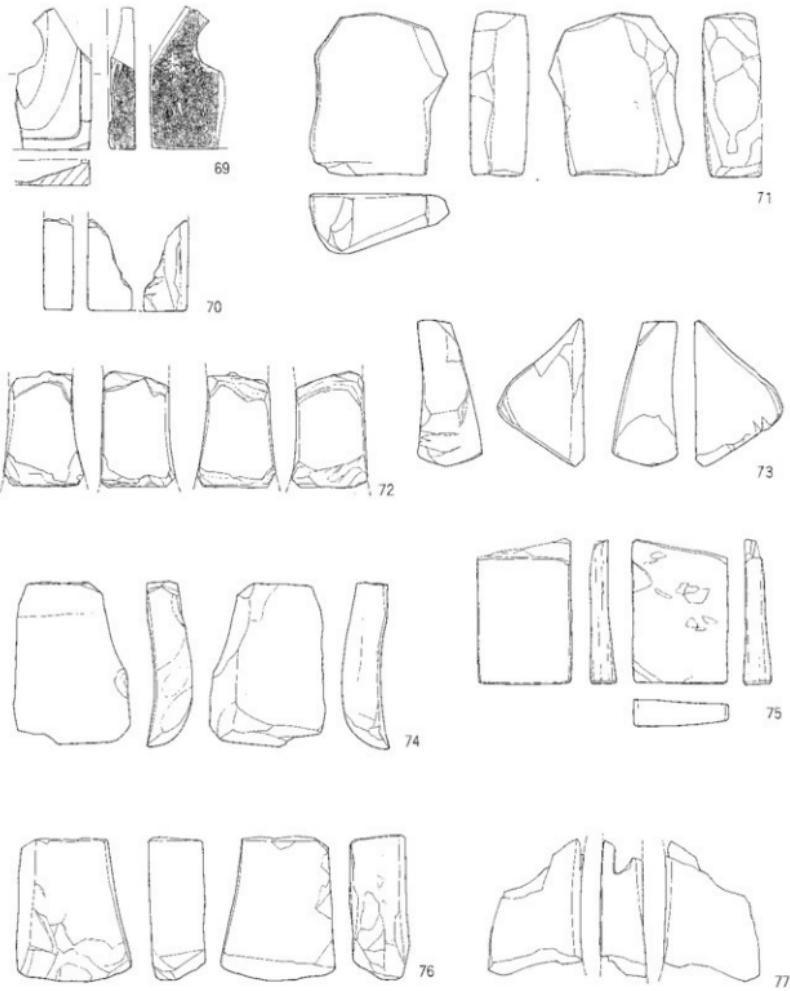


Fig.25 東崖下出土の遺物（1）



69: 石（針書銘あり）、70～77：石器

0 20cm

Fig.26 東崖下出土の遺物（2）

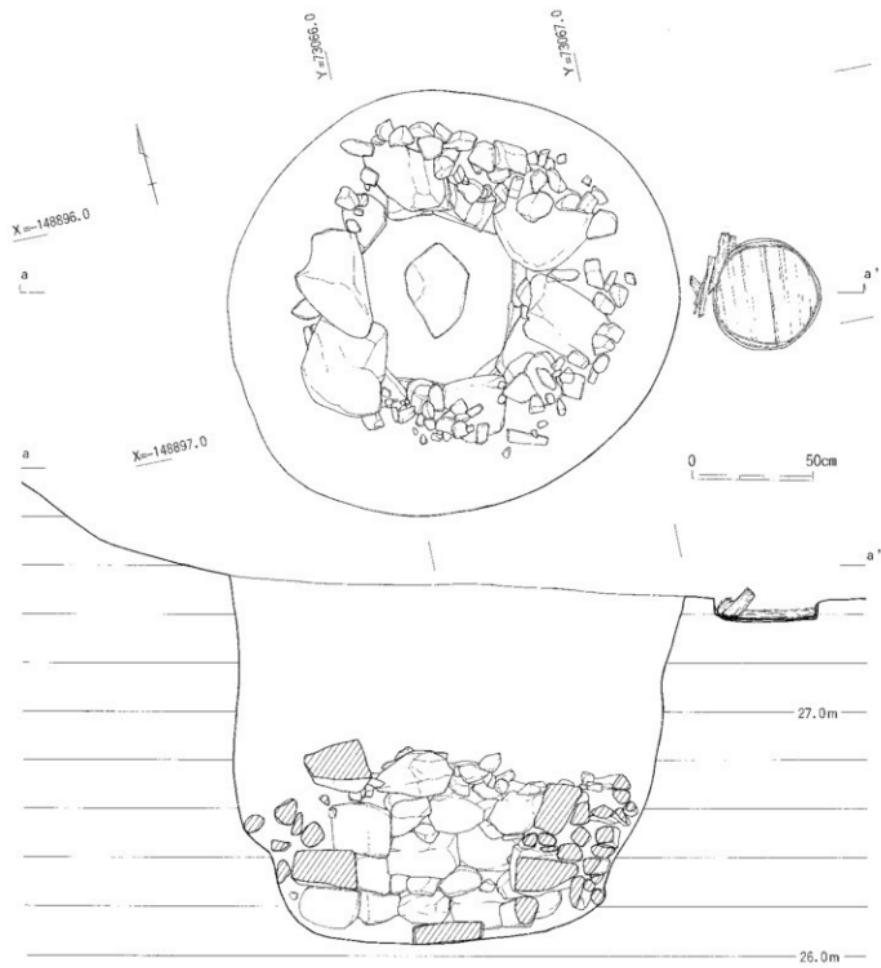


Fig.27 SE01平·断面图

S K09

第2次調査地東部で検出された水琴窟である。掘形のプランが $0.70 \times 0.54\text{m}$ の不整椭円形を呈する (Fig. 30・31、写真図版9)。築造工程は以下のとおり復元される。

- ①遺構検出面からの深さ約0.8mの掘形を掘削し底面を整える。
- ②一辺15cm程度に割った瓦を2枚重ねて置く。
- ③底の中央を一辺約3.5cmの隅円方形に打ち抜いた丹波焼の甕をこの瓦の上に伏せる。
- ④掘形底面、甕の周囲を比較的大ぶりの糠で固める。
- ⑤さらに掘形内に糠を充填する。

排水施設は存在しないが、水琴窟のある部分は、弥生時代の溝S D04に堆積した砂質シルトであるため、水の抜けは良いようである。

水琴窟の周囲には、西方から水琴窟に向かう飛び石の抜き跡7ヶ所、水琴窟の南にオリーブ灰色の粘土を貼った部分1ヶ所が確認されている (Fig. 28・写真図版8-1・9-1)。また、水琴窟の北東約3.0mには、瓢箪池跡があり、これらが庄屋窪井家の庭園の一部を構成していたと推定される。

ちなみに、瓢箪池は調査開始時まで現存していたが、水琴窟の存在についてはご当主もご存知なかった。築造時期は、江戸時代ないし明治時代と推定される。

S D02

第2次調査区東部で検出された江戸時代の溝である。S K09に切られる。北から延びる幅1.5m~2.0mの溝が、調査区の南で東西方向の溝にあたりT字状を呈する。江戸時代の陶磁器等のほか弥生土器が少量出土している。



Fig.28 第2次調査地水琴窟への踏み石

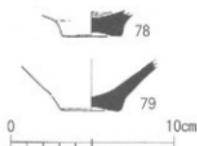


Fig.29 S D02出土弥生土器

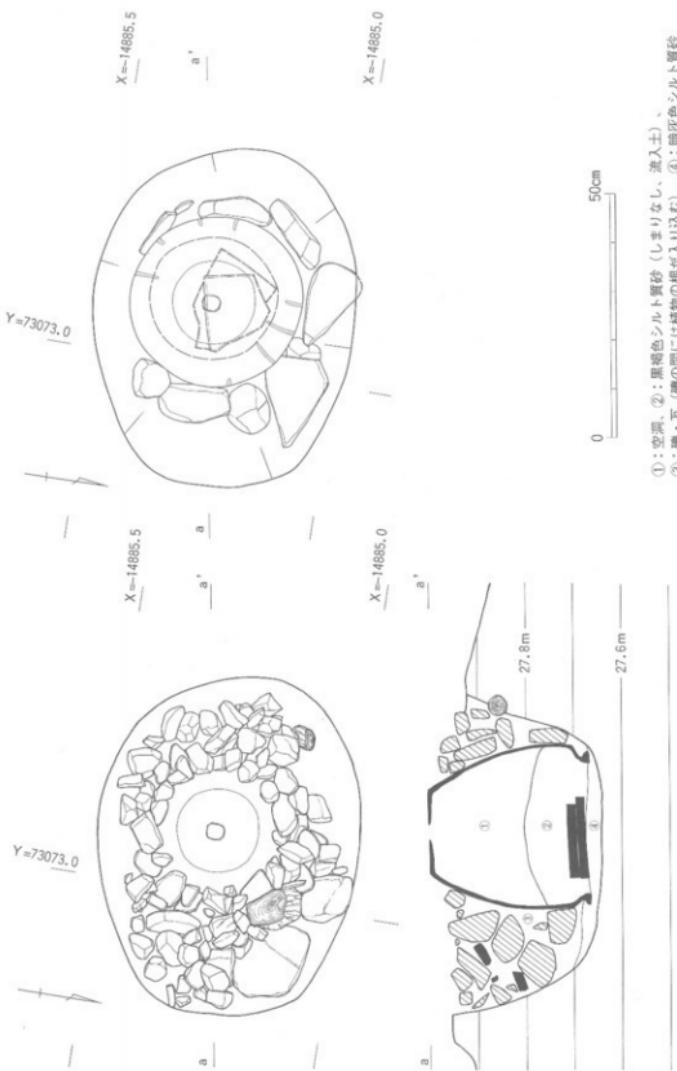
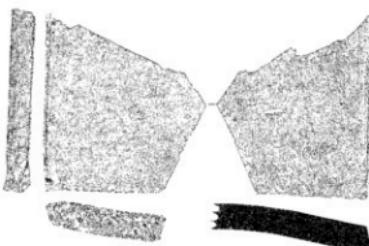


Fig. 30 水琴窟 SK09平・断面図



81



82



Fig.31 水琴窟 S K 09の甕と瓦

S K16

第2次調査地東部で検出された土坑である。直径約3.0mのプラン不整円形で、遺構確認面からの深さ約0.5mを測る。焼成の良好なかわらけが出土している。

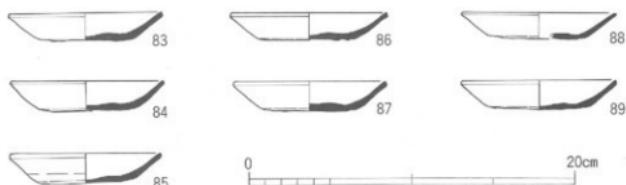


Fig.32 S K16出土遺物

S D16

第2次調査地西部の東半で検出された近世の炊事場に関連する排水施設と考えられる遺構である。

現井戸に破壊される石敷きがあり、そこに排水の溝が延びる。溝の幅2.0m程度、深さ約0.4mを測る。溝底の石敷きは1.5m幅で2.0m強の範囲にある。井戸に近い部分の溝中央に粘土が敷かれる。溝の左岸には約2.0mの範囲で人頭大の石が2段程度、0.3mの高さで積まれる。右岸では、S D17との関係か石積みは存在しなかった。左岸石積みの中には大型の水窓胴部の大きな破片1点がはめ込まれている(Fig.33、写真図版11-1)。

埋土からは肥前系のものを主体に陶磁器等が出土しており、江戸時代の溝であることが確認された。石敷きから出土した花崗岩製の石臼は擂り目が6区画のものである(Fig.34)。



Fig.33 S D16付近 (南西から)

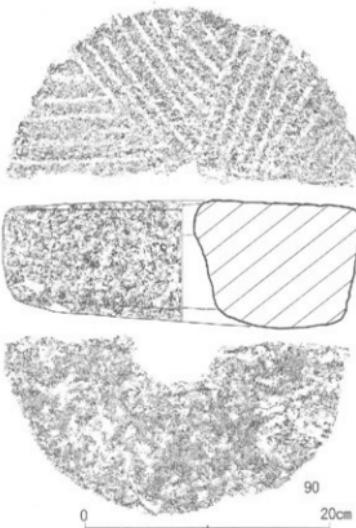


Fig.34 S D16出土花崗岩製石臼

S E06~11

第2次調査地西部の東端部分、S E 12の西にあたる部分に集中する井戸群である。何重にも切りあっており、たびたび井戸の掘り直しが行われたと考えられる。すべて素掘りのもので、形態はほぼ共通しており、井戸枠の内法は約1.2mのプラン円形、掘形は直径約2.0mのプラン不整円形を呈する。深さは約0.9mである。S E06・S E07の側面底付近に井戸枠にはめられていた竹のタガのみが遺存していた。切り合い間から一番新しいものと思われるS E06には、息抜きの竹が遺存し、埋め戻し土から近代のガラス瓶が出土している。



Fig.35 S K06・07 (北から)

S D17・

S K48

第2次調査地西部で検出された幅約1.4m、深さ約0.3mの溝である。南東方向に流れ落ち、園池に至る。また、S K48は、この溝とつながっている。(写真図版10-2)。S K48には桶が埋め込まれ、捕鉢・染付碗などが出土している。捕鉢の外面には墨書がある(写真図版31-2)。

S X15・

S W01

石敷きおよび石垣をもつ園池遺構である。池の主要部分は、調査区の東場外にあり、調査地で確認できたのは、西の山側から池に流下する滝口部分と池西側の敷石部分である。この敷石部分は、すり鉢状にへこむ部分があり(Fig.37、写真図版11-2・12-1)、この部分の敷石を除去すると、その下層から石組みの井戸(S E12)が検出された(Fig.38、写真図版13-1・13-2)。

この井戸からは、現在でも毎時1,200ℓ程度の水が湧出する。この池は、洪水砂によって埋没している。その埋没後、天保年間にこの上に蔵が建てられる。池西南の石垣(S W01、写真図版12-1・12-2)の裏込めからは、江戸時代初期の陶器類が出土しており、江戸時代中期までに埋没した



Fig.36 S X15 (北西から)

隣接する遺構であるS X16出土の遺物と接合するものがある(Fig.41-110)。このことから、この池は江戸時代中期あるいはそれ以後につくられ、天保年間までに洪水によって埋没したことが判明した。埋土からは18世紀を中心とする遺物が多く出土した。石臼には、8区画のものと6区画のものがある(Fig.39、写真図版33-2)。



Fig.37 S X15・SW01平・断面図

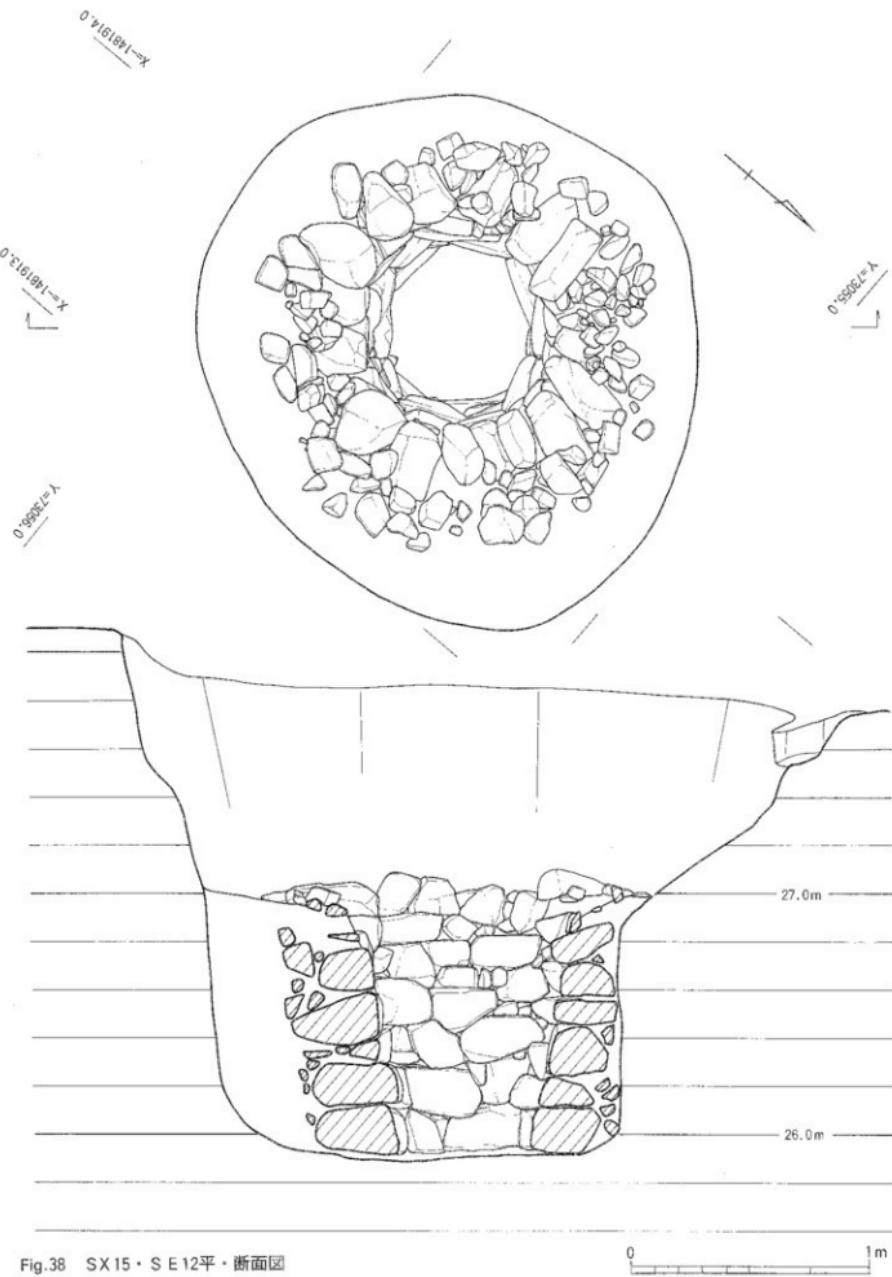
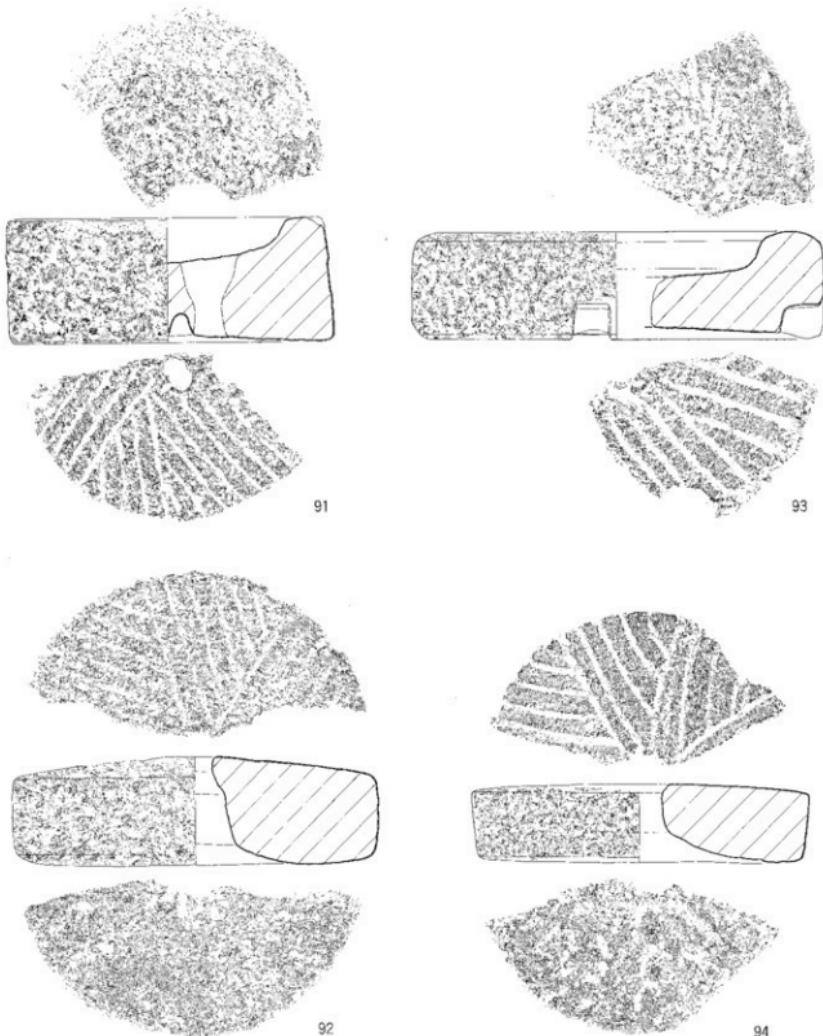


Fig.38 SX 15・S E 12平・断面図



91・92：SW01、93・94：SX15

0 20cm

Fig.39 SX15・SW01出土花崗岩製石臼

第2次調査地西部の東端で検出された池である。ごく一部を調査したにすぎない。

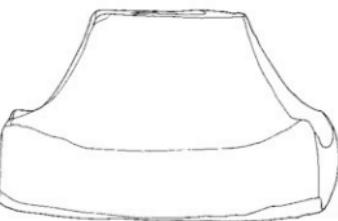
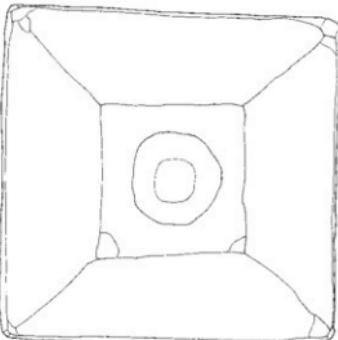
調査範囲内で確認できた深さは約1.5mであるが、遺構の底面はさらに深い。埋土は一部に砂層が縦状に入るが、総体として土壤化の著しい粘土～シルトが堆積し、流水の少ないほどんだ状態の池であったことが推測される。木杭が打ち込まれている状況も確認された。

出土遺物は多量で、陶磁器類・瓦・石塔・木製品などその種類も多様である。(Fig. 40～44、写真図版24-2～30)。陶磁器には備前焼徳利 (Fig. 41-96・97)、内ノ山窯系呂器手碗 (同98・99)、瀬戸美濃焼天目茶碗 (同100・101)、有田焼皿 (同102)、波佐見焼皿 (同107～109)・唐津焼皿 (同104・110)、景德鎮系皿 (同111)、古いものとして同安窯系青磁小皿 (同105) などがある。唐津焼皿の高台内に「く」形の墨書きが見られる。

木製品は、多量の木つ端・板切れのほかに製品として漆塗り椀・曲物・箸・籠・下駄・船形などがある。下駄は細身のもので、高齒の露卯下駄と、齒の摩滅した削り下駄がある。

遺物は、室町時代から江戸時代(17世紀代)までのものが主体で、江戸時代中期には大半が埋没したと推測される。遺構埋没後の埋上面には、隣接する S X15 と同様の礫の集積があり、S X15 の石敷きがこの遺構上にまで広がると考えられる(写真図版11-2)。

第2次調査区西部西半で検出されたプラン方形の大きな落ち込み(写真図版14-1)。周囲の遺構の状況から、庭園に関連したものと思われる。時期も江戸時代より下る可能性がある。



0 10cm

Fig.40 S X16出土遺物(1)

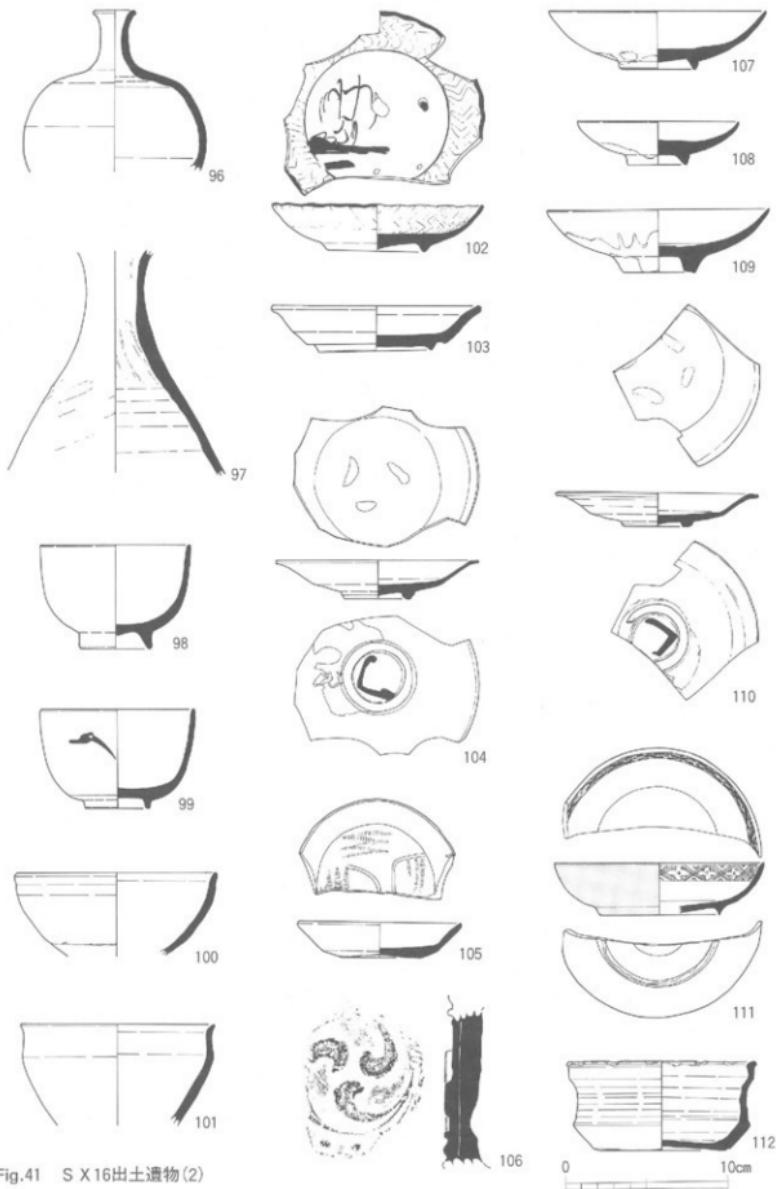


Fig.41 S X16出土遺物(2)

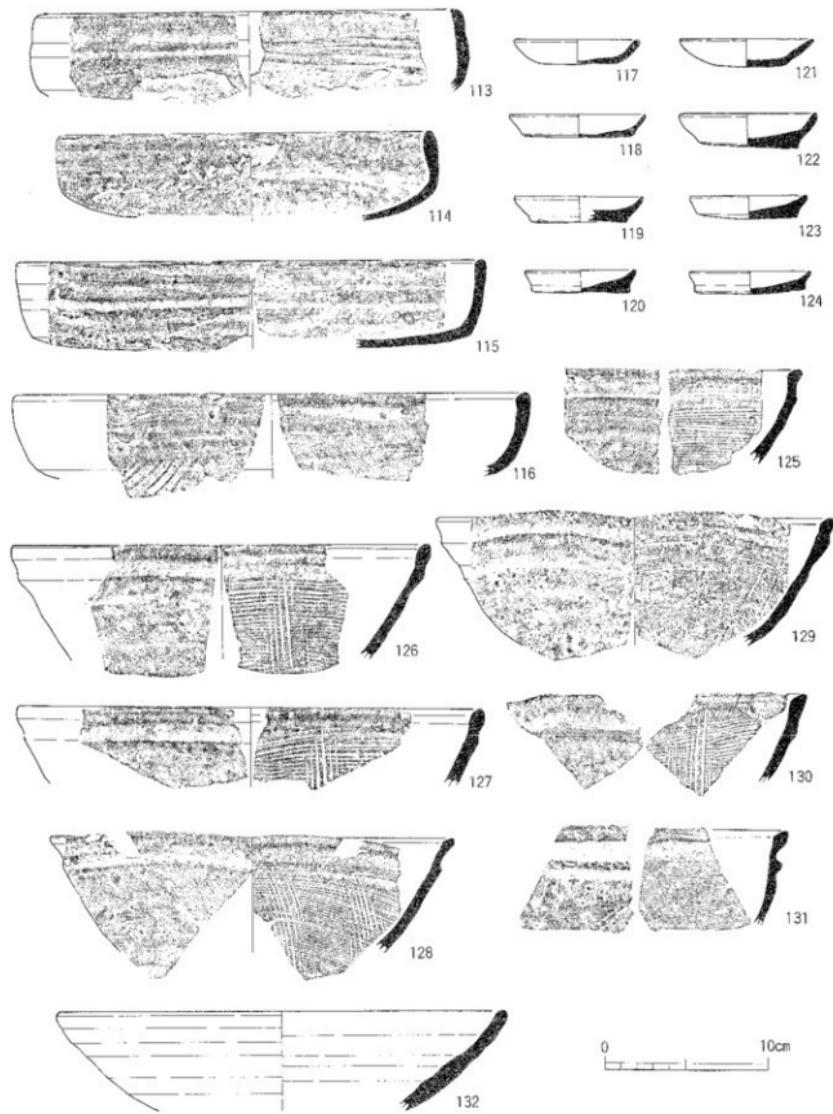


Fig.42 S X16出土遺物(3)

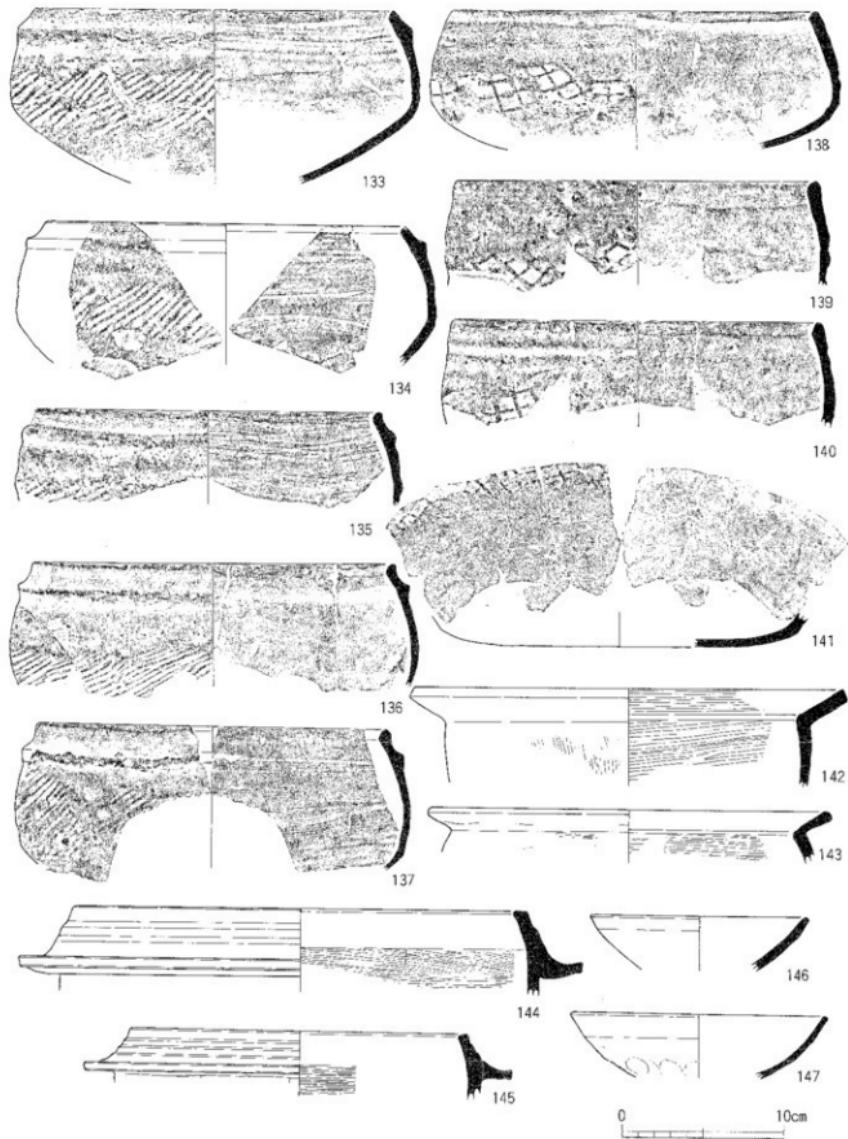


Fig.43 S X 16出土遺物(4)

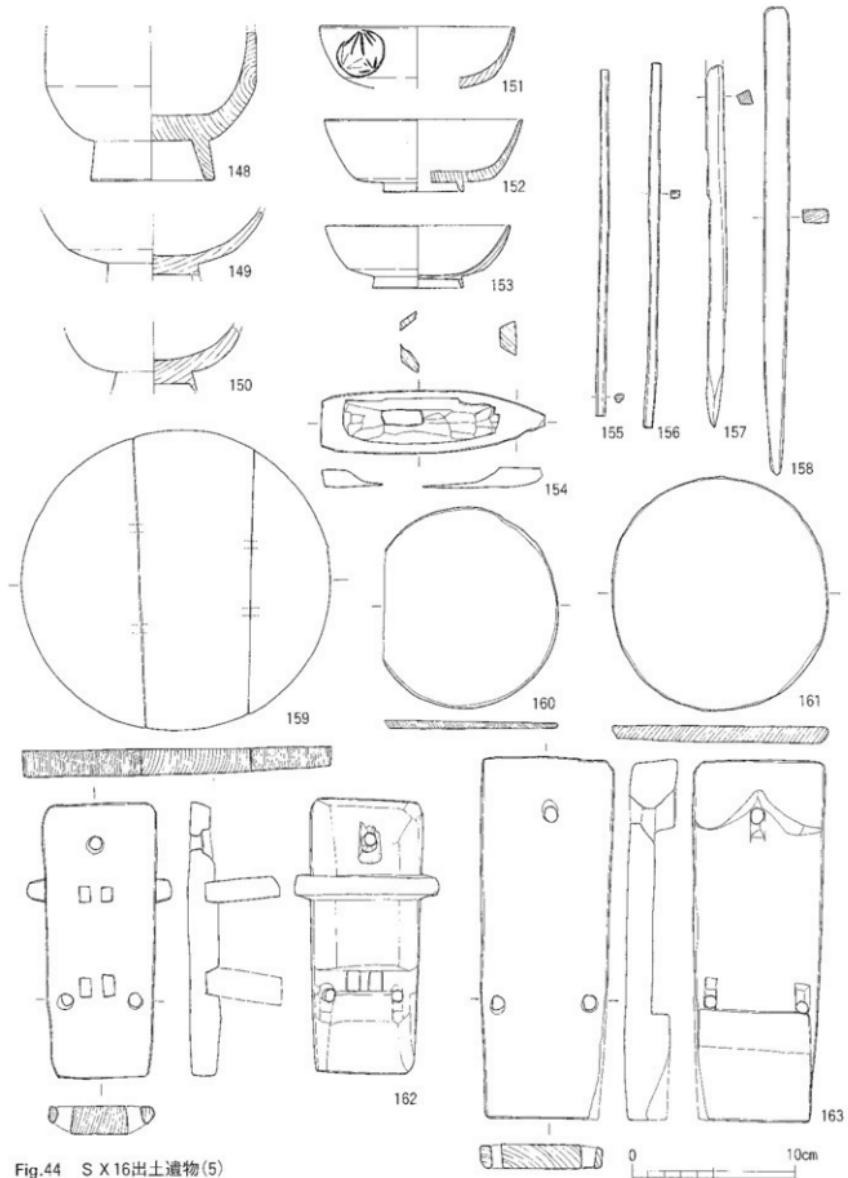


Fig.44 SX16出土遺物(5)

### 3. 室町時代の遺構・遺物

2c層

第2次調査地東部の東端崖下に、堆積する洪  
水砂層である2c-2層(Fig. 16-19)から  
15世紀の青磁(Fig. 45・写真図版34-1)が  
出土している。この洪水砂は、崖面の弥生時代  
中期～鎌倉時代の遺物を包含する表土層を覆う  
(「1.はじめに」参照)。

S X03

第2次調査地東部東端近くの崖肩部分にある  
プラン不整檐円形の土坑である。径約3.0m×  
2.0m、深さ約1.5mを測る。

覆土上位でかわらけ・瓦・羽釜・礫・骨など  
の破片が面的に出土した(Fig. 46、写真図版  
35・36)。遺物は、上層で集  
中していたもののみで、下層  
にはほとんどない。かわらけ  
の分量が多く、団化した資料  
の数倍の量が出土しており、  
煤の付着するものも認められ  
る。15世紀頃のものと考えら  
れる。ごく一部に新しいもの  
が交じるが、これらは調査時  
の混入であると思われる。

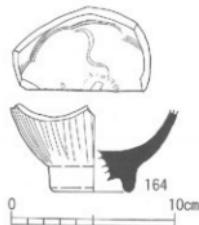


Fig.45 2c-2層出土遺物



Fig.46 S X03遺物出土状況（北西から）

### 4. 鎌倉時代から古墳時代の遺構・遺物

飛鳥時代のS D11以外顕著な遺構は確認されなかったが、弥生時代の溝S D04の埋土上  
層から古墳時代後期から平安時代末の遺物が出土しており、その最終的な埋没の年代を示  
している(Fig. 67、写真図版41～43)。また、表土や江戸時代の遺構から古墳時代から室  
町時代にかけての土器・陶磁器・石鍋なども出土している。

S D11

第2調査地東部で検出された検出長約8.0m、幅約0.5mの溝である。S D04と切り合  
い関係にあるが、覆土は全く同じで前後関係は不明である。飛鳥時代の杯1点が出土してい  
る(Fig. 47・48、写真図版33-3)。

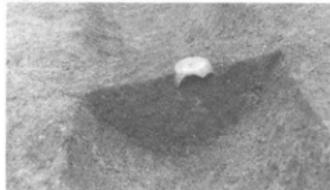


Fig.47 S D11-165出土状況（南西から）



Fig.48 S D11出土遺物



Fig.49 S X03平面図

0 1m

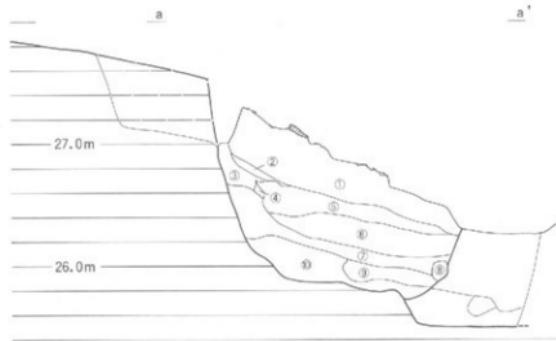


Fig.50 S X03土層断面図

- ①：暗オリーブ褐色シルト、②：黒褐色砂質シルト、③：黒褐色砂質シルト、
- ④：暗オリーブ褐色砂、⑤：黒褐色シルト、⑥：暗オリーブ褐色シルト交じり粘土
- ⑦：黒褐色礫交じり粘土、⑧：黒褐色礫交じり粘土、⑨：黒褐色礫交じり粘土、⑩：黒色礫交じり粘土

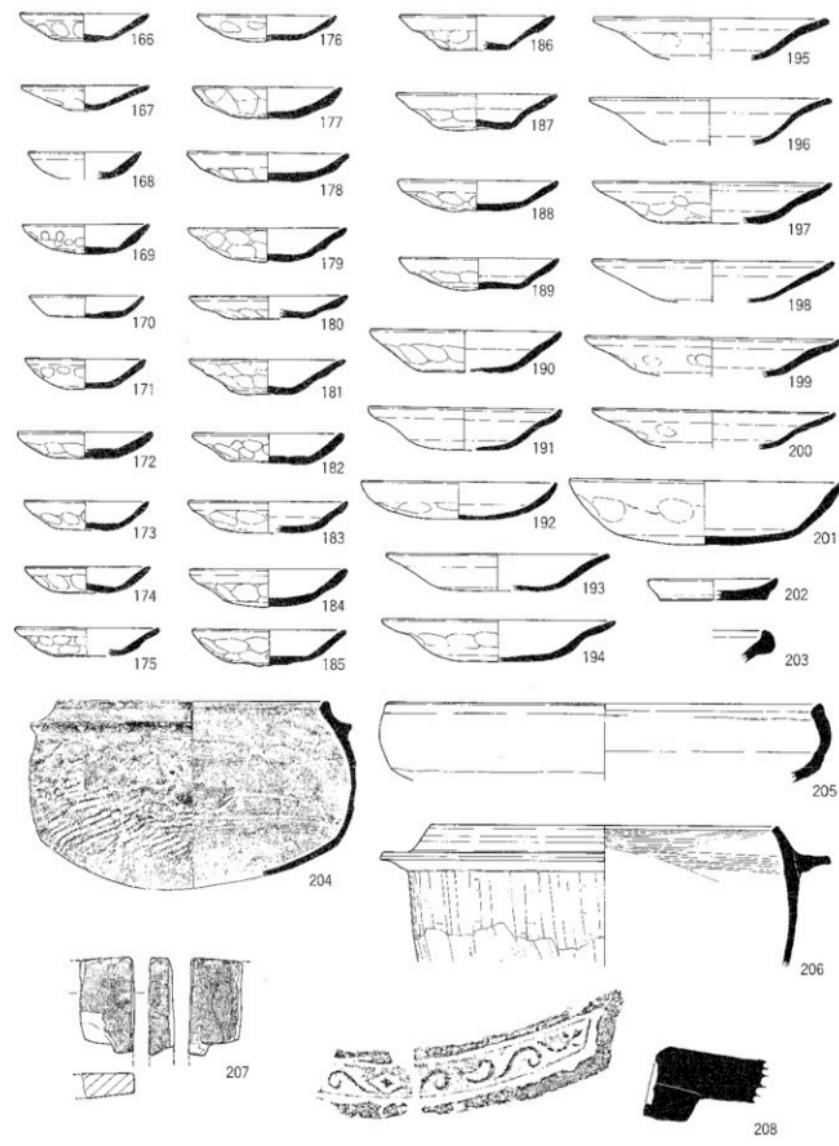


Fig.51 S X 03出土遺物

0 10cm

S R01

## 5. 弥生時代の遺構・遺物

第2調査地の西部で検出された北から南に流下する自然流路である (Fig.52、写真図版16)。幅約7.0m、造構検出面からの深さ約1.1mを測る。調査地の南で行った試掘調査においても確認されている。埋土は、洪水砂層が主体で、弥生時代中期中葉の土器・石器が多く含まれ、磨滅した繩文時代晚期の土器がわずかに交じる (Fig.53~56、写真図版37~39-1)。弥生時代の土器類はほとんど磨滅していない。

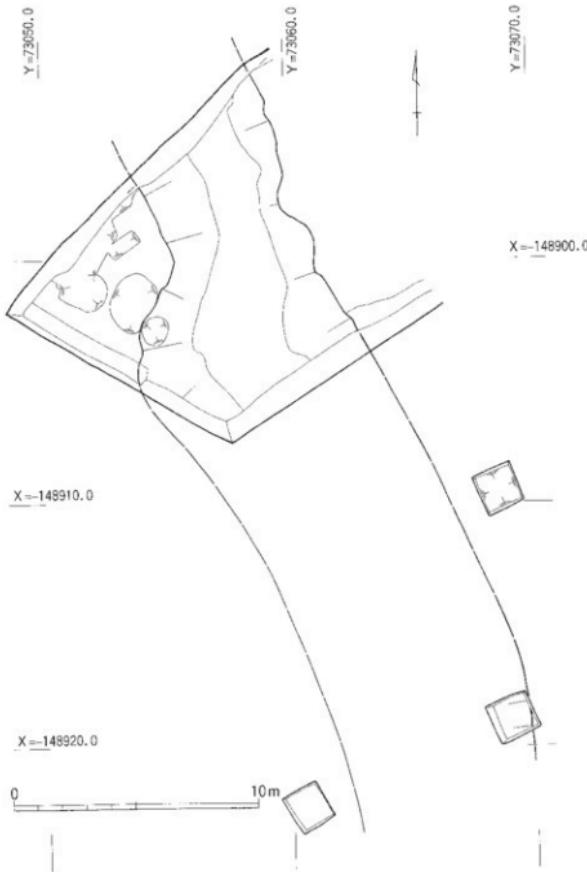


Fig.52 S R01平面図

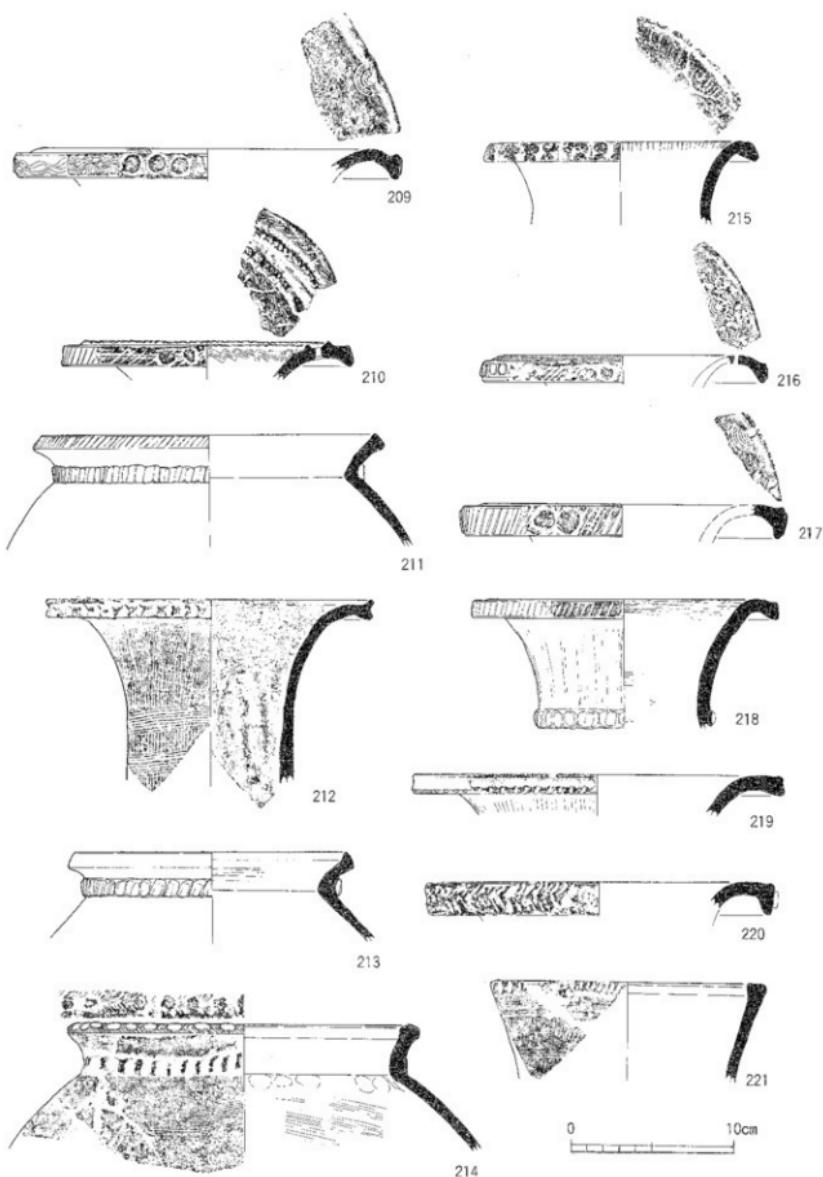


Fig.53 S R01出土遺物(1)

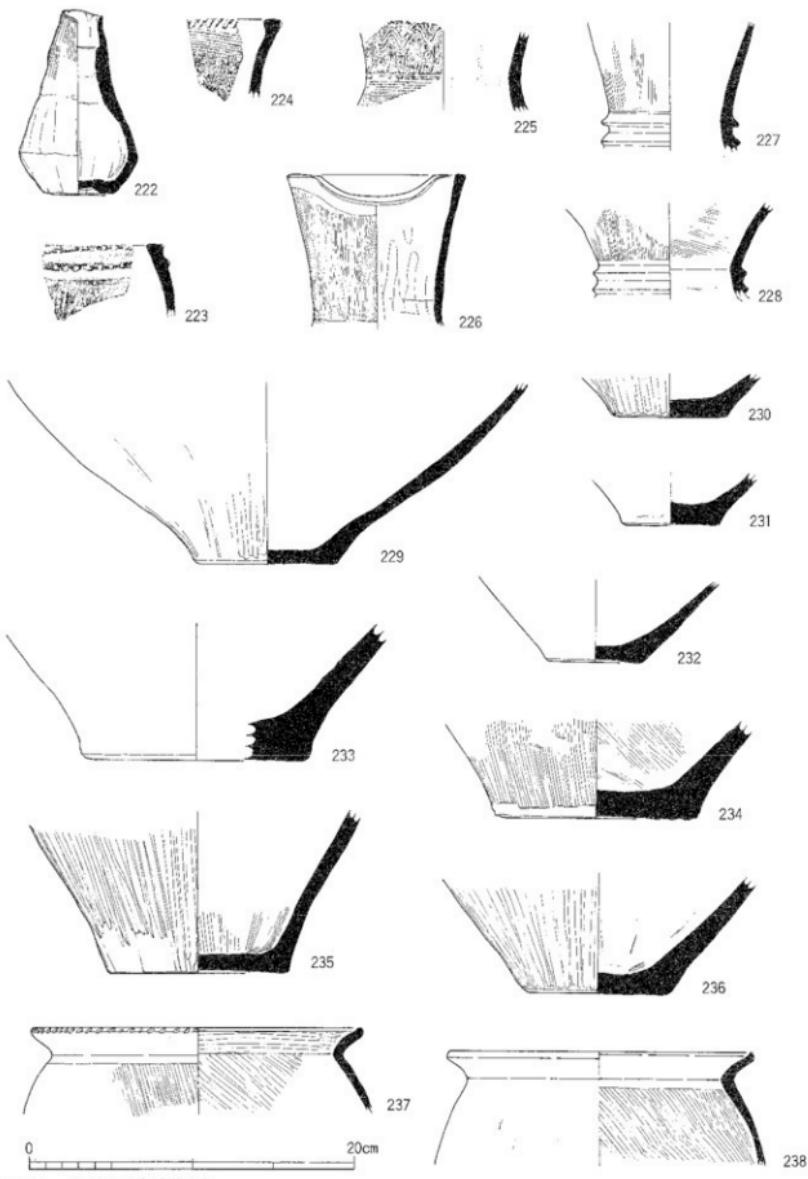


Fig.54 S R 01出土遺物(2)

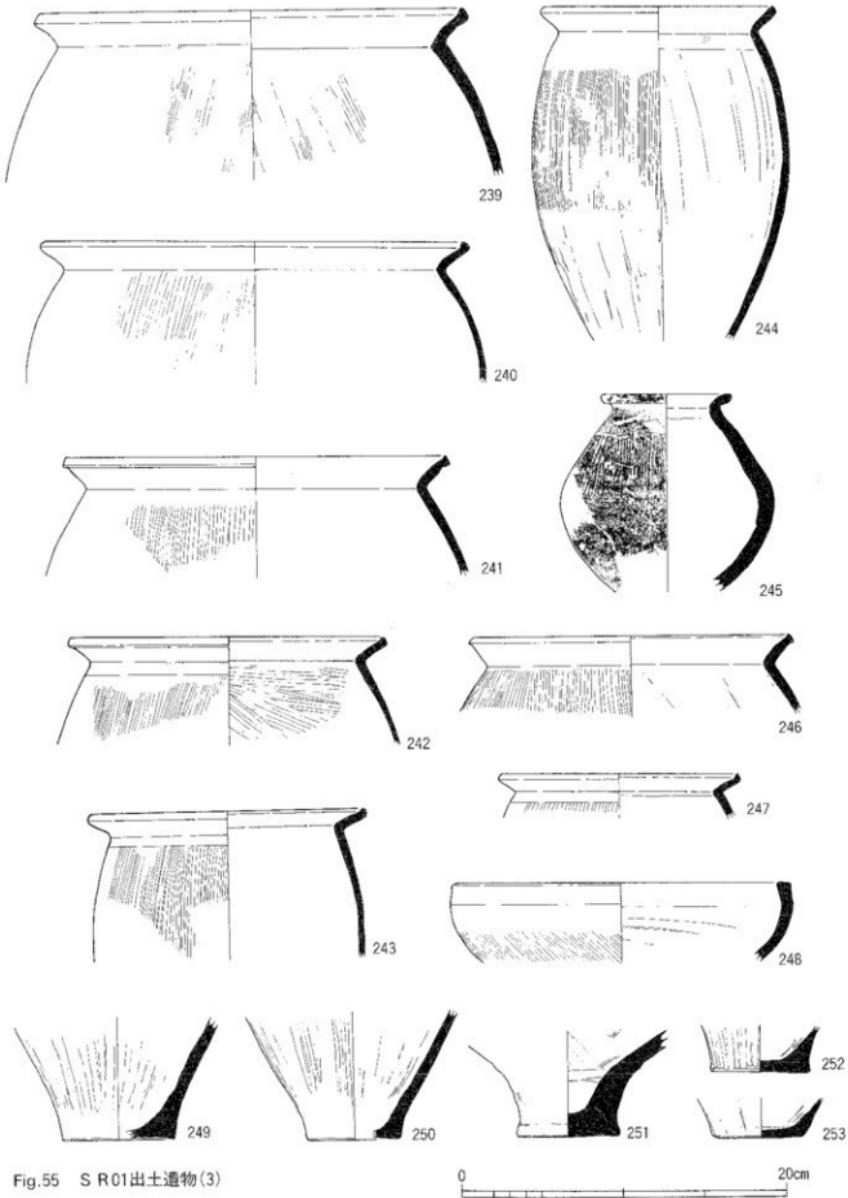


Fig. 55 S R 01出土遺物(3)

0

20cm

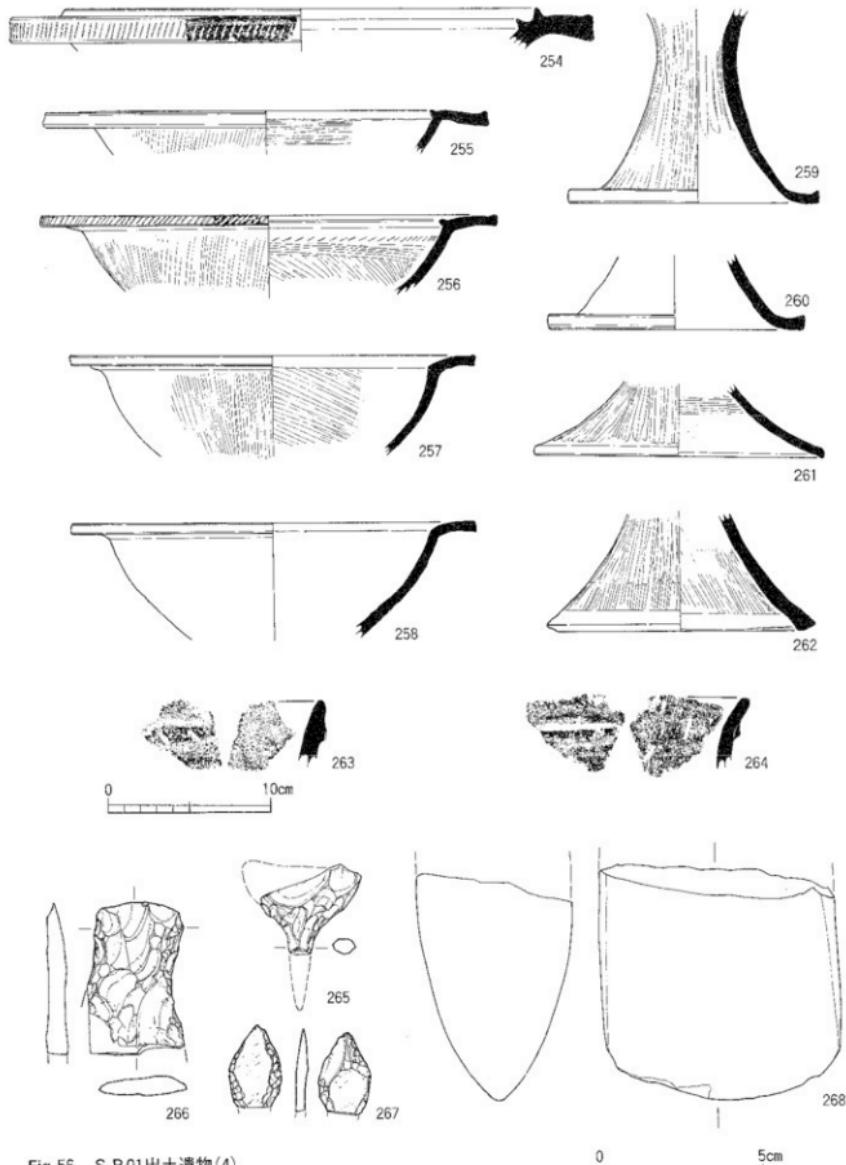
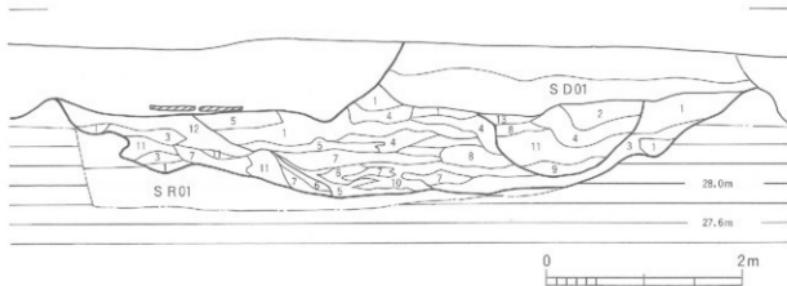


Fig.56 S R01出土遺物(4)



1 : 明黄褐色砂、2 : にぶい黄褐色砂、3 : 暗褐色シルト交じり砂、4 : 黄褐色シルト交じり砂、  
5 : 黄褐色シルト交じり砂、6 : 褐色砂、7 : 褐色砂、8 : 褐色細砂、9 : オリーブ褐色砂礫、  
10 : 黒褐色シルト交じり砂、11 : にぶい黄色細砂、12 : 暗オリーブ色砂、13 : にぶい黄褐色シルト質砂

Fig.57 第2次調査地北壁 S R 01・S D 01土層断面図

S D 01

第2次調査区東部の西半で検出された溝状遺構である。S R 01の埋没後、その上をほぼ同じ方向で流れ落ちる。幅約1.5m、遺構検出面からの深さ約0.8mを測る。(Fig. 18・57・写真図版10-2)。覆土は洪水砂層が主体で、S R 01と時期的にはほぼ変わらず、弥生時代中期中葉の土器・石器が含まれる(Fig. 58~60・写真図版39-2・40)。他に摩滅した縄文時代晩期の土器片1点(Fig. 58-272)が出土した。弥生土器はほとんど磨滅が認め

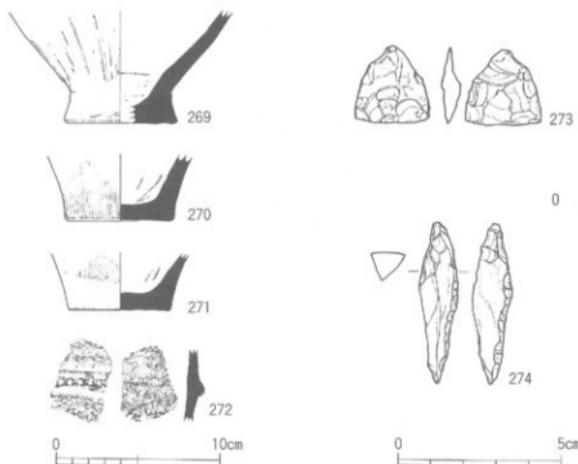


Fig.58 S D 01出土遺物(1)



Fig.59 S D 01出土遺物(2)

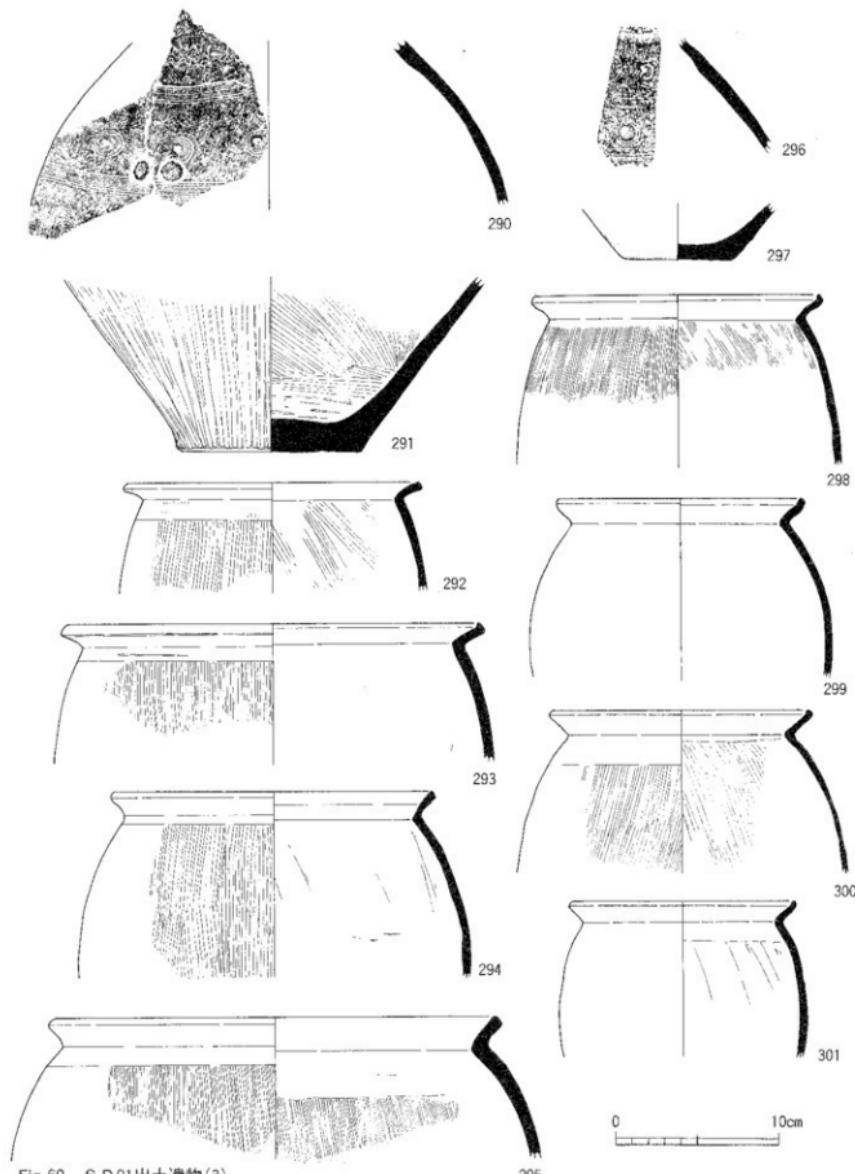


Fig.60 SD 01出土遺物(3)

られない。

SD04

第2次調査地東部で検出された「く」字形に屈曲する溝である (Fig. 61・写真図版17)。底面は、屈曲部を中心に南と北東の2方向に下がる。南へは、幅約2~3mの比較的浅い溝となり、北東へは幅6.0m以上と広がり、深さも約0.66mと深くなる。さらに、この溝は崖面に至り急激な角度で落ちる。この部分は、15世紀以降の洪水砂で埋没する。出土した遺物には弥生時代中期から鎌倉時代までのものがある。弥生時代中期の遺物が底面に密着して、弥生時代末期の土器が底面からやや浮いた状態で出土する。また、底面から約0.1m上で飛鳥時代の須恵器数個体が広い範囲にわたってばらけた状態で出土している。地点的には、弥生時代中期の遺物が溝の東部に多く、弥生時代末の遺物が溝の南部に集中することが注意される。(Fig. 62・63、写真図版17・18)。覆土は土壤化した分層しづらい黒色シルト質砂であるが、溝を再掘削したような痕跡は認められない。したがって、この遺構は長期間開放された状態であったようである。先述のとおり最上層から平安時代・鎌倉時代の土器が若干出土していることにより、この時期以降最終的に埋没したものと考えられる。弥生時代中期の遺物はその中葉から後葉のもので、壺・甕・高杯など (Fig. 64~65・写真図版41~43) があり、末期の遺物には長頸壺等の壺、甕・高杯など (Fig. 66・写真図版41~43) がある。古墳時代以降の遺物は須恵器が多く、古墳時代後期の蓋杯のほか、飛鳥時代・奈良時代・平安時代・鎌倉時代のもの (Fig. 67・写真図版34・43) が少量ながら出土している。357の須恵器甕は肩部以下のみが遺存するもので、その遺存率も高い。正位で置かれたものであることを推測させる。

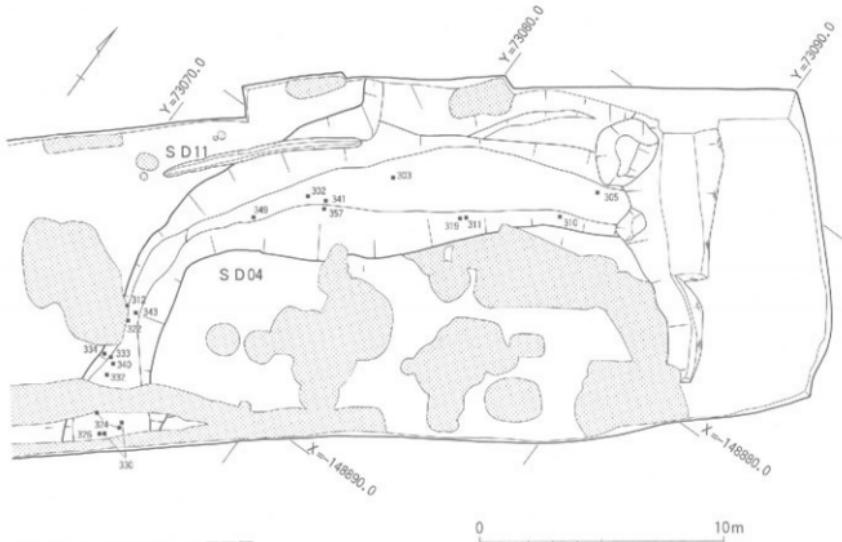




Fig.62 S D 04遺物出土状況図(1)

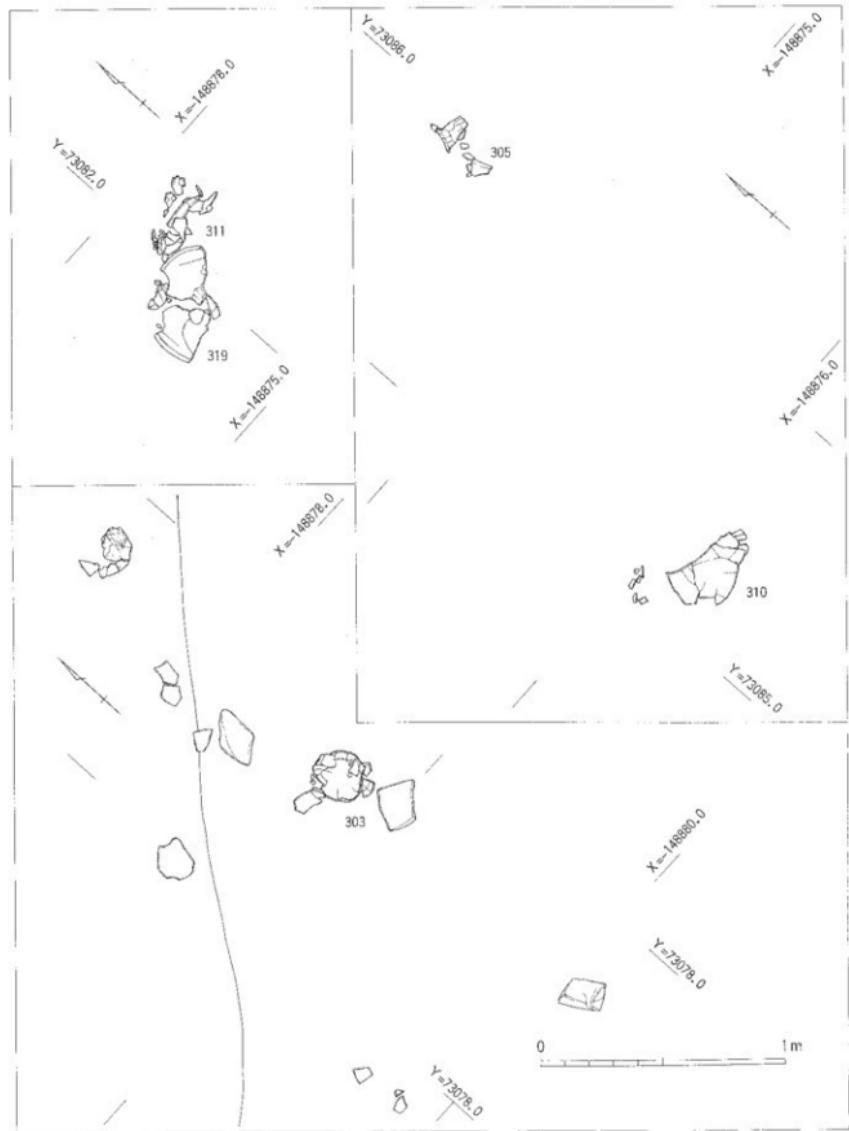


Fig.63 S D04遺物出土状況図(2)

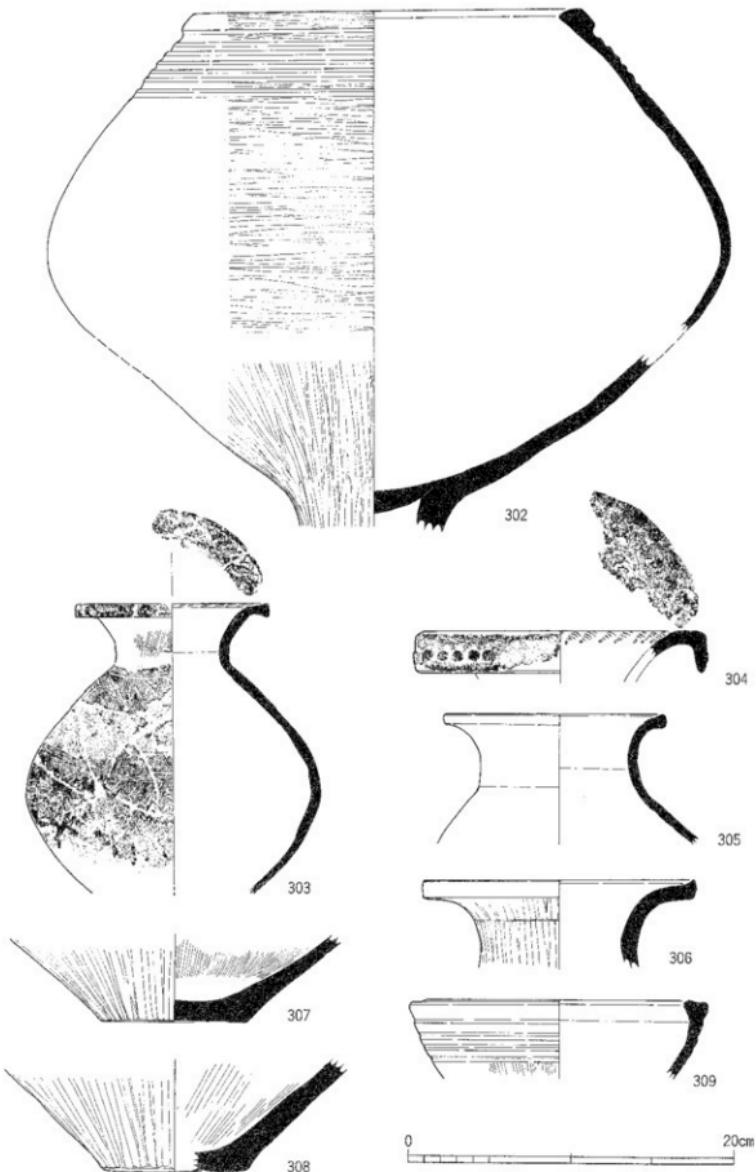


Fig.64 S D 04出土遺物(1)

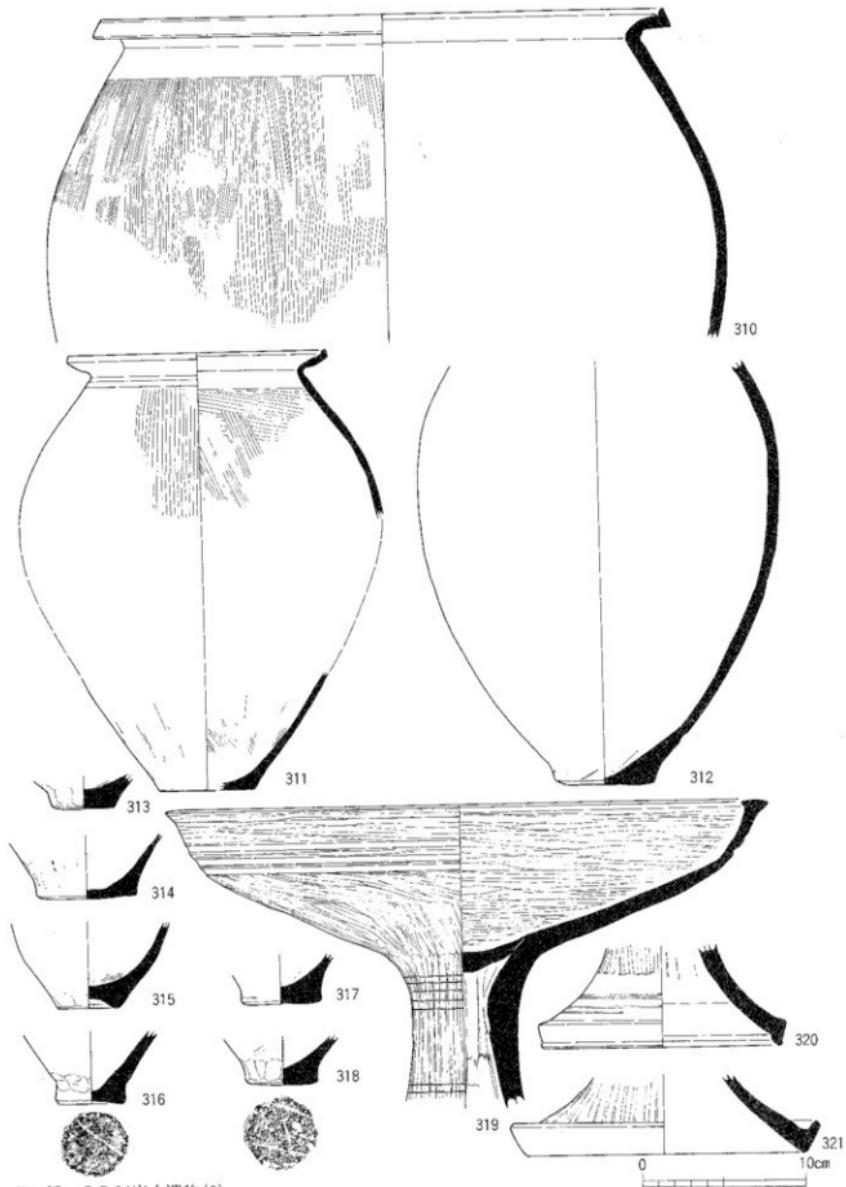


Fig.65 S D 04出土遺物(2)

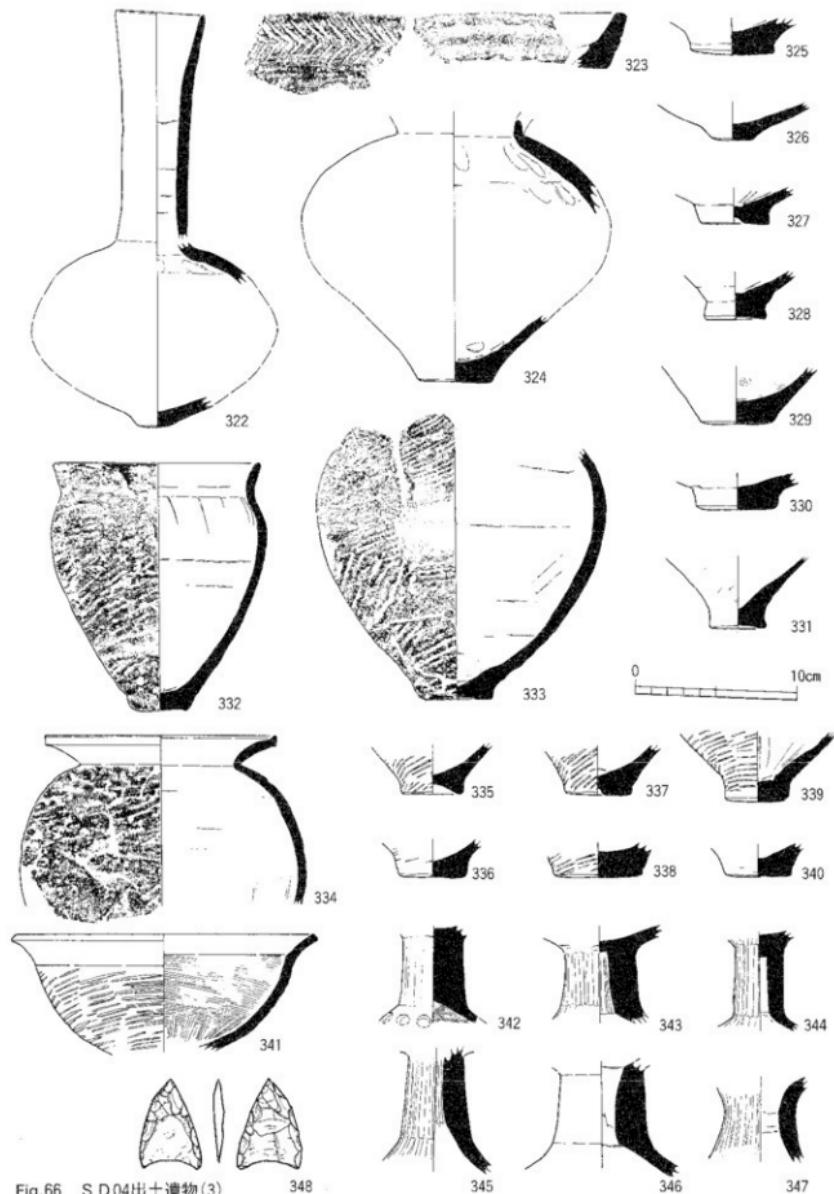


Fig.66 S D 04出土遺物(3)  
(348のみS : 2 / 3)

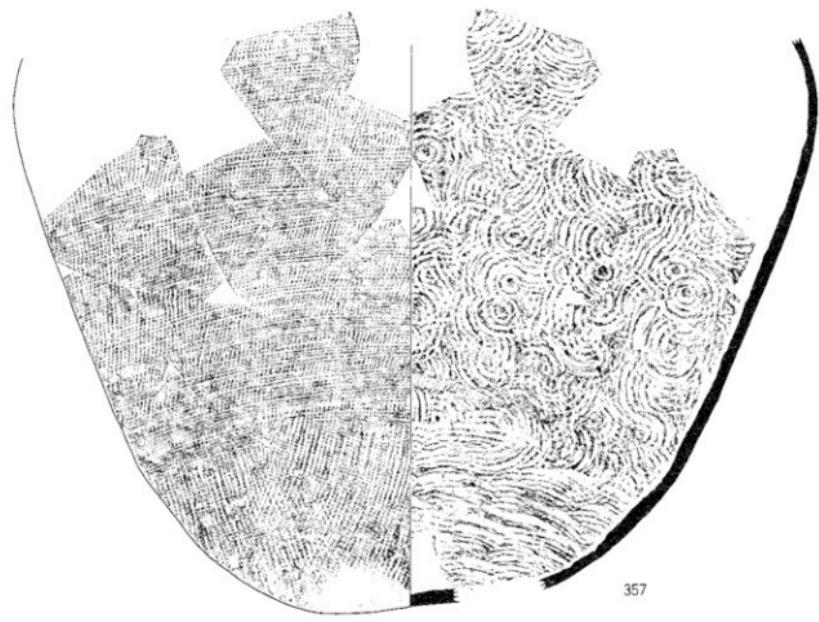
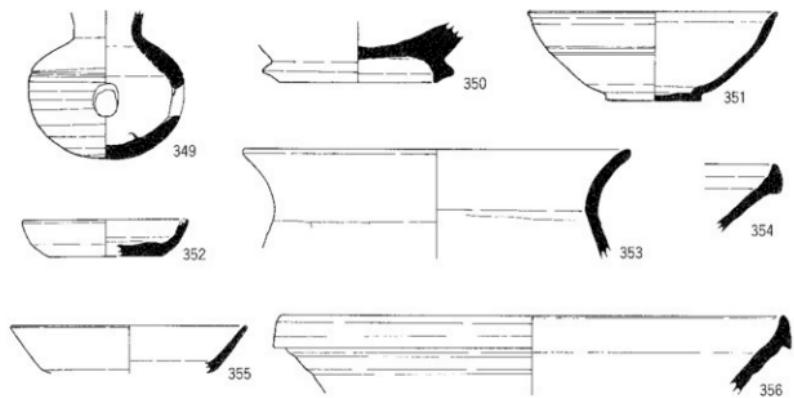


Fig.67 S D04出土遺物(4)

0 20cm

第2次調査地西部で検出された円形の堅穴住居である。北半はS D17等によって破壊され、造構確認面から床面までの深さも約0.05mと遺存状態は良くない。中央土坑1基と柱穴4基が確認された。検出プランでは径約4.0mになるが、柱穴の位置が外に寄りすぎ、本来はベッド状造構を持つ径6.0m程度の円形住居であったと推定される。

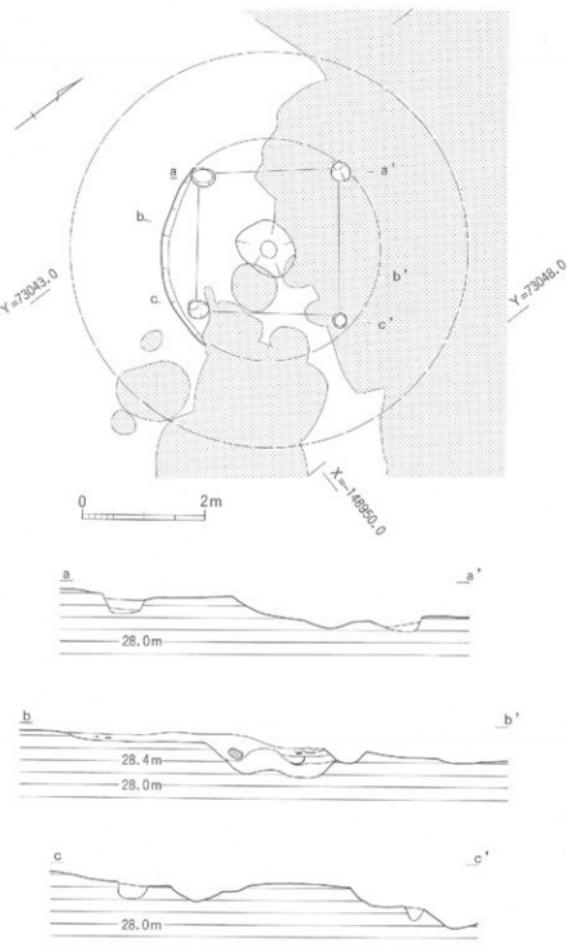


Fig.68 SB01平・断面図

柱穴はプラン円形のもので、直径は0.2~0.3m、柱穴間の距離は、2.3~2.4m前後である。住居址の中央には径約1.0m、床面からの深さ0.35mを測る不整円形の中央土坑がある。出土遺物は弥生時代後期のもので、床面に密着して甕、中央土坑から礫・甕・鉢等が出土した(Fig. 69・写真図版44)。

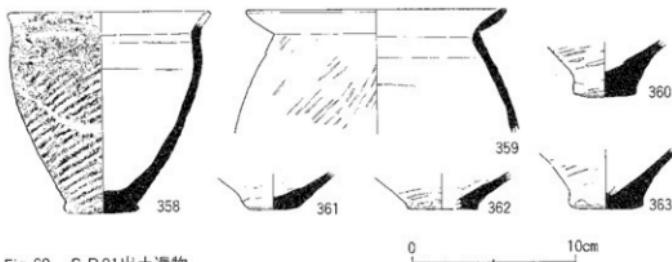


Fig.69 S B01出土遺物

#### 6. 繩文時代の遺構・遺物（第2遺構面）

S X04

第2次調査地点の東部崖上、5a層において（S X04）縄文時代の土器、サヌカイト石器、同剥片等が出土した（fig. 71、写真図版20-2）。また、調査当初の搅乱坑掘削時出土のため詳細な出土ポイントは確認できなかったが、S X04に近接する搅乱坑から神並上層式土器（fig. 71-366）が出土している。同じ層位での出土である可能性が高い。

#### 7. 小結

以下、第2・3次調査により確認された遺構・遺物を表にまとめる。

時代	遺物	遺構
縄文時代草期	神並上層式土器・サヌカイト製石器	遺物包含層
縄文時代晩期	突帯土器	なし
(弥生時代の遺構から出土)		
弥生時代中期	土器・サヌカイト製石器・玢岩製太刀・墨胎刃石斧	自然流路・溝
弥生時代後期	土器・サヌカイト製石器	豊穴住居・溝
古墳時代後期	須恵器・土師器	溝
飛鳥時代	須恵器	溝
平安時代	須恵器・滑石製石鍋	溝
鎌倉時代	須恵器・瓦器・青磁	なし
室町時代	土師器・青磁・砥石・骨	土坑
安土桃山時代	土師器・陶磁器・漆器・木製品・瓦・石塔	池
江戸時代	土師器・陶磁器・瓦・砥石・鐵滓・鰐羽口・キセル・寛永通宝	屋敷地（井戸・園池・水琴窟・土坑・溝・島等）
明治時代以降	陶磁器・瓦・鉄蹄・焼夷彈	屋敷地（井戸・溝・園池・防空壕）

Fig.70 第2・3次調査 検出遺構・出土遺物

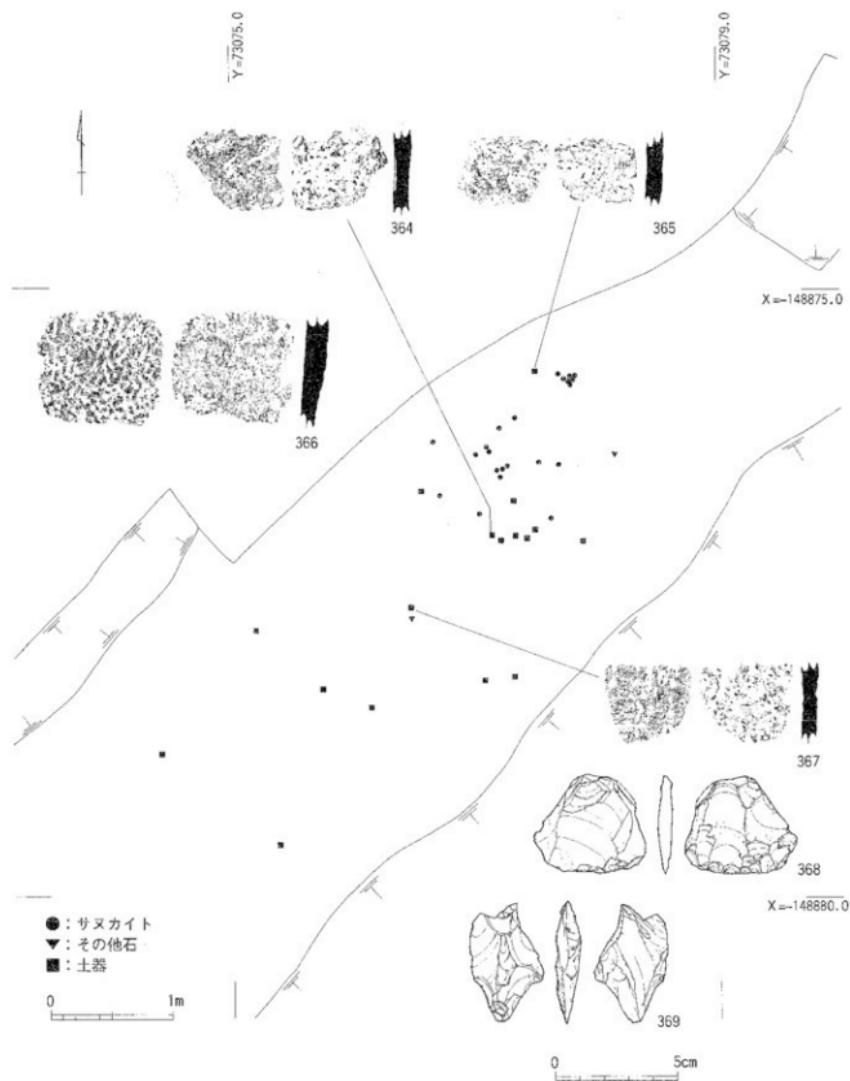


Fig.71 SX04遺物出土状況および出土遺物

### 第3節 第4・6次調査

#### 1. はじめに

第4次調査は、神戸市都市計画道路山麓線内調査対象地の西部に位置している。この調査地と第3次調査地との間には、80mほどの未調査地が存在する。これは、平成7年度の山麓線築造箇所を対象にして行なった試掘調査の結果、及び第3次調査の調査成果で、この部分については、遺跡範囲の中でも最高所に位置し、耕作や既存建物建設など後世に大きな変更・削平を受けていることが予想された。そのため遺構・遺物が希薄であると判断し、発掘調査を行わなかった。

第6次調査は、第4次調査地に西接する調査地で、山麓線築造予定地内調査範囲の西端に位置する。第4次調査時に既存建物が存在していたため、建物の撤去後に調査を行なった。調査年度は異なるが、隣接した調査地であることや、弥生時代中期の溝など遺構にも共通性があり、合わせて報告する。

なお、第4次調査地は、都合4区に地区割りをし、調査を実施した。



Fig.72 調査地位置図 (S = 1 /2500)

## 2. 調査の概要

### 基本層序

第5次調査地東部は、遺跡内で高所に位置するものの、遺構面上層の堆積層はわずかに見られる。しかし、大半は盛土を除去すると、その直下に遺構面が検出される。現地表面から遺構面までは0.5mである。一方、調査区中央～西部では良好な堆積状況が観察できた。現地表面から盛土・茶灰色粗砂～暗茶灰色細砂（旧耕作土）・黒色シルト質極細砂（古墳時代遺物包含層）・暗灰褐色シルト質極細砂（弥生時代後期遺物包含層）・茶黃灰褐色シルト質極細砂（弥生時代中期～古墳時代初頭遺構面）の順で堆積する。現地表面から遺物包含層までは0.6～1.1mで、遺構面までは1.1mである。

なお、第6次調査地では、地震痕跡がいたるところに確認された。溝の堆積層が上下でずれていたことが最も明瞭な痕跡であった。さらに、調査地北側で断ち割り調査を行い、そこでも明瞭な地層のずれを確認した。地震痕跡は慶長伏見大地震時のものと考えられる。

### 検出遺構

この調査地では、第1～3次調査までのように縄文時代・中世～近世の遺構は確認されなかった。弥生時代中期の溝1条・土坑4基、弥生時代後期および弥生時代末～古墳時代

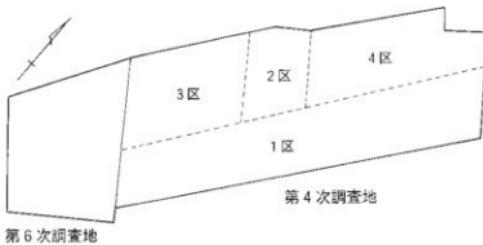


Fig.73 調査区地区割り図

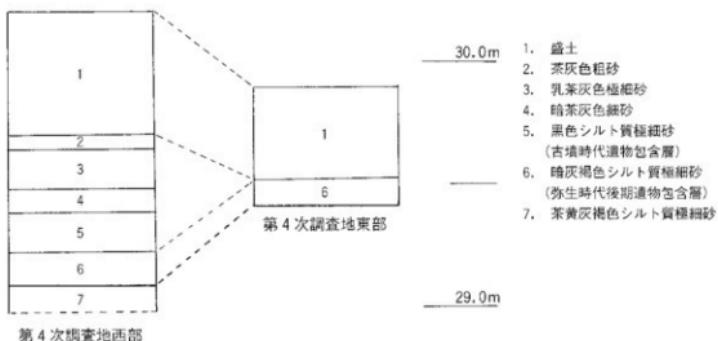


Fig.74 基本層序

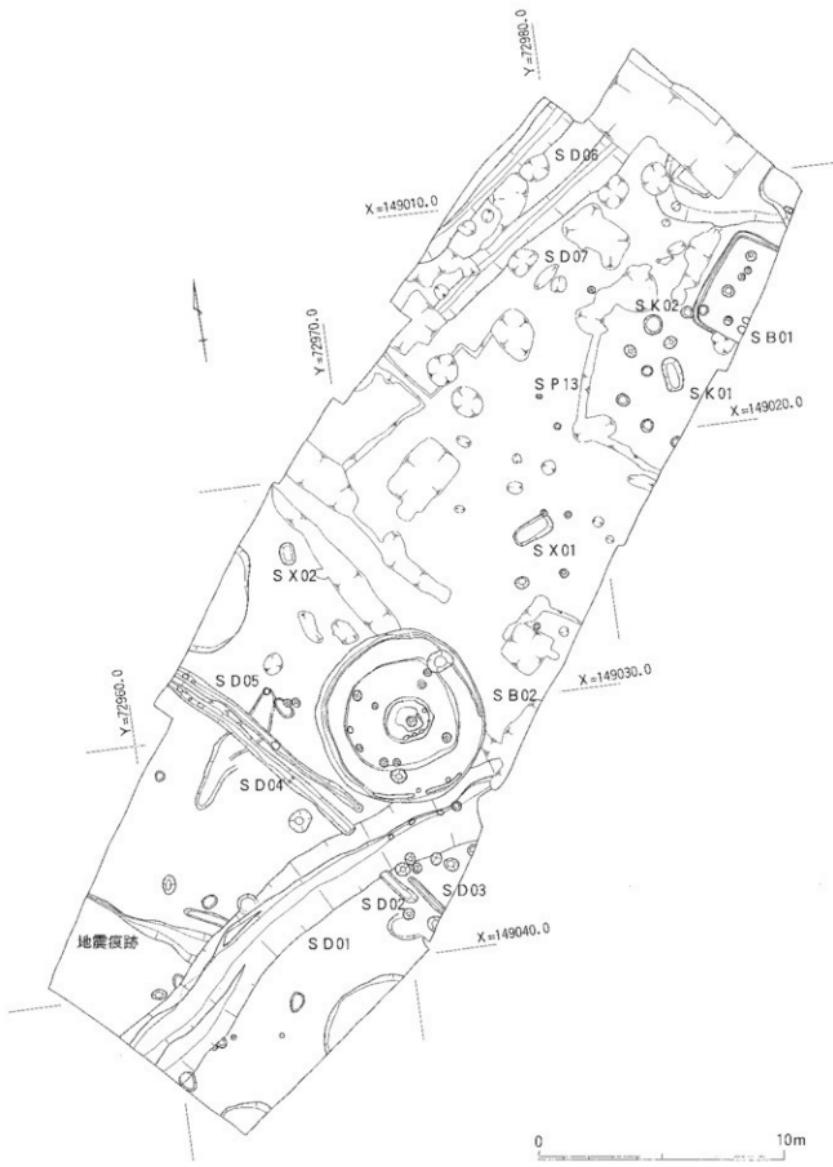


Fig.75 調査地平面図

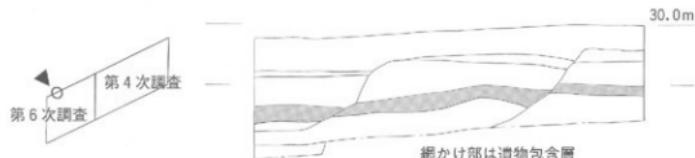


Fig.76 地震痕跡土層断面図

初頭の堅穴住居が各1棟、弥生時代の落ち込みが6ヶ所、古墳時代後期の掘立柱建物1棟、ピット39基、古墳時代後期以降の溝2条、時期不明の溝2条が検出された。

## 2. 古墳時代以降の遺構・遺物

S B03

1区東で検出された遺構で、2間×4間以上の掘立柱建物である。東西長は柱心々間で約6.0m、南北長2.8m以上で、主軸は、地形に並行している。柱穴は、直径0.3m前後、深さ0.3~0.4mの規模である。

須恵器壺蓋370はP2から出土した。口径13.0cm、器高2.5cmである。内面には丁寧な仕上げナデを施す。口縁端部はやや強いナデが施され、口縁はやや外方に開く。6世紀中頃のものと考えられる。

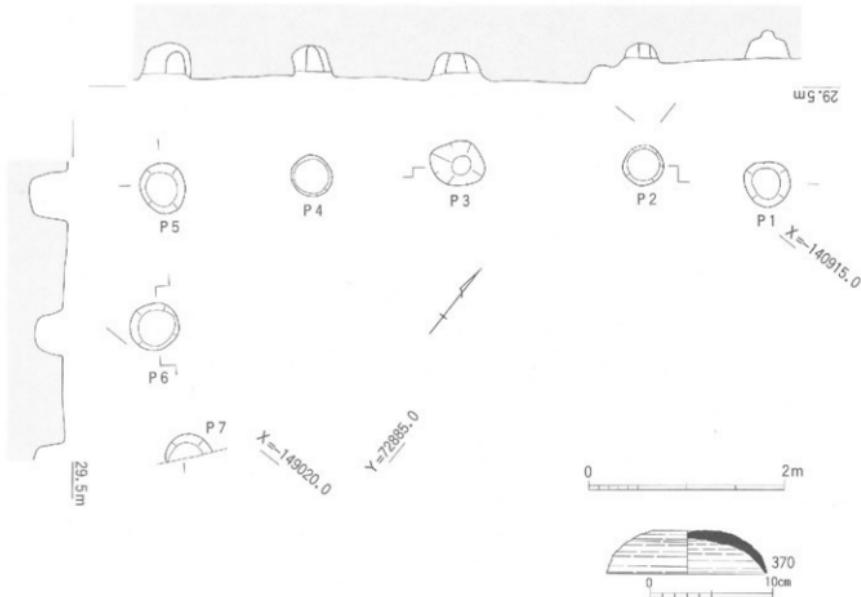


Fig.77 S B03平・断面図および出土遺物

S D 02~05

1区と3区にかけて検出された遺構で、検出長15.0m前後、幅0.3m前後深さ0.1~0.2mの規模である。S D 02とS D 04、S D 03とS D 05がそれぞれ縦がり、2本並行して掘削された溝と考えられる。溝北部の底面には、直径0.1~0.2m、深さ0.05mほどの浅いピット状の落ち込みが確認され、その形状から耕作時の鉢の痕跡と考えられる。埋土は、黒灰色シルト質極細砂の單一層で、須恵器・土師器・弥生土器の小片がわずかに出土している。そのため詳細な時期は不明である。

S D 06・07

4区で検出された2本の溝で、S D 06は検出長8.0m、幅0.5~1.2m、深さ0.3mである。また、S D 07は検出長10.0m、幅1.0~1.3m、深さ0.2mの規模である。埋土は、どちらも湯茶灰色砂質土で、遺物の出土はなく、時期は不明である。これらの溝もS D 02~S D 05と同様に、2本が1.2m間隔で並行に掘削され、畝状を呈していることから、耕作に伴う溝である可能性がある。

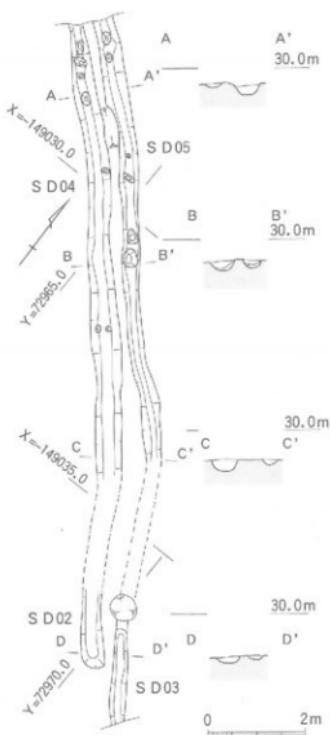


Fig.78 S D 02~05 平・断面図

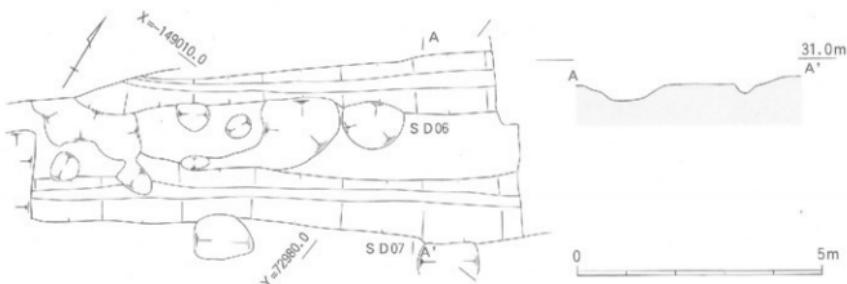


Fig.79 S D 06・07 平・断面図

### 3. 弥生時代の遺構と遺物

S D01

第4次調査地1区西～第6次調査地で検出された遺構で、検出長19.0m、幅2.0m前後、深さ1.5mの規模のV字溝である。壇上は大きく4層に分けられ、下層からは弥生時代中期の壺や甕が大量に出土している。最下層には上器はほとんど包含されず、基盤層と変わらない土壤であり、肩崩れによる堆積と考えられる。また、西側で地震の影響により溝の上下で食い違いが生じている。そのため現状ではやや南に湾曲した平面形であるが、実際は東西方向に真っ直ぐに延びていくようである。東側ではV字であった断面形は逆台形になり、部分的にオーバーハングする。

壇土から広口壺371～376・381～383、底部372、壺体部378～380、細頸壺384、甕385～394、高坏395～396、鉢397～399、台形上器400、石錐A～C、石錐D、石斧E～Gが出土している。

広口壺

371は口径20.1cm、器高35.7cm、底径6.2cmである。口縁部は外方に大きく広がり、端面下半部に刻み目を施している。頸部～体部上半にかけて櫛描直線文を7条施している。外面上半・内面はハケ、外面下半はヘラミガキ調整を施す。372は体部で底径8.0cmである。体部上半～中央部には両端が幅広い施文具で櫛描直線文と櫛描波状文が交互に施されている。外面はヘラミガキ、内面はハケ調整を施す。373は口径23.6cmで、口縁部は下がり気味で、端面には円形浮文、内面には櫛描扇形文と櫛描波状文、頸部外面には櫛描直線文を施す。外面はハケ、内面は丁寧なヘラミガキ調整を施す。374は口径21.9cm、器高47.2cm、底径10.0cmである。口縁端部は下方に拡張し、端面には櫛描波状文を施す。頸部には断面三角形の貼付突帯を3条巡らせている。また、体部上半には2条の櫛描直線文の間に6条の波状文を施している。外面下半はヘラミガキ調整で仕上げる。375は口径15.2cmで、口縁端部は大きく外方に下垂し、端面には櫛描波状文を施した後円形浮文を付す。内面には円錐形浮文・櫛描扇形文を施す。また、頸部には2条の断面三角形の貼付突帯を巡らす。376は口径18.2cmで、口縁端部は下垂しており、端面には鋸歯文状の文様を施す。頸部には刻み目をもつ断面三角形の貼付突帯が2条付され、その下に櫛描波状文が巡る。外面にはハケ調整を施す。377は大型品の底部で、底径9.0cmである。外面はヘラミガキ、内面はハケ調整を施す。378は底径6.0cmで、頸部は丸みを持つ体部からやや外方に開く。底部は比較的大きく安定している。外面上半・内面はハケ、外面下半はヘラミガキ調整を施す。379は底径6.7cmで、丸みを持つ体部中央に櫛描列点文を施しており、体部下半は粗いヘラミガキ調整を施す。380は底径7.2cm、379とはほぼ同規模のもので、これも体部中央に櫛描列点文を施している。外面はハケ調整を施し、内面には指頭圧痕が多く残る。381は口径12.8cm、推定器高25.0cm、底径7.2cmで口縁端部は上方に拡張し、端面には斜めに大きな刻み目を入れる。体部はやや側の張った形態で、体部中央に櫛描列点文、その直下にも縱方向に櫛描列点文を3点施す。外面上半・内面には粗いハケ、外面下半はヘラミガキ調整を施す。382は口径19.0cm、器高42.3cm、底径7.8cmである。口縁部は、頸部から大きく外方に広がり、端部は上方に若干拡張する。頸部には指頭圧痕突帯を貼り付け、体部中央には櫛描列点文が施す。外面上半・内面はハケ、下半はヘラミガキ調整を施す。383は口径18.4cmで、口縁端部は外方に下垂し端面には4条の凹線文を巡らせ、縦に3個1対の円形

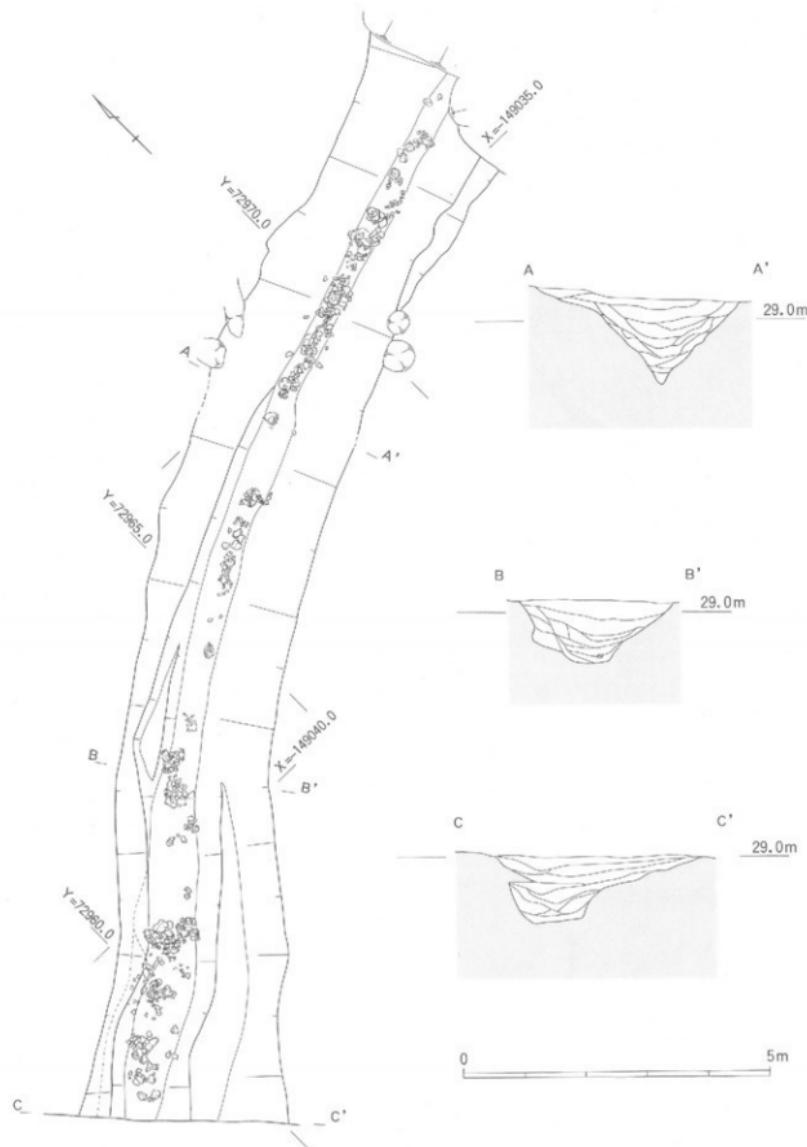


Fig.80 S D 01 平・断面図

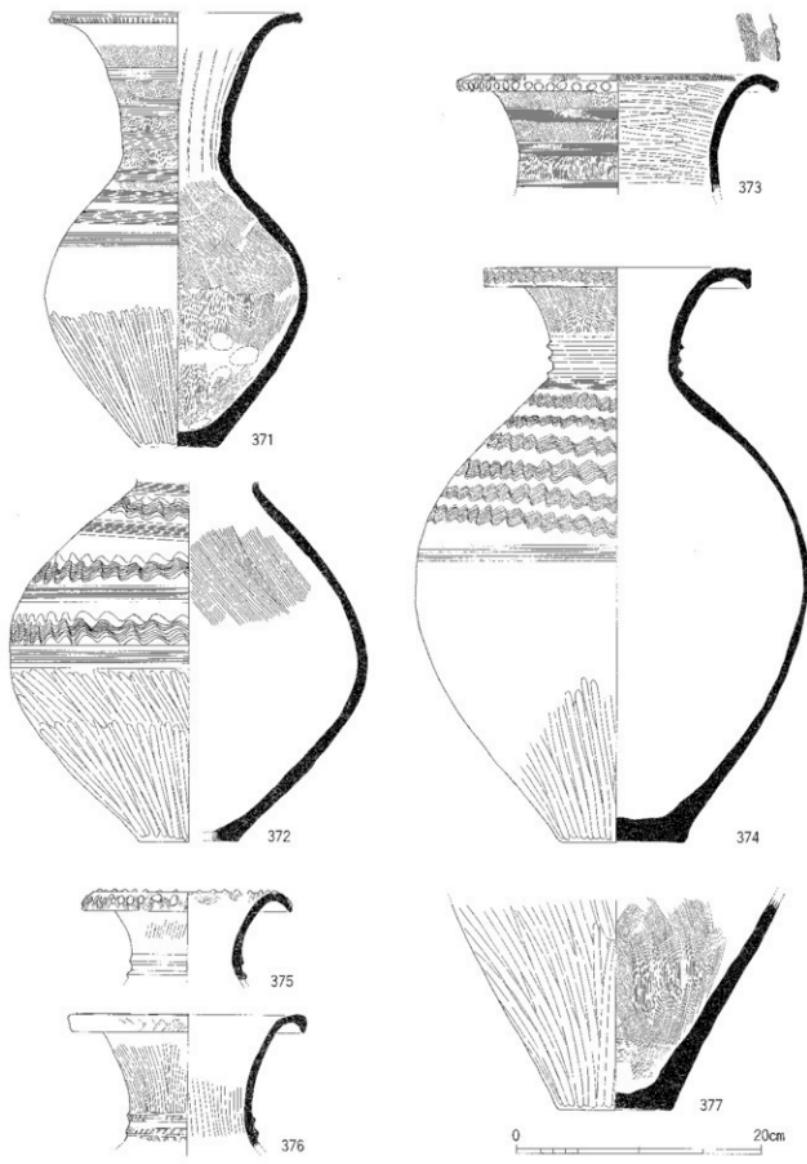


Fig.81 S D01出土遺物(1)

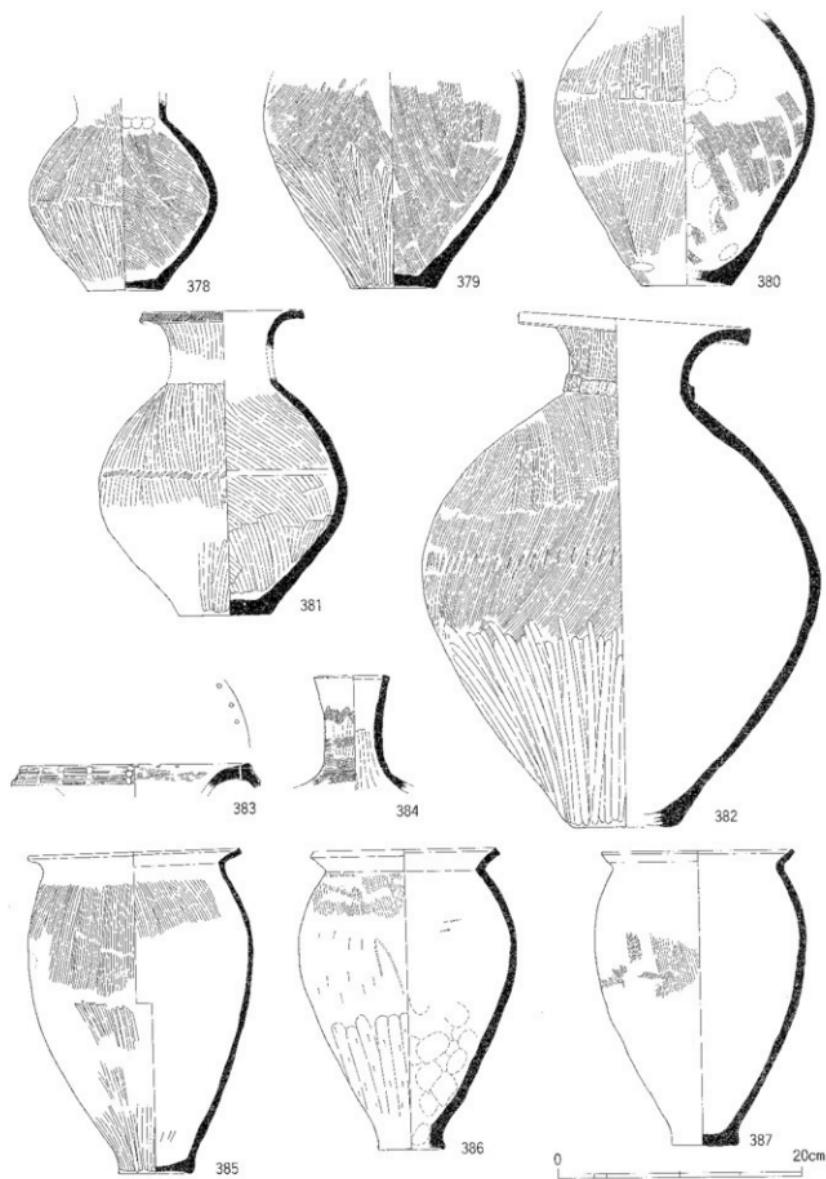


Fig.82 SD01出土遺物(2)

浮文を付す。内面には3孔の紐孔を穿ち、ヘラミガキ調整を施す。

**細頭壺** 384は口径5.4cm、やや外傾しながら長く立ち上がる頭部で、端部は面をもつ。外面をハケで調整した後、頭部中央から体部には櫛描波状文・櫛描直線文を交互に施している。

**甌** 385は口径17.2cm、器高26.6cm、底径5.3cmである。口縁部は張りの少ない長胴の体部から外反し、端部上方をつまみ上げ端面を形成する。内外面はハケ調整であるが、底部内面にヘラケズリ調整が認められる。386はやや胴の張った長胴の体部で、口縁端部はつまみ上げ端面をつくる。外面中央には逆「し」の字のヘラ記号を施している。内面には指頭圧痕が残る。外面上半はハケ、下半はヘラケズリ調整を施す。一方、内面には指頭圧痕が多く残る。387は、口径15.4cm、器高24.25cm、底径5.3cmである。あまり胴が張らない体部で、口縁は外反し端部は丸く仕上げる。外面はハケ調整を施す。388は口径14.5cm、器高17.8cm、底径5.6cmである。口縁部は鋭く外反し端面は丸く仕上げる。体部はあまり張らず、底部は比較的大きく安定している。外面はハケ調整を施す。389は口径18.0cmで、口縁部は張りの少ない体部から鋭く外反する。体部上半から中央にかけて縦に櫛描列点文を施している。これは、神戸市の玉津田中遺跡に類例が見られる<sup>11</sup>。外面上半・内面にはハケ、外面上半にはヘラミガキ調整を施す。390は口径20.6cm、器高33.25cm、底径6.6cmである。口縁部は外反し、端部上半をつまみ上げる。体部は長胴であり胴が張らない。外面下半のハケ調整は5本/cmで、1本1本の痕跡が深く先端が櫛状の原体が予想される。391は口径18.4cm、器高34.5cm、底径7.2cmである。390とはほぼ同形であるが、口縁端部のつまみ上げが強い。外面上半はナデ、下半はヘラケズリの後ヘラミガキ、内面はハケ調整を施す。392は体部で、底径9.8cmである。胴部はあまり張らないものと考えられる。外面はヘラミガキ、ハケ調整を施す。393は口径21.4cm、器高34.35cm、底径7.6cmである。口縁部は外反し端部をつまみ上げる。体部はやや胴が張り、底部は大きく安定している。外面上半・内面はハケ、下半はヘラミガキ調整を施す。394は、口径27.2cm、底径14.8cmの大型品と考えられる。口縁端部は上下に拡張する。体部はやや張った形態で、中央部下半に外部から1ヶ所直径1cmほどの穿孔を施している。外面上半・内面にはハケ、外面上半はヘラミガキ調整を施す。

**高壺** 395は口径28.0cmで、やや浅い壺部から斜め上方に立ち上がり、口縁部は水平に張り出す。内端をつまみだして三角形状に突出させる。396は脚部で、底径16.0cmである。細い脚柱から斜めに広がり、端部はやや上下に拡張する。外面はヘラミガキ調整を施す。

**鉢** 397は内湾しながら立ち上がり、口縁端部を外に拡張する。端面には櫛描波状文を施した後に円形浮文を付す。体部には断面三角形の突帯を2条貼り付け、下方の突帯には刻み目を入れる。398は口径17.6cm、器高17.2cm、底径9.2cmである。体部は大きく安定した底部から直線的に外傾する。口縁端部はわずかに内側に肥厚し、水平な端面を形成する。体部上半には櫛描列点文を施す。399は台付鉢脚部で底径10.0cm、脚上部は円盤充填技法で、鉢部との境界には断面三角形の突帯を2条貼り付ける。脚部は短く開き、端部は強いナデにより上方に拡張する。内外面ともハケ調整を施す。

**台形土器** 400は台部径20.4cmで、台端部はやや外方に張り出し上面はナデ調整が施され、数ヶ所に粗状の圧痕が残る。

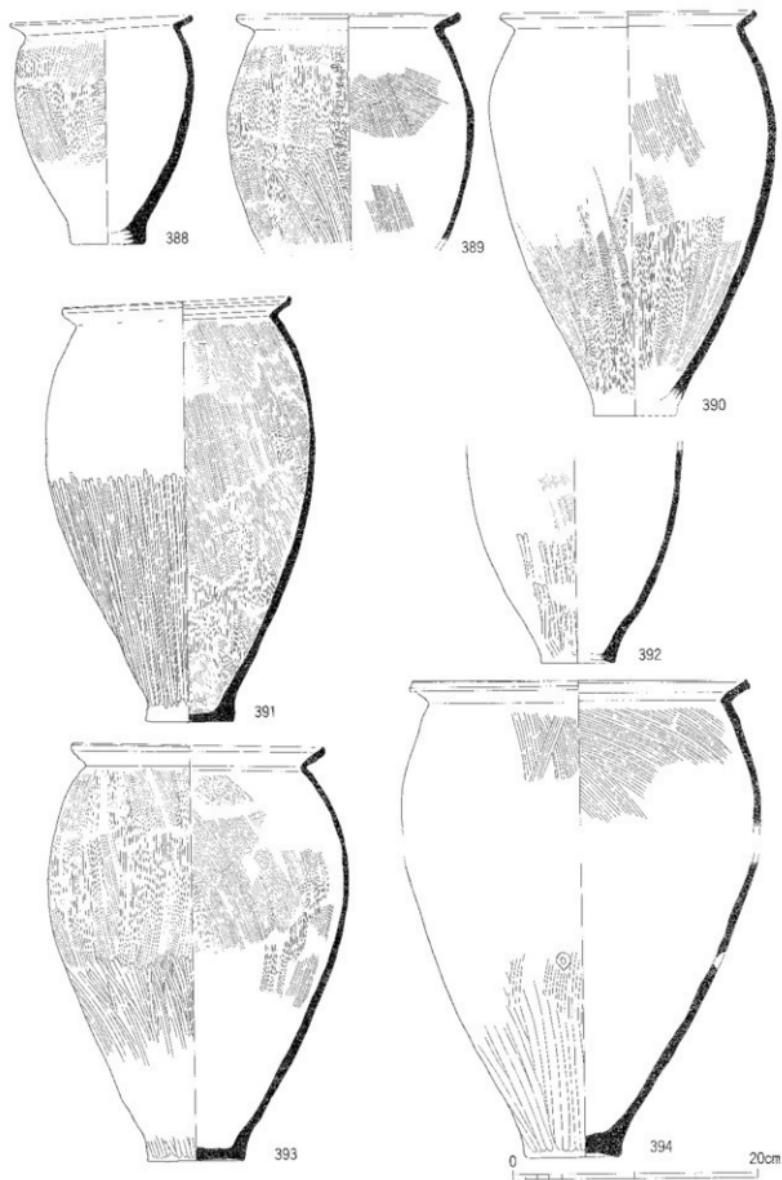


Fig.83 S D01出土遺物(3)

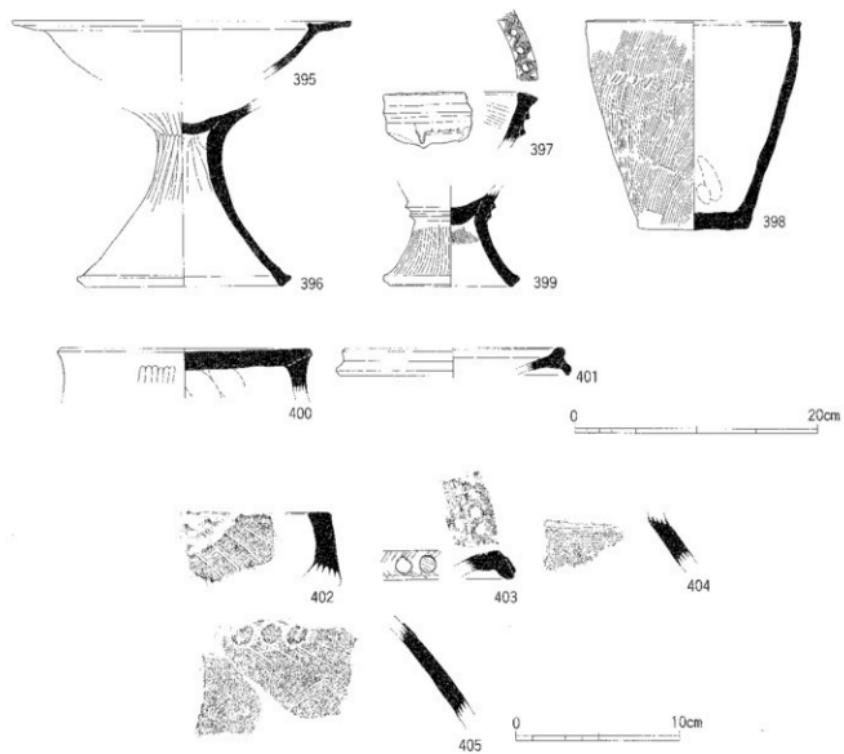


Fig.84 S D01出土遺物(4)

その他

401は口縁部で口径17.4cm、口縁部に強いナデ調整を施し上下に拡張する。器台口縁部と考えられる。胎土は他製品と異なり乳白色で、他地域からの搬入品とも考えられる。搬入品は他に生駒西麓産の土器小片もみられる。402は広口壺口縁で、頸部から屈曲して立ち上がる口縁部で罐面に斜格子文を施している。403は壺口縁で、口縁端面にヘラ描き綾杉文と円形浮文、内面には竹管文を施している。404は壺体部で、376と同様の櫛描波状文を施す。405は壺体部で、大きく綾杉状にヘラ描を施し、3つの円形浮文を付す。その他のもの、國化はできなかったが、円形浮文・斜格子文・指領圧痕文貼付突帯などを施す土器片が多く出土している。また若干、凹線文を施す土器なども見られる。

これらの遺物から主に弥生時代中期中葉のものと考えられる。

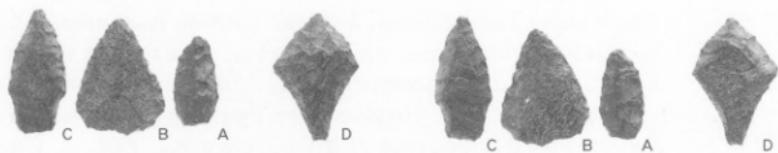


Fig.85 S D01出土石鎌・石錐

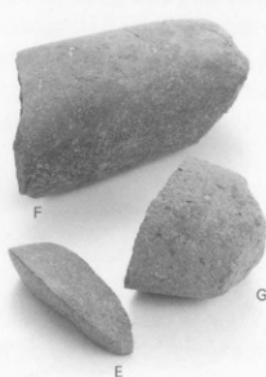


Fig.86 S D01出土石斧

番号	器種	型式	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	材質	層位
A	石鎌	凸基無茎式	22.6	11.4	3.3	0.8	サヌカイト	最下層
B	石鎌	平基式	29.1	22.3	4.3	2.7	サヌカイト	最下層
C	石鎌	凸基有茎式	31.0	14.0	5.0	2.4	サヌカイト	上層
D	石錐	—	31.8	21.5	5.6	2.8	サヌカイト	最下層
E	大型蛤刃石斧	—	30.0	68.6	22.6	56.2	閃綠岩	下層
F	大型蛤刃石斧	—	122.0	71.0	48.0	604.0	玢岩	下層
G	大型蛤刃石斧？	—	49.3	64.3	46.0	204.8	玢岩	上層

Fig.87 S D01出土石器法量表

S X01

1区中央で検出された遺構で、長さ1.8m、幅0.6m、深さ0.4mの規模をもつ長方形土坑である。断面形は逆台形を呈し、埋土は3層に分けられる。上層から中層にかけて遺物がまとまって出土している。その形状から墓坑である可能性があるが、土器が完形ではなく破片で多く入っているため、土器棺墓とすれば、特異な形式のものと言える。

埋土からは弥生土器の蓋形土器406、無頸壺407、短頸壺408、壺409・410が出土している。406は蓋形土器で口径11.0cm、全面にナデ調整を施し、2個1対の紐孔を外面から内面に穿つ。407は406に対応する無頸壺で口径11.6cm、口縁端部はナデにより内湾し、その上面に平坦面を形成している。口縁部のやや下方に2個1対の紐孔を穿つ。外面にはナデ、内面はハケ調整を施す。408は短頸壺で口径12.4cm、器高32.35cm、底径8.0cm、口縁部は大きく外方に広がる。口縁端部にはナデにより面が形成される。体部は卵形でやや胴が張っている。体部外面の中央には櫛拂列点文が施されている。外面上半・内面はハケ、外面下半はヘラミガキ調整を施す。409は壺で口径15.7cm、器高23.2cm、底径5.5cm、口縁部は大きく外方に開く。体部はあまり張らない。外面はハケ・ヘラミガキ調整を施す。410は、復元口径30.0cmと大型品で、口縁端部は上下に拡張している。外面は細かいハケ、内面は粗いハケ調整を施す。

これらの遺物から弥生時代中期中葉のものと考えられる。

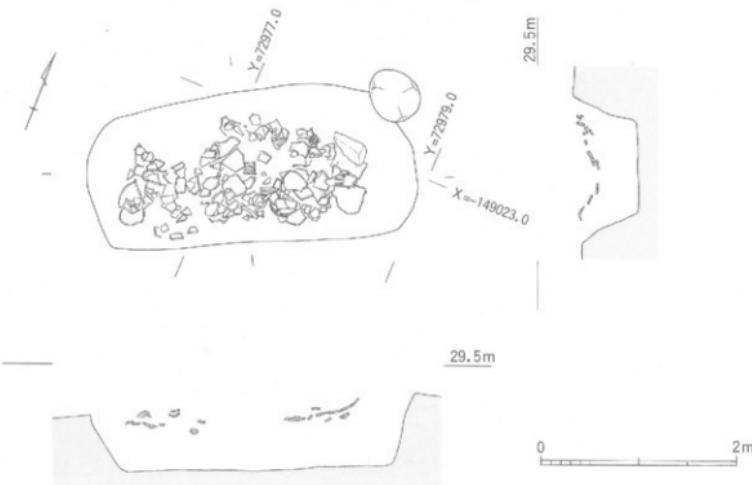


Fig.88 S X01平・断面図

S X02

3区北東隅で検出された遺構で、長軸1.0m、短軸0.6m、深さ0.2m前後の楕円形土坑である。断面形は若干いびつな逆台形で、中央部がやや高く残る。埋土は灰褐色系のシルト質極細砂で、その中には炭も混じる。

出土遺物は、弥生土器の直口壺411・壺412・鉢413が出土している。411は、直口壺で口径10.0cm、口縁部は真っ直ぐに外方に開き、口縁端部はナデ調整により丸く作り出されて

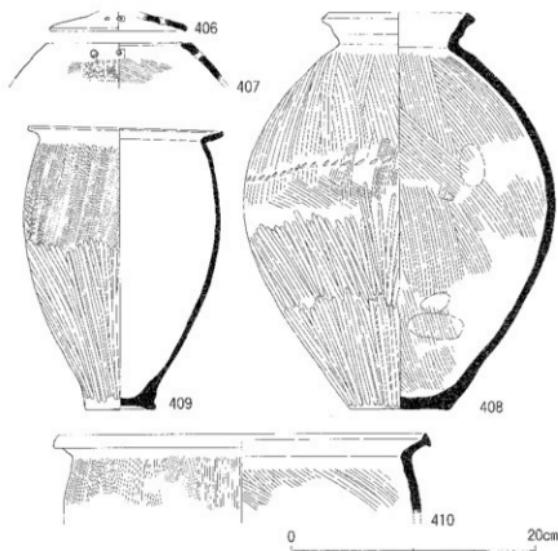


Fig.89 S X01出土遺物

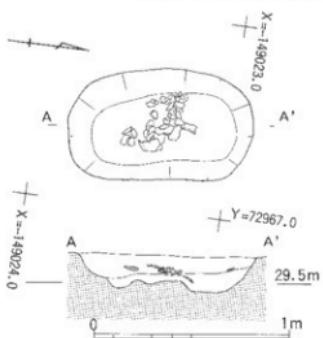


Fig.90 S X02平・断面図

いる。412は壺で、口径17.0cm、口縁端部は平坦面を作り出して斜めに大きな刻み目を施す。また、頸部には指頭圧痕突帯文を貼り付ける。413は鉢で、口縁端部は内外に拡張し端面を形成する。体部上半には2条の断面三角形の貼付突帯を施す。

これらの遺物から弥生時代中期中葉のものと考えられる。

S K01

1区東で検出された遺構で、長軸1.4m、短軸0.8m、深さ約0.2mの楕円形土坑である。断面は皿状で、埋土は単一層である。埋土からは弥生時代中期の壺などの上器が出土して

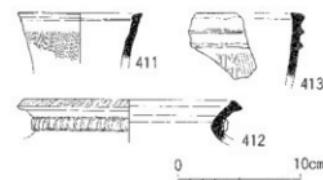


Fig.91 S X02出土遺物

S K02 いる。

1区東で検出された遺構で、直径0.5m、深さ約0.2mの円形土坑である。埋土は暗灰褐色～淡灰褐色極細砂で、埋土からは弥生時代中期の土器が出土している。

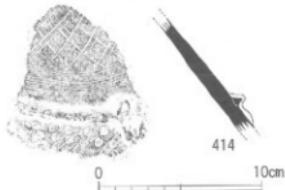


Fig. 92 S K02出土遺物

S B01

1区南東隅で検出された遺構で、1辺4.5m、深さ0.5mの方形堅穴住居である。調査区の境界で検出されたため、半分を検出したのみである。床面では、幅0.2m、深さ0.15mの周壁溝がめぐり、6基のピットを検出した。調査区壁際に主柱と考えられるピットを確認したが、その他は浅い凹みであった。床面には貼床などの施設も確認されなかった。また、住居廃絶後に配置または投棄された壺・甕・高杯・鉢などの弥生時代後期の土器が大量に出土した。住居の北東隅では、拳大の河原石が並べ置かれ、また、複数の甕がまとめて置かれたような状況で検出され、手焙形土器・絵画土器・穿孔のある土器が見られるなど特異な状況が観取される。

埋土からは広口壺415～418、長頸壺419・420、壺体部421～423、甕424～429、鉢430～433、手焙形土器434、石錐H、磨石Iなどが出土している。

広口壺

415は口径10.0cmで、外面には縱方向、内面には横方向のヘラミガキ調整を施す。416は口径15.6cmで、大きく下垂した口縁端面に3条の擬凹線文を施す。頸部から体部には、へ

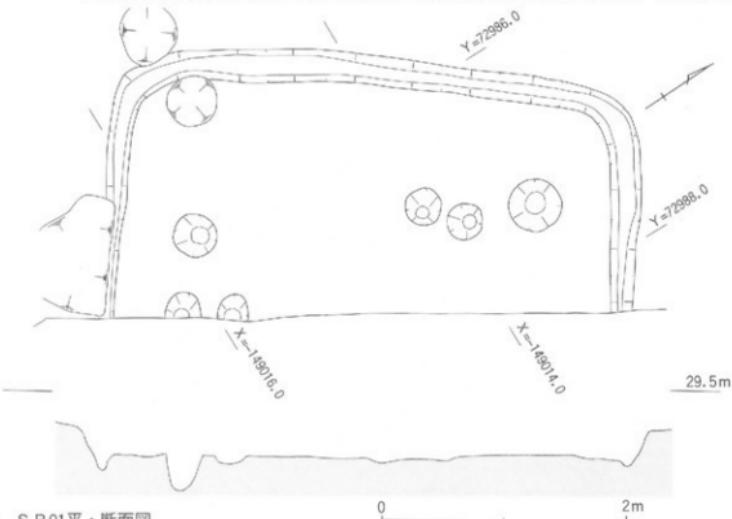


Fig. 93 S B01平・断面図



Fig.94 S B 01遺物出土状況図

ラミガキ調整を施す。417は口径21.0cm、口縁端部は上方に拡張され、外面には2条の振凹線文を施した後2個1対の竹管文付円形浮文を付す。外面はハケの後ヘラミガキ、内面はヘラミガキ・ハケ調整を施す。418は口径10.0cm、口縁部は大きく外方に広がり、端部は下方に大きく下垂している。頭部と体部の境界付近に断面三角形の貼付突帯が巡り、その上下に刺突列点文を施す。外面はハケ、内面は横方向のヘラミガキ調整を施す。

#### 長頸型

419は口径14.4cm、頭部はやや外方に向かって延び、口縁部は大きく外方に広がり、端面には2条の振凹線文を施す。外面には細かいヘラミガキ調整を施す。420は口径11.5cm、器高20.75cm、底径4.2cm、口頸部は円球形の体部から外方に広がり広口壺状になる。体部下半には3本/cmのタタキ痕跡がみられるが、上半は丁寧なヘラミガキ調整が施され、わざわざにタタキの痕跡が確認できるのみである。内面はハケで調整するが、体部内面には接合痕が明瞭に残る。

#### 壺体部

421は小型、422は中型品で、いずれも外面に細かいヘラミガキ調整を施す。423は最大径が胴部上半にあり、頭部と体部の境界付近に刺突列点文を施す。頭部内面には指頭圧痕が残る。

#### 壺

424は口径18.3cm、器高20.85cm、底径3.5cmである。口縁部は緩やかに外反し、体部は若干丸みをもった形態となる。外面はタタキ、内面はハケ調整を施す。425は口径18.0cm、器高21.5cm、底径4.2cmである。口縁部は、外反しナデ調整により端部を上下に拡張し端面を形成する。外面中央は、タタキの後にハケ調整を施す。426は口径17.2cm、器高21.3cm、

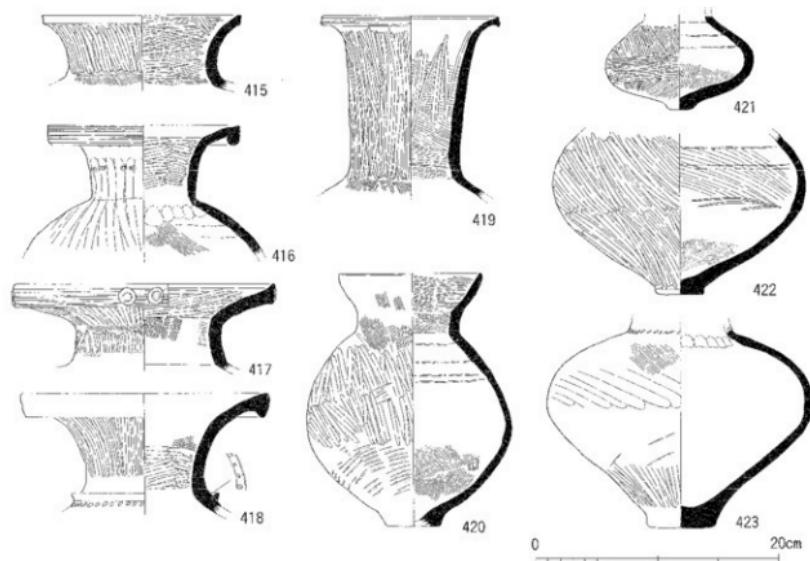


Fig.95 SB01出土遺物(1)

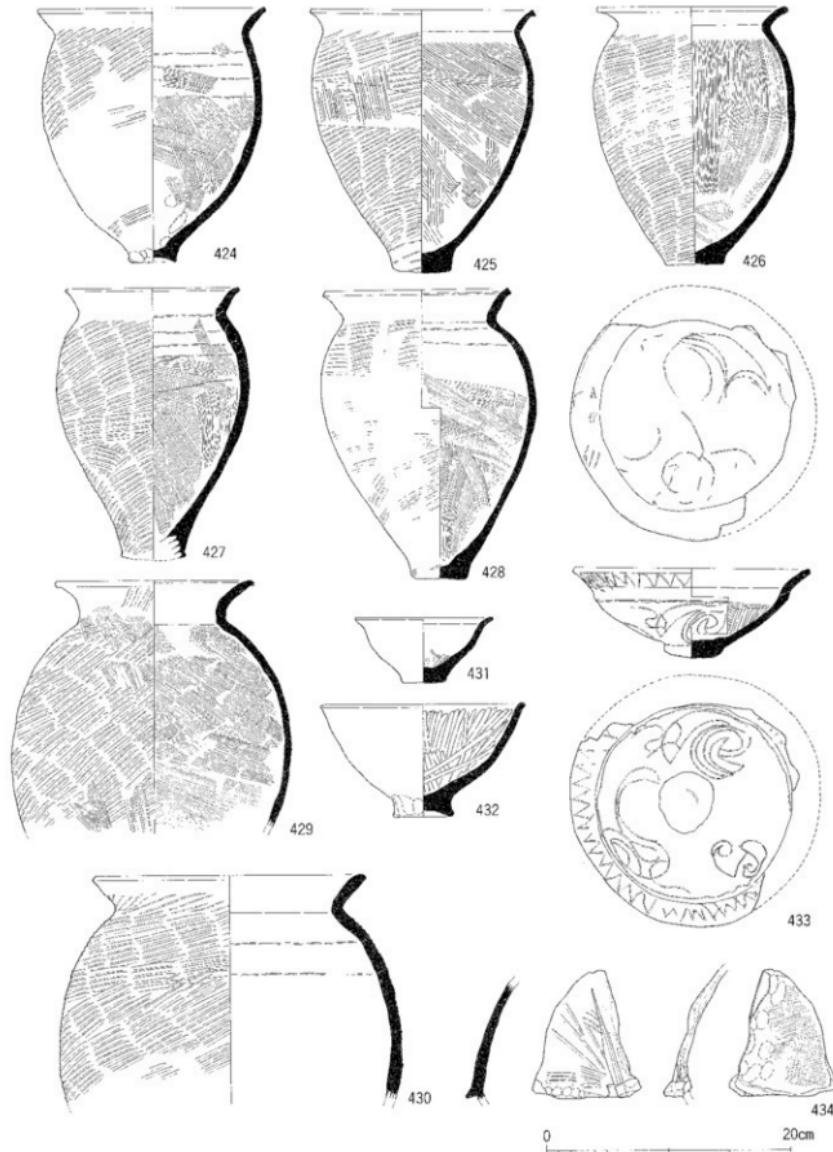


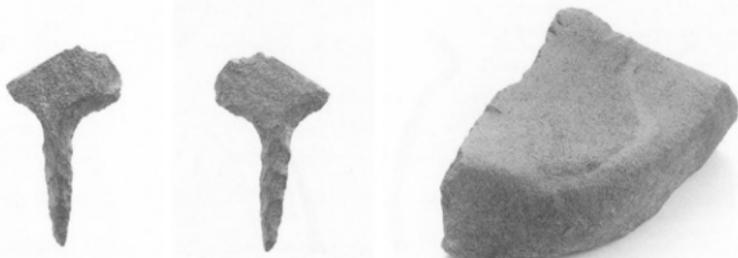
Fig.96 S B01出土遺物(2)

底径4.6cmである。口縁部は強く外反し、体部はあまり胴が張らない。外面はタタキ、内面はハケを施す。427は口径16.0cm、器高22.2cm、底径5.0cmである。口縁部は緩やかに外反し端部で強くナデ調整を施しさらに外反する。体部は器高に比べ胴が張らず、スマートな形態である。外面はタタキ、内面はハケ調整を施す。ただし、内面には明瞭に接合痕跡が残る。428は口径15.0cm、器高23.8cm、底径3.8cmである。口縁部は緩やかに外反し、端部で強いナデ調整を施す。外面上半を除き、タタキ痕跡を丁寧にナデ消している。429は口径15.8cmで、口縁部は大きく外反し端部で強いナデ調整を施しさらに外反させる。体部は球形に近い。外面はタタキ、内面はハケ調整を施す。430は口径21.8cmの大型品である。口縁部は外反し、端部は丸く仕上げる。これも体部は球形に近いものと考えられる。

鉢 431は口径12.2cm、器高5.3cm、底径3.2cmの小型品で、口縁端部は大きく外反する。432は口径16.0cm、器高9.25cm、底径5.6cmである。口縁端部はわずかに外反する程度である。内面には丁寧なヘラミガキ調整を施す。

絵画土器 433は口径19.0cm、器高7.35cm、底径4.1cmの鉢である。口縁部は外側に稜をつくり斜め上方に立ち上がり、口縁部体部との間に接合痕が残る。口縁部外面には縄文文風のヘラ描文が施されている。体部は浅くやや内湾気味に立ち上がり、その内外面に絵画を施している。体部内面には3本/cmのヘラミガキ、外面は丁寧なナデ調整により仕上げている。胎土はやや粗く、2mmほどの石英・チャート・クサリレキなどが多く含まれる。また、焼成は良好である。器面に施されたヘラ描絵画は、外面には3つ描かれている。図像は、渦巻き状の部分から三日月状の線刻が伸びるのが2つ、巴文状の線刻が複数描かれているものが1つの計3つで構成されている。また、内面は碇形・円形の線刻が描かれている。外面の線刻は、この時期によく描かれるといわれる竜を模したもの、内面の碇形の線刻は、岡山県などで見られる人面文の省略形ではないかと考えられる。

手始形土器 434は覆部右側部分で、開口部・掘部とも指頭圧痕が認められ、外面は3本/cmのタタキ、内面には7本/cmのハケ調整が施してある。また、覆部の開口部外面には幅8mmほどの棒状のものを通して溝が上下に通り、掘部にはそれを跨ぐように粘土紐を付す。紐または、棒状のものによる補強の痕跡と考えられる。



H (表)

H (裏)

I

Fig.97 SB01出土石器

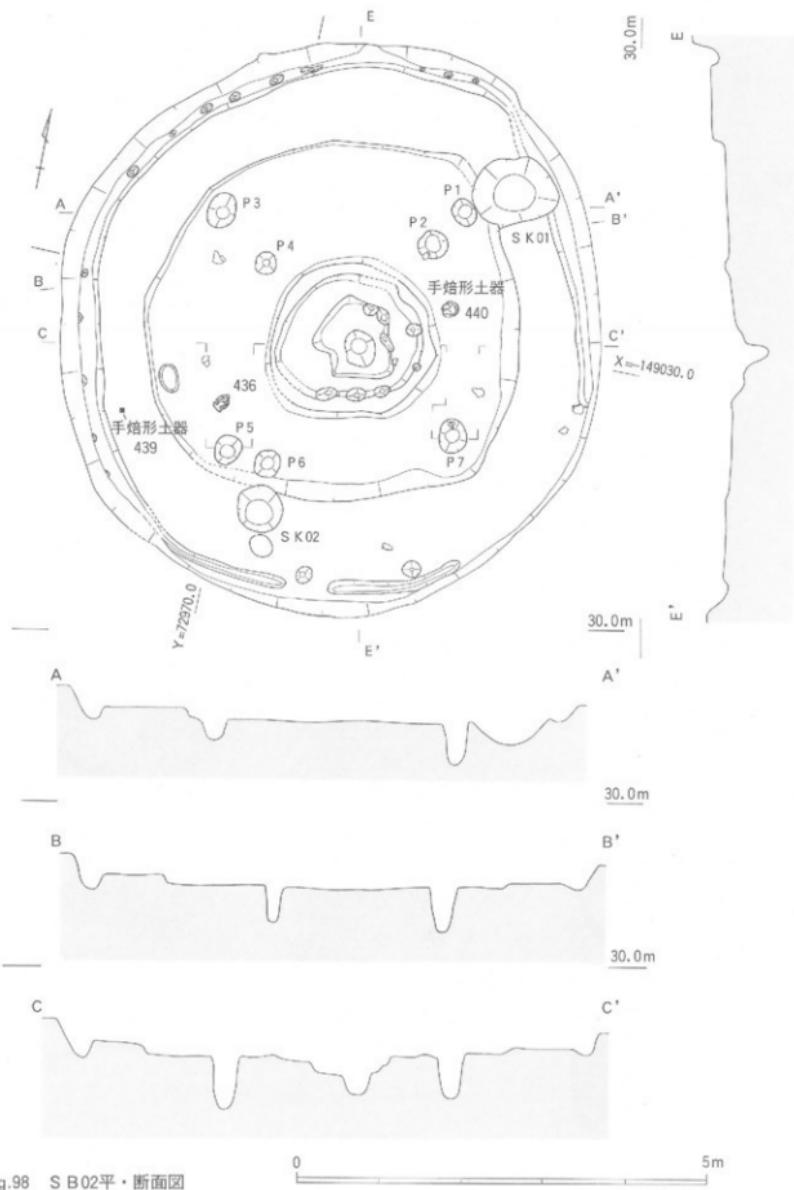


Fig.98 S B 02平・断面図

石器

Hはサヌカイト製石錐で、長さ4.40cm、最大幅2.50cm、錐部幅0.50cm、厚さ0.40cm、重量2.6gである。錐部は頭部より長く境界から2.80cmある。先端が若干欠損するがほぼ完形品である。Iは砂岩製磨石である。長さ1.53cm、幅1.12cm、厚さ6.43cm、重量1318.0gである。作業面は2主面で、両面ともよく使い込まれており大きく凹んでいる。

これらの遺物から弥生時代後期後半のものと考えられる。

S B02

1区西端と3区で検出された遺構で、直径7.0m、深さ0.2~0.6mの円形堅穴住居である。主柱は4本で、直径0.6m、深さ0.5m程度の中央土坑があり、底付近では柱痕跡状を呈し、中央土坑の周りには土手状の高まりが確認されている。埋土からは炭が若干検出されている。周壁溝は、幅0.15m、深さ0.2mの規模で、溝内に直径0.1m前後、深さ0.2mのピットが等間隔に検出された。溝埋土からは、鉄製刀子Jが1点出土している。また、幅約1.0m、高さ約0.1m程度のベッド状造構が検出され、南西部では不明瞭ではあるが、全周していたものと考えられる。東・北側では地山を削り出し、西・南側では盛土によって形成されており、その盛土内より手焼形上器439が出土している。また、中央土坑の傍からも手焼形上器440が出土している。貯蔵穴は2基検出されており、1基は東側のベッド状造構上に掘削されたもので、直径0.6m、深さ0.3mの規模である。内部からは少量の弥生土器が出上したのみであった。もう1基は西側で検出されたもので、直径0.4m、深さ0.3mの規模である。なお、主柱穴に近くにはほぼ同規模の柱穴が存在し、建て替えが行われたものと考えられる。

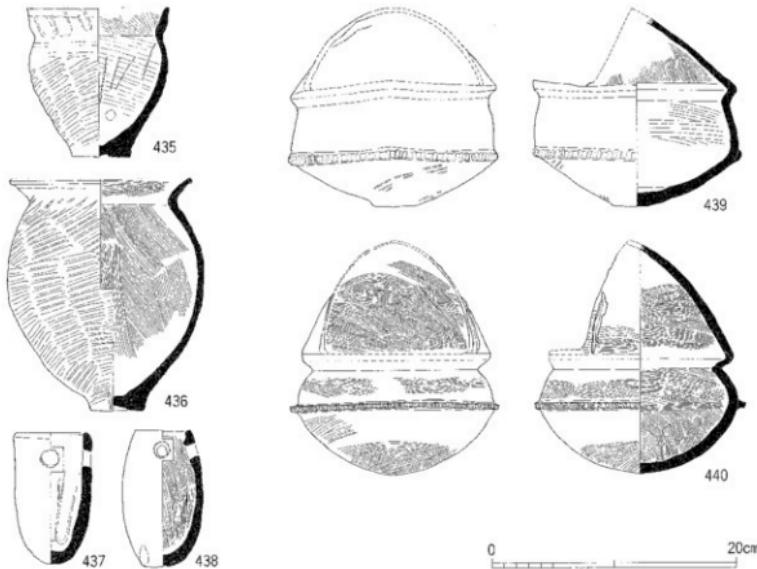


Fig.99 S B02出土遺物

埋土からは、弥生時代末～古墳時代初頭の甕435・436、タコツボ437・438、手焙形土器439・440が出土した。435は甕で、口径11.2cm、器高12.2cm、底4.4cmで、全体的に粗雑な作りの土器である。外面は粗いタタキ、内面はハケを施す。436は甕で、口径14.6cm、器高19.0cm、底径4.0cmで、歪みはあるものの球形に近い。外面はタタキ、内面はハケ調整を施す。437・438はほぼ同様の法量をもつ砲弾形のタコツボで、438は全体的に丸みを帯びた形状で、内面にはハケ調整を施す。439はベッド状遺構内から出土した手焙形土器で、口径15.8cm、推定器高16.3cm、底径2.5cmである。鉢部に対して覆部が小さく、覆い角度も緩い。また、鉢部口縁部は受け口状になり、中央下半には刻み目をもつ突帯を1条貼り付ける。体部下半にはタタキ痕跡が残る。440は、中央土坑付近で出土した手焙形土器である。口径15.4cm、推定器高19.2cmである。鉢部とほぼ変わらないほどの背高の覆部をもつ。覆部と鉢部の接合部には、長さ5cm、幅1cm弱の耳を付す。鉢部は丸底で、体部中央に刻み目をもつ突帯を1条貼り付ける。439・440どちらの覆部端部内面にもスス状に薄黒く変色した箇所が見られる。Jは、周櫛溝内から出土した鉄製刀子で、残存長8.0cm、幅1.3cm、厚さ0.3cmである。砥石Kは砂岩製で、長さ8.18cm、幅5.00cm、厚さ3.94cm、重さ300gである。形態は直方体で作業面は2主面と考えられる。

これらの遺物から弥生時代末～古墳時代初頭のものと考えられる。

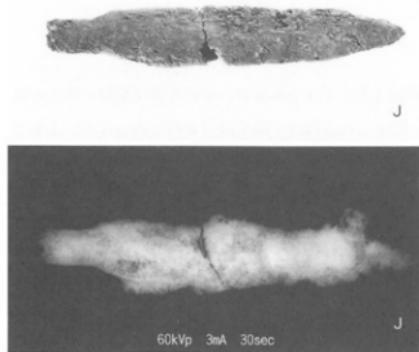


Fig.100 S B02出土鉄製品

落ち込み

6ヶ所で落ち込みを検出した。いずれも浅くなだらかに落ち込むもので、埋土からは弥生土器小片が出土している。

その他遺物

P13からは石鎌1点が出土した。Lは凹基式の石鎌で長さ2.33cm、幅1.66cm、厚さ0.40cm、重量1.0gである。全体に風化が激しい。

表土探集ではあるが、小型の柱状片刃石斧Mが出土した。長さ6.20cm、幅1.66cm、厚さ0.4m、重量49.2gで、表面は滑らかに仕上げられる。材質はおそらく凝灰岩と考えられる。



Fig.101 S B02出土石器

K



Fig.102 S P 13出土石鎌

L (表)

L (裏)

M

Fig.103 表土採集石斧

房番号	出土地区	出土類型	遺物名	空中重量(g)	水中重量(g)	体積(cm³)	比重	石材名	時期
1区	S B01	上層		2.05	1.3	0.75	2.73	結晶片岩	弥生時代末～古墳時代初頭
				906.3	524.4	381.9	2.37	砂岩	弥生時代末～古墳時代初頭
			黒灰色シルト質 細砂	554		242	2.29	砂岩	弥生時代末～古墳時代初頭
1区西半	S D01	埋土		204	122.9	81.1	2.52	砂岩	弥生時代中期中葉
1区西半	S B02	上層ピット		85.9	53.2	32.7	2.63	礫岩	古墳時代？
1区東半	S B01	上層		87.6	48.2	39.4	2.22	砂岩	弥生時代末～古墳時代初頭
87-B	1区	S D01	下層 大型蛤刀石斧	56.2	38	18.2	3.09	綠閃岩	弥生時代中期中葉
	1区	S D01	下層	181.5	104.1	77.4	2.34	砂岩	弥生時代中期中葉
101-I	3区	S B02	床面	300	187.6	112.4	2.67	砂岩	弥生時代末～古墳時代初頭
103	2区	表深	柱状片刃石斧	49.2	31.4	17.8	2.76	凝灰岩？	弥生時代

Fig.104 石材鑑定表

#### 4. 小結

今回の調査では、弥生時代中期の遺構は溝と土坑であるが、中でも溝は規模・形状の点から環濠の一部と考えられる。また、出土した遺物は中期中葉のものであったが、上層では凹線文を施す土器も見られることから、廃絶後もしばらく開口していたと考えられる。

次に弥生時代後期・弥生時代末～古墳時代初頭の住居が検出され、当時の集落の様子がわざかながら明らかになった。S B01から出土した大量の弥生時代後期後半～末期の土器には、手焙形土器・絵画土器・穿孔土器などの特殊な土器があることや、甕を集めただよう状況が観察できるなど、ここが何らかの祭祀行為を行われた場所であった可能性が高い。S B02は遺存状態がよく、ベッド状遺構や中央土坑の土手などが比較的良好に検出された。また、出土した手焙形土器は、その希少性から祭祀遺物と考えられており、居住者の性格を考える上で重要な資料といえる。

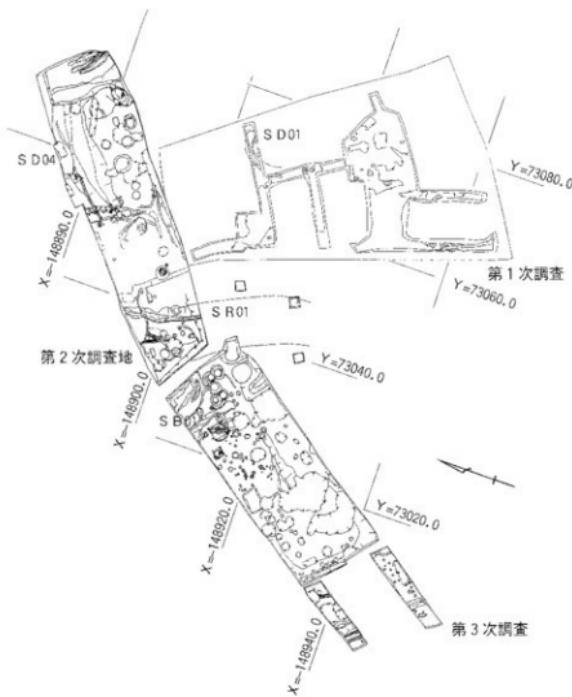
なお、第4次調査の一部の石材に関しては、(株)京都フィッショントラック 檀原徹氏に鑑定を依頼し、Fig.104は、その鑑定結果である。

註(1) 甲斐昭光編 『神戸市 玉津田中遺跡 第5分冊(竹添地区・池ノ内地区的調査)』一田中特定土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書一 兵庫県文化財調査報告第135-5冊 兵庫県教育委員会 1996

### 第3章　まとめ

最後に今回の調査成果を時代毎に概観し、まとめに代えたい。

- 江戸時代　　第2・3次調査で確認され、主な遺構は、庄屋敷に伴う庭園関連遺構である。特に水琴窟・飛び石設置痕跡・圓池状遺構は、当時の有力者層であった庄屋の優雅な生活ぶりがしのばれる資料と言える。
- 古墳～室町時代　この時期は、遺構・遺物が若干確認されたのみである。鎌倉～室町時代については、松岡城との係わりから、今後の調査で建物跡などの遺構が検出される可能性が高い。
- 古墳時代後期には、遺跡の周辺に大手古墳群をはじめ数基の古墳が存在するため、集落が営まれていたと考えられるが、今回の調査では、建物は1棟検出されたのみであった。
- 弥生時代　　今回の調査で最もまとまって遺構・遺物が確認された時代である。
- 第2次調査のS R01・S D04や、第4・6次調査の環濠状の大溝S D01から中期中葉の土器が数多く出土した。また、平成14年度に宅地造成に伴い、第6次調査地の北西100mの地点で調査を行ない、ここでも遺構に伴い多くの土器が出土した。おそらく、この時期の集落は、S D01を境に北側に存在していたものと考えられる。
- 後期・末期は、計3棟の竪穴住居が検出された。しかしこれらの住居は、出土した遺物からわずかに時期が異なると考えられ、後期～末期まで継続して集落が営まれていたと考えられる。また、第4次調査の堅穴住居からは、手焙形土器や絵画土器などの祭祀関連遺物が出土した。
- 手焙形土器　手焙形土器については、高橋一夫氏が詳細な研究を行っている<sup>(1)</sup>。それによると、弥生時代後期後半～古墳時代初頭に限り見られる上器で、古墳や住居址からの出土が多く、完形で出土する比率が高い。氏は、古墳などから出土するものは祭祀に使用したもの、住居址から出土するものは、保管中のものと論じている。またその形態や、内面にススの付着するものが見られることから、内部で火を灯して使用するものと考えている。今回出土したものは、いずれも住居址から出土し、3個体中第4次調査SB 02から出土した2個体(439・440)が完形で復元できるものであった。435は、床面に原位置を留めて出土し、保管状態のものと考えられる。一方、439は、ベッド状遺構を形成する盛土内から出土したことから、屋内での祭祀に使用されたものと考えられる。なお、両者の開口部内面にはスス状の若干薄黒い部分があり、火を使用していた可能性がある。また、SB 01から出土した430は、破片ではあるが、前節で記したように特異な耳の形状を持っており、耳の新たな種類として貴重な資料であるといえる。
- 絵画文器　絵画土器は、一般に中期後半に多く、後期になると図像が抽象化され、記号に変化するといわれている<sup>(2)</sup>。後期の図像の代表例は、龍をモチーフにしたもののが挙げられ、大阪府・奈良県・岡山県で類例が報告されている。また、線刻される土器の種類も壺が大半で、高壺・器台などにもわずかに見られる。今回出土したものは、鉢の内外面に計5個の図像が線刻されたものである(Fig. 106)。通常絵画土器は、壺など据え置いた状態で正面から見るものが多いが、その形態上、上から覗き込むように見ると考えられる。外側の線刻a・bは前章でも触れたように、龍と考えられるものである。先学によると龍の線刻は抽



綱かけ部は、弥生時代の遺構



Fig.105 大手町遺跡全体平面図



象化されると、渦巻き状に変化するようで、bはその典型と考えられる。aは、bと比べると具体的で、長く伸びた部分が首のように見える。cは、巴文などを組み合わせた図像で、具体的な図像は不明であるが、何かの顔のようにも見える。一方、内面は外面に比べ線刻が薄く、図像も抽象的なものであるといえる。dは、碇形の線刻とそれに沿うように数本の線刻・左端から弧状の線刻が施されている。この線刻は、形状の類似性から愛知県や岡山県で出土する人面文に共通するものと考えられる。人面文は、鯨面と呼ばれる刺青を表現するもの<sup>(3)</sup>と言われ、また最近では、この文様が祖先を描いたものであるという学説もある<sup>(4)</sup>。このように今回出土したものは、それぞれに特異な図像をパノラマ状に配置することにより、当時の信仰などを表現したものと考えられる。

#### 戎町遺跡

大手町遺跡を考える上で重要なのは、妙法寺川を挟んで対岸に位置する戎町遺跡である。戎町遺跡は前京でも触れたが、弥生時代前期に水田が開かれた遺跡で、中期には拠点的な集落として繁栄した。現在まで神戸市教育委員会が中心となり、多くの発掘調査が行われ詳細が解りはじめた。その結果、集落の中心的な時期は前期後半、中期中葉、末期で、特に中期中葉は遺構や、遺物量が多く最も繁栄したと考えられる。

一方、大手町遺跡は、今回の報告で弥生時代において中期中葉、後期～末期に集落が存在したことが判明した。これは、戎町遺跡の繁栄期と重なり何らかのつながりが想定される。そこでそれぞれの立地状況をみると、前者は扇状地の末端部分で大きく広い平地、後者は舌状に張り出す丘陵上に位置している。おそらくは眺望の良さから戎町遺跡から派生した枝村として形成されたものと考えられる。

#### 縄文時代

ほとんどは晩期の突起上器であるが、山形文を施す神並上唇式の土器片がわずかに出土しており、早期前半にまでさかのばる資料を得た。

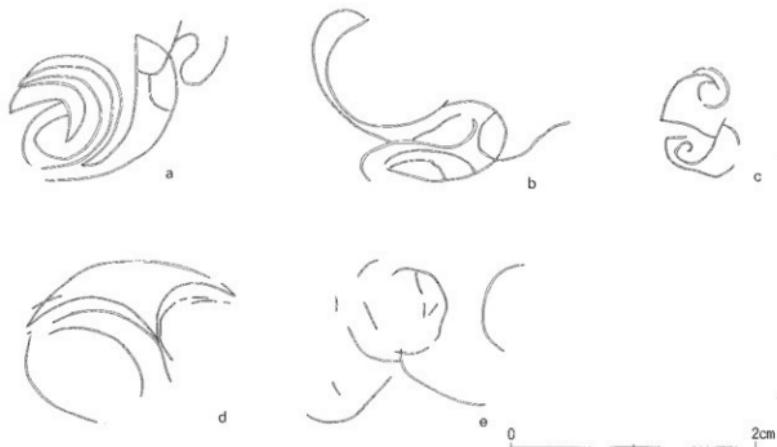


Fig.106 第4次調査SB01出土絵画土器の図像



Fig.107 大手町および戎町遺跡周辺微地形図 ( $S = 1/10000$ )

註

- (1) 高橋一夫 「手焼形土器の研究」 六一書房 1998
- (2) 春成秀爾 「絵画から記号へ—弥生時代における農耕儀礼の盛衰—」『国立歴史民俗博物館研究報告 第35集』 国立歴史民俗博物館 1991
- (3) 設楽博己 「線刻人面土器とその周辺」『国立歴史民俗博物館研究報告 第25集』 国立歴史民俗博物館 1990
- (4) 萩田英樹 「弥生時代の顔 一人面文と投影文からみた祖靈觀について—」『環瀬戸内海の考古学 一平井 勝氏 追悼論文集』 古代吉備研究会 2002

写 真 図 版



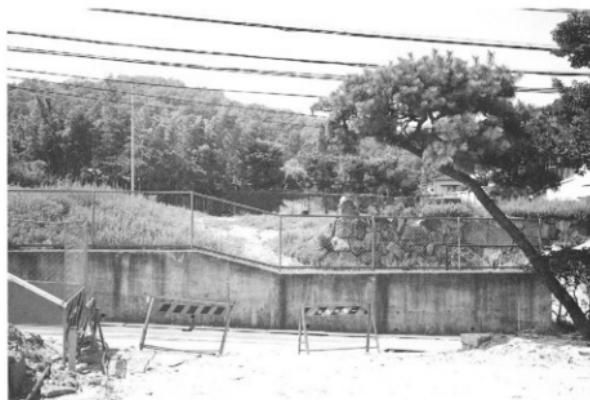




大手町遺跡近景(南から)

写真図版 2

第1次調査



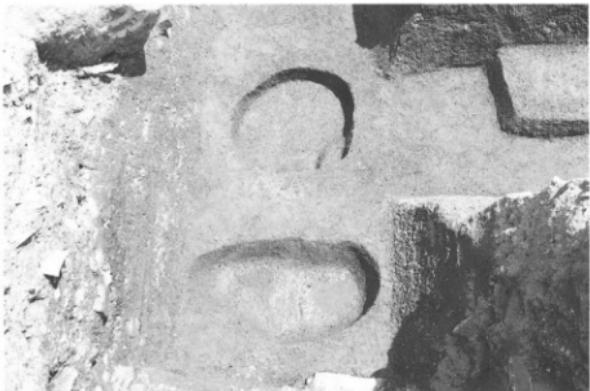
1 調査地現況(南東から)



2 3 トレンチSD01全景  
(西から)



3 5 トレンチSD01  
土器検出状況(西南から)



1 5 トレンチSK01・SK02  
(北西から)

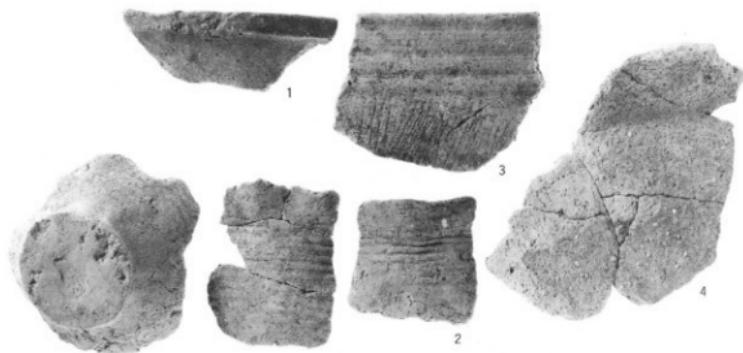


2 6 トレンチ全景  
(西から)

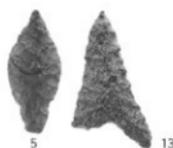


3 6 トレンチSK06  
(南東から)

写真図版 4  
第1次調査



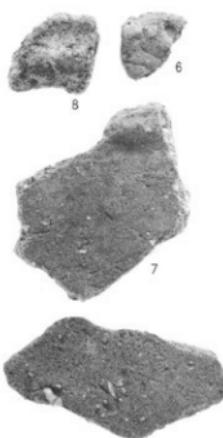
1 SD01出土遺物



2 SK01・6 トレンチ出土の石鏃

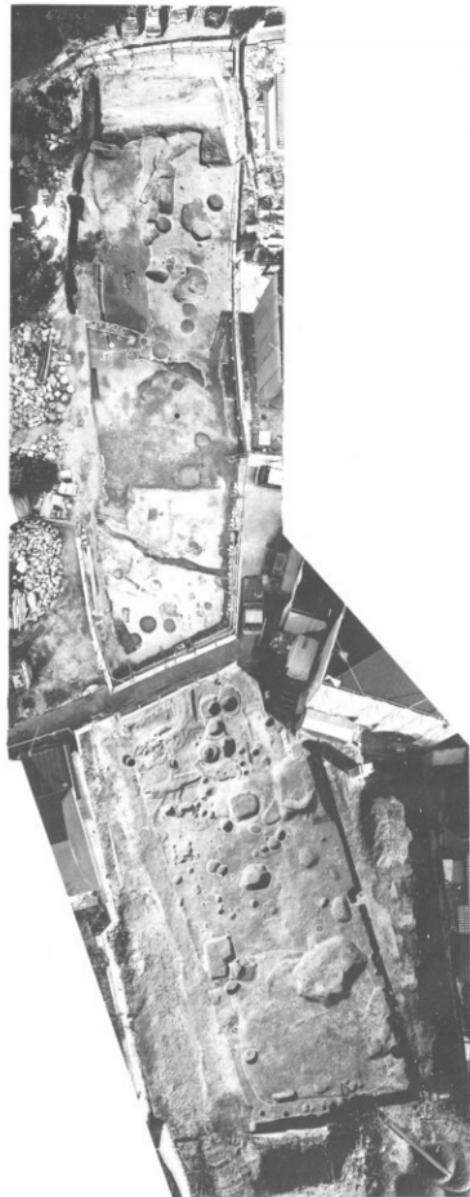


3 SK04出土遺物



14

4 SK06出土遺物



調査地全景

写真図版 6  
第2次調査



1 第2次調査 調査地東部東半(北東から)



2 SX02粘土堆(北から)



3 SX02土層断面(南東から)